

蔵王町文化財調査報告書 第3集

都 遺 跡 ほか

2005年（平成17年）3月

蔵王町教育委員会

都 遺 跡 ほか

例 言

1. 本書は経営体育成基盤整備事業 円田2期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）に伴う、都遺跡・窪田遺跡・新城館跡の平成15・16年度の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査及び本書の作成は、蔵王町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て蔵王町教育委員会社会教育課が担当した。
3. 発掘調査及び資料の整理・報告書の作成に際して、以下の方々・機関からご指導、ご助言を賜った。記して謝意を表する（敬称略、順不同）。
須藤 隆・進藤秋輝・高野芳宏・相原淳一・菊地逸夫・山田晃弘・村田晃一・吉野 武・吾妻俊典・小島亮治・宮城県教育庁文化財保護課・東北歴史博物館・多賀城跡調査研究所・白石市教育委員会・柴田の郷土館・村田町教育委員会・蔵王町土地改良区
4. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000の地形図「村田」を複製して使用した。
5. 本書における土色の記述については、「新版標準土色帖」（小川・竹原：1973）を参照した。
6. 本書で使用した測量原点の座標値は日本測地系（改定前）に基づいており、国家座標第X系による。各測量原点の座標値は第3章に示した。
7. 本書の挿図に記した方位表示における北は磁北である。
8. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、発掘現場で付されたものをそのまま使用した。遺構記号は以下のとおりである。
SB：掘立柱建物跡 SI：竪穴住居跡 SA：柱穴列 SD：溝跡・河川跡 SE：井戸跡
SK：土壇
9. 報告書における遺構・遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりで、それぞれスケールを付して示した。
遺構実測図 1/100、1/60、1/20
遺物実測図 土器：1/3 石製品・金属製品・石器：2/3、瓦1/5
10. 本書における土師器の記述については、成形にロクロを使用しないものを「土師器」、使用したものを「ロクロ土師器」と表記した。
11. 土器観察表の法量は、高坏については、口径＝坏部口径、底径＝裾部径に対応する。また、（ ）で示した数値は残存値もしくは推定復元値である。
12. 出土遺物の器面に赤彩・黒色処理が施されている場合には、遺物実測図においてスクリーンでそれぞれ示した。
13. 本書の執筆、遺構・遺物のトレース、遺物写真撮影は佐藤洋一・庄子善昭・小泉博明・齋藤史佳・庄子裕美・一條 隼・佐藤麻実子・鈴木里香・寺島むつみが行った。
14. 発掘調査及び本書作成に関する記録資料・図版や出土遺物は蔵王町教育委員会が保管している。

目 次

例 言

目 次

挿図目次

調査要項

第1章 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2章 遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

1. 位置と地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

2. 周辺の遺跡と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第3章 発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

1. 調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

2. 基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

都遺跡の発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

I. 発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

I-1. A区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

I-2. B区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

I-3. C区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

I-4. D区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

I-5. その他の出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

I-6. 都遺跡出土の瓦について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

II. 考 察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

II-1. 遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

II-2. 遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61

III. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

引用・参考文献

写真図版

窪田遺跡の発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87

I. 発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88

I-1. 1区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88

I-2. 2区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88

I-3. その他の出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98

II. 考 察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101

II-1. 遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101

II-2. 遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102

Ⅲ. まとめ	105
引用・参考文献	
写真図版	

新城館跡の発掘調査	117
Ⅰ. 発見された遺構と遺物	118
Ⅰ－1. A・B区	118
Ⅰ－2. その他の出土遺物	124
Ⅱ. 考 察	126
Ⅱ－1. 遺物について	126
Ⅱ－2. 遺構について	127
Ⅲ. まとめ	129
引用・参考文献	
写真図版	

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2図 都遺跡・新城館跡・窪田遺跡調査区配置図	6

都遺跡

第1図 A区全体図	10
第2図 A2区遺構配置図	11
第3図 SD8溝跡、SK9土壌	12
第4図 SK9土壌出土遺物	12
第5図 B区全体図	14
第6図 B区遺構配置図	15
第7図 SI1a竪穴住居跡	16
第8図 SI1b竪穴住居跡・SK10土壌	17
第9図 SI1b竪穴住居跡出土遺物	18
第10図 SA1塀跡・SD1溝跡、SD2溝跡断面図	18
第11図 SK1・SK2土壌	19
第12図 SD1溝跡出土遺物	20
第13図 C区全体図	22
第14図 C1区遺構配置図	23
第15図 SD5・6・7溝跡・SD12河川跡断面図	24
第16図 SD5・7・12溝跡出土遺物	25
第17図 C2区遺構配置図	26

第18図	S I 2 竪穴住居跡	27・28
第19図	S I 2 竪穴住居跡出土遺物（1）	29
第20図	S I 2 竪穴住居跡出土遺物（2）	30
第21図	S I 2 竪穴住居跡出土遺物（3）	31
第22図	S A 2 塀跡・S D 3 溝跡断面図	32
第23図	S K 3・4・5・6・7・8 土壙	34
第24図	D 区全体図	35
第25図	D 2 区遺構配置図	36
第26図	S E 1 井戸跡	37
第27図	S E 2・3 井戸跡、S D 10 溝跡	39
第28図	S K 11 土壙	40
第29図	S E 1 井戸跡・S D 10 溝跡・S K 11 土壙出土遺物	40
第30図	その他の出土土器（1）	43
第31図	その他の出土土器（2）・青磁	44
第32図	中世陶器・瓦・鉄製品	45
第33図	土製品・石製品	47
第34図	石製品・石器	48
第35図	砥石	49
第36図	弥生土器	50
第37図	採集瓦	54

窪田遺跡

第1図	1 区・2 区遺構配置図	89
第2図	S I 1 竪穴住居跡	90
第3図	S I 1 竪穴住居跡出土遺物	91
第4図	S I 3 a 竪穴住居跡	92
第5図	S I 3 b 竪穴住居跡	94・95
第6図	S I 3 b 竪穴住居跡出土遺物	95
第7図	S I 4 竪穴住居跡	96
第8図	S K 1・2 土壙	97
第9図	その他の出土遺物（1）	99
第10図	その他の出土遺物（2）	100

新城館跡

第1図	調査区全体図	119
第2図	A 区遺構配置図	121
第3図	S B 1～7 柱穴断面図	122
第4図	S D 1 溝跡断面図	123
第5図	S K 1・3 土壙断面図	124
第6図	出土遺物	125

調 査 要 項

遺 跡 名：都 遺 跡（みやこいせき） 宮城県遺跡地名表登載番号05015
窪田遺跡（くばたいせき） 宮城県遺跡地名表登載番号05193
新城館跡（しんじょうたてあと） 宮城県遺跡地名表登載番号05049

所 在 地：宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字都・字窪田、字田中、大字小村崎字扇田

調査原因：経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）円田２期地区

調査主体：蔵王町教育委員会

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課

調査担当：蔵王町教育委員会社会教育課

調査期間：都遺跡・新城館跡 平成15年5月12日～7月31日
窪田遺跡 平成15年11月25日～12月10日
窪田遺跡（追加調査） 平成16年3月10日～17日

調査面積：都 遺 跡 約4,420㎡
新城館跡 約1,890㎡
窪田遺跡 約2,030㎡
窪田遺跡（追加調査） 約 150㎡

調 査 員：都遺跡・新城館跡
蔵王町教育委員会 佐藤洋一
宮城県教育庁文化財保護課 佐久間光平・奥山芳明
窪田遺跡
蔵王町教育委員会 佐藤洋一
宮城県教育庁文化財保護課 天野順陽 千葉直樹 三好秀樹
奥山芳明
窪田遺跡（追加調査）
蔵王町教育委員会 佐藤洋一

協 力：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区

第1章 調査にいたる経緯

蔵王町北東部に位置する円田盆地における経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）では、昭和63年度に盆地南部（円田1期地区）の埋蔵文化財保存協議がなされ、同年～平成2年度にかけて対象地区内の遺構確認調査及び事前調査が宮城県教育庁文化財保護課によって実施された。

一方、盆地中・北部（円田2期地区 対象面積約1,325,000㎡）の埋蔵文化財保存協議は、宮城県教育庁文化財保護課、蔵王町教育委員会社会教育課、宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区の四者によって平成8年度より開始された。

平成11年度の協議で対象地区の詳細な分布調査の必要があると判断されたことを受け、平成12年度に蔵王町教育委員会が対象地区の分布調査を実施した結果、当初から周知されていた遺跡の範囲が大きく広がることが判明した。この結果を基に再協議を行い、遺跡の破壊される面積を極力少なくするよう開発計画を大幅に見直すことが決定した。平成13年度、大河原地方振興事務所より、水田及び畑地となる部分については、遺構面を保護するよう適宜盛土を行うとともに、幹線農道以外の作業用道路については、未舗装の砂利道として事前調査対象範囲を極力減少させる見直し案が提示され、合意に達した。

平成13・14年度に宮城県教育庁文化財保護課・蔵王町教育委員会によって対象地区内の遺構確認調査が実施され、平成14年度には、確認調査の成果を盛り込み、平成15・16年度に対象地域の南部を、平成17～21年度に北部を開発する最終的な計画が提示された。対象地区内の遺跡については、平成15年度に南部の、平成17～20年度に北部の事前調査を実施することが決定した。

本書において報告する発掘調査成果は、本開発計画における事前調査の1年目にあたる平成15年度発掘調査範囲（開発対象地区南部）のもので、平成16年度に整理作業を実施したものである。また、窪田遺跡については、平成16年度に一部区域において追加調査を実施したが、その報告も本書で行っている。

第2章 遺跡の概観

1. 位置と地理的環境

今回調査対象となった都遺跡は刈田郡蔵王町大字平沢字都・窪田に、窪田遺跡は同大字平沢字窪田・田中に、新城館跡は同大字小村崎字扇田に所在する。これらの遺跡は円田盆地の中北部にあたり、都遺跡でみると蔵王町役場から北東約4.0kmに位置する。

円田盆地は、松川の支流である藪川をはじめとする中小河川によって形成された沖積地である。範囲は南北約3.5km、東西約1.2kmに及び、南側を除く三方を丘陵に囲まれている。盆地の中央を藪川が緩やかに蛇行し、辺縁の丘陵からは小規模な沢が流入している。これらの中小河川は盆地東側で随時合流しつつ南下する。この藪川流域は自然堤防が未発達で、グライ化の進んだ低湿地となっている。

円田盆地を三方から囲う丘陵は、奥羽山脈から派生した高館丘陵の一部をなし、盆地北及び東側が愛宕山丘陵、西側が高木丘陵と呼称されている。愛宕山丘陵は標高150m程の南北に連なるやや急な傾斜をもつ丘陵地で、小規模の沢によって形成された比高差が大きい舌状丘陵が連なっている。盆地東側に分布する遺跡の多くが、この舌状丘陵上に立地する。一方、高木丘陵は比較的低平で、丘陵端部は緩やかに標高を減じつつ盆地中央部まで達している。この広大な丘陵上には多数の遺跡が分布し、今回の調査対象である都遺跡・窪田遺跡・新城館跡もこれに該当する。これまでの耕地整理や藪川堤防改修工事の結果、現在は平坦な水田地帯となり地形的な変化に乏しい景観を呈しているが、本来は遺跡が立地する微高地と沢状の低地が複雑に入り組んだ地形であったと考えられる。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境（第1図）

蔵王町内には、旧石器時代から近世にかけて多くの遺跡が分布しており、現在約200ヶ所が確認されている。ここではそれらのなかでも、今回の調査対象である都遺跡などが所在する円田盆地とその周縁に位置する遺跡の様相を概観する。

〔旧石器時代〕

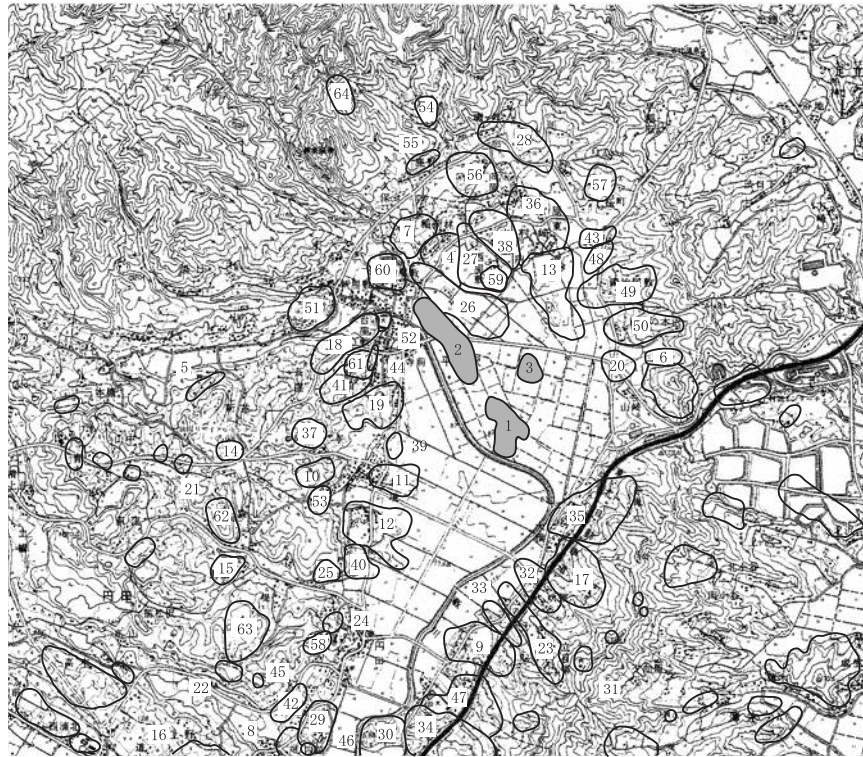
旧石器時代の遺跡には、前戸内遺跡がある。未発掘であるが、槍先形尖頭器が採集されている。

〔縄文時代〕

縄文時代の遺跡には、諏訪館前遺跡・都遺跡・本宿前遺跡・中組遺跡・清水遺跡・小高遺跡・窪田遺跡・堀の内遺跡などがある。盆地の両側の丘陵斜面や微高地に位置し、集落跡は未検出だが、縄文時代早期～晩期の土器の散布が認められている。このうち、盆地西側に位置する窪田遺跡・堀の内遺跡などでは落とし穴とみられる土壌が調査されている。

〔弥生時代〕

縄文時代との複合遺跡である諏訪館前遺跡・小高遺跡など以外では、赤鬼上遺跡・屋木戸内遺跡・大柿内遺跡などがある。町内では該期の遺構は未検出であるが、遺跡は中期後葉の円田式以降とみら



0 500 1000 1500 2000m
(S=1/50,000)

No.	遺跡名	種 別	時 代	No.	遺跡名	種 別	時 代
1	都遺跡	集落	縄文後期・弥生・古墳・古代	33	中沢B遺跡	包含地	弥生・古墳・古代
2	窪田遺跡	集落	縄文・古墳・古代	34	塩沢北遺跡	集落	弥生・古墳・古代
3	新城館跡	集落・城館	古代・中世	35	赤鬼上遺跡	包含地	弥生・古代・中世
4	前戸内遺跡	包含地	旧石器・縄文後・古代	36	原遺跡	水田・包含地	弥生・古代
5	三本槻遺跡	包含地	縄文早期	37	大柿内遺跡	包含地	弥生
6	山崎遺跡	包含地	縄文早期	38	戸ノ内遺跡	集落	弥生・古代・中世
7	稲荷林遺跡	包含地	縄文早期・古代	39	堂の入遺跡	包含地	弥生・古代・中世
8	戸の内脇遺跡	包含地	縄文早・中期・弥生・古墳～中世	40	白山遺跡	包含地	弥生・古墳
9	中沢入遺跡	包含地	縄文早期・弥生・古墳～中世	41	諏訪館遺跡	包含地	弥生・古墳
10	北境遺跡	包含地	縄文早期・弥生・古代・中世	42	土ヶ市遺跡	包含地	弥生・古代
11	中組遺跡	集落・包含地	縄文早・中期・弥生・古代・中世	43	三の輪遺跡	包含地	古墳・古代
12	本宿前遺跡	集落・包含地	縄文早期・弥生・古代・中世	44	諏訪館横穴墓群	横穴墓	古墳
13	六角遺跡	集落	縄文前・後期・弥生・古墳・古代	45	八幡山古墳群	古墳	古墳
14	新並遺跡	包含地	縄文中期	46	宋膳堂古墳	古墳	古墳
15	烏山遺跡	包含地	縄文中期・古代	47	伊原沢下遺跡	集落	古墳
16	上野遺跡	包含地	縄文中期・弥生・古代	48	車地蔵遺跡	包含地	古代
17	大橋遺跡	集落	縄文後期・弥生・古墳・平安	49	鍛冶屋敷遺跡	水田・包含地	古代
18	諏訪館前遺跡	集落・包含地	縄文晚期・弥生・古墳前・中期・古代	50	上葉の木沢遺跡	包含地	古代
19	小高遺跡	経塚・包含地	縄文・弥生・古代・中世	51	丈六遺跡	包含地	古代
20	中葉の木沢遺跡	包含地	縄文・弥生・古代	52	平沢遺跡	包含地	古代
21	角山B遺跡	包含地	縄文	53	沢遺跡	包含地	古代
22	見継遺跡	包含地	縄文	54	鹿野遺跡	包含地	古代
23	立目場遺跡	包含地	縄文・弥生・古墳	55	大久保遺跡	包含地	古代
24	堀の内遺跡	集落・包含地	縄文・弥生・古墳・古代	56	後原遺跡	包含地	古代
25	清水遺跡	包含地	縄文・弥生・平安	57	清上遺跡	包含地	古代
26	十郎田遺跡	集落	縄文・古墳・古代	58	寺坂遺跡	包含地	平安
27	西屋敷遺跡	集落・包含地	縄文・古墳～中世	59	西小屋館跡	城館	中世
28	磯ヶ坂遺跡	包含地	縄文・古代	60	平沢館跡	城館	中世
29	宋膳堂遺跡	包含地	弥生・古墳・平安	61	諏訪館跡	城館	中世
30	台遺跡	水田・包含地	弥生・古墳・古代・中世	62	築館跡	城館	中世
31	愛宕山遺跡	包含地	弥生	63	花館跡	城館	中世
32	屋木戸内遺跡	包含地	弥生	64	兵衛館跡	城館	中世

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

れる。遺跡のほとんどが円田盆地縁辺部に集中し、特に盆地南側で多く確認されている。

〔古墳時代〕

古墳時代の遺跡は、弥生時代の遺跡と重複するものも多く、盆地南側と北西部を中心に分布する。このうち大橋遺跡・諏訪館前遺跡・堀の内遺跡・中沢A遺跡・立目場遺跡などの前期～中期の集落跡の発掘調査が行われ、資料の蓄積が進んでいる。このうち大橋遺跡では3軒の竪穴住居跡が発見され、出土した土器は古墳時代前期の土器編年の指標として用いられている。また、堀の内遺跡では破片資料ではあるものの続縄文土器が発見されている。円田盆地縁辺の丘陵には八幡山古墳群・宋膳堂古墳・西脇古墳・古峰神社古墳・夕向原古墳群などの前方後円墳や円墳の他、十数基からなる諏訪館横穴墓群が分布している。

〔古代〕

古代の遺跡には、堀の内遺跡・都遺跡・沢遺跡・十郎田遺跡・上葉の木沢遺跡・磯ヶ坂遺跡などがある。この時期になると遺跡数が急増し、町内に広く分布するようになる。円田盆地をみると、遺跡の増加は北側で顕著で、広い範囲で遺物の散布が認められる。特に都遺跡では、昭和37～38年の河川改修工事に伴う土取りの際、大量の土器類とともに古代の瓦が出土している。「都」という地名もあることから、古代荏田郡に密接に関わる遺跡として注目される。

〔中世〕

町内で確認されている該期の遺跡は館跡と経塚である。円田盆地縁辺でみると、兵衛館跡・西小屋館跡・平沢館跡・諏訪館館跡・新城館跡などの館跡が北～西側を中心に分布している。このうち兵衛館跡では東北福祉大学によって学術調査が行なわれているが、本格的な発掘調査に至った遺跡はない。この他、戸の内脇遺跡・台遺跡・赤鬼上遺跡・都遺跡などでは中世陶器や渡来銭が出土している。

第3章 発掘調査

1. 調査の方法と経過

今回の事前調査は、遺跡範囲内における道路及び用排水路となる範囲を対象に実施した。そのため調査区は遺跡範囲を東西・南北に通るトレンチ状となり、都遺跡では北からA～D区、窪田遺跡では北から1・2区、新城館跡では東からA・B区を設定した（第2図）。また、各調査区のうち長大なものについては1～3の小区を設定した。

調査基準点は、工事用測量杭を利用して遺跡毎に設定した。都遺跡においてはB区内に設置された測量杭（道路センター杭）のうち2点（T1・T2）を結んだ直線を東西の基準線とした。東西基準線及びこれに直行する南北軸をもとに3mのグリッドを組んだ。グリッドラインはT1を原点（0, 0）とし、東西、南北の方向と距離により表した。都遺跡のA～D区では全てこのグリッドを使用している。

窪田遺跡においては調査区内に設置された測量杭（道路センター杭・幅杭）のうち1区から1点（T3）、2区から2点（T1・T2）を基準点とし、開放トラバースを組んだ。

新城館跡においてはA区内に設置された測量杭（道路センター杭）のうち2点（T1・T2）を結んだ直線を東西の基準線とした。東西基準線及びこれに直行する南北軸をもとに3mのグリッドを組んだ。グリッドラインはT1を原点（0, 0）とし、東西、南北の方向と距離により表した。

各遺跡において設定した基準点の座標値は以下のとおりである。

都遺跡	T1	: X = -209289.087	Y = -12265.341
	T2	: X = -209309.662	Y = -12072.448
窪田遺跡	T1	: X = -208869.910	Y = -12499.256
	T2	: X = -208871.307	Y = -12457.842
	T3	: X = -208828.358	Y = -12457.813
新城館跡	T1	: X = -208904.398	Y = -12175.966
	T2	: X = -208909.202	Y = -12130.948

調査は、バックホーによる表土除去の後、手作業による遺構確認・精査を実施するというもので、必要に応じて平面図・断面図を作成し、35mmカラーリバーサル及びモノクロフィルムを使用して記録写真を撮影した。今回の調査においては、幹線農道及び用排水路部分は工事により地下遺構が影響を受けることから記録保存を前提とした精査を実施したが、未舗装の農作業道の範囲については地下遺構が直接影響を受けないことから遺構分布状況を把握するに止めた。遺物については出土地区・遺構・層位等によって分別して取り上げた。

都遺跡及び新城館跡においては、遺構平面図及び断面図は基本的に縮尺1/20で作成したが、調査区全体図及び遺構分布密度が低い範囲については平板測量により縮尺1/200で作図した。また、都遺跡C1区西端部の溝跡及び河川跡平面図については平板測量により縮尺1/100で作図した。

6頁の第2図において、誤りがありましたので訂正いたします。



第2図 都遺跡・新城館跡・窪田遺跡調査区配置図

中央部は完全に破壊されており、遺構は比較的低標高の遺跡辺縁部にのみ残存することが確認された。確認された遺構のうち破壊を免れないものについて精査を行い、7月31日に調査終了した。

窪田遺跡

平成15年11月25日から実施した。表土を除去し、遺構の分布状況確認が終わった時点で、本来の計画通りに工事を実施する場合、多くの遺構が影響を受けることが判明した。調査日程的にも影響を受ける全遺構の精査は不可能であったため、開発担当者側と協議の結果、ほとんどの遺構を保存するよう設計変更を行うこととなった。その後、破壊を免れないS I 1・S I 14、S D 15の精査を行い、12月10日に調査終了した。

窪田遺跡（追加調査）

平成15年度と同遺跡調査時の協議により保存可能とされていた2区のS I 13が、実施設計の結果破壊を免れないことが判明したため、精査を行う必要が生じた。調査は平成16年3月10日から実施し、S I 13 a・b、S K 1・2の精査を行い、3月17日に終了した。

2. 基本層序

調査区は、本来の地形が微高地と低地が複雑に入り組んでいることから、地点によりその堆積層は様々ではない。調査を実施した遺跡の立地がほぼ同じであることから、概ね以下のように示される。

第Ⅰ層：旧耕作土を含む現代の盛土、畑地・水田耕作土。調査区全体に分布する。

第Ⅱ層：「ノボク」と称される黒色火山灰を起源とする堆積層。層厚は地点によって異なり、比較的標高の高い部分では流失や削平により消滅している一方、低地では砂や礫などを巻き込んで厚く再堆積を繰り返し、未分解植物質を含む層はスクモ層となっている。

第Ⅲ層：いわゆる地山層である。黄褐色のシルト～粘土質のローム層。下層ほど粘性が強くなり、Ⅱ層と接する層の上面に漸移的な変化が認められる。

遺構検出面は、第Ⅱ層上面もしくは第Ⅲ層上面である。

都 遺 跡 の 発 掘 調 査

I. 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡 3 軒、堀跡 2 条、井戸跡 3 基、溝跡 10 条、土壇 11 基、柱穴多数、河川跡 4 条などがある。全体的な遺構密度は極めて低い。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、墨書土器、中世陶器、近世陶磁器、瓦、石製品、土製品、金属製品、石器などがあり、その総量はコンテナで 20 箱分になる。以下、発見した遺構と遺物について、調査区ごとに詳述する。

I-1. A 区

a. A2 区

本調査区で検出した遺構は、溝跡 1 条、土壇 1 基である。調査区の大半を河川跡や湿地状の堆積層が占める。

遺物は、遺構堆積土や河川跡・湿地堆積土、表土から土師器坏・高坏・壺・甕・平瓦などが出土している。

① 溝跡

SD8 溝跡 (第 2・3 図)

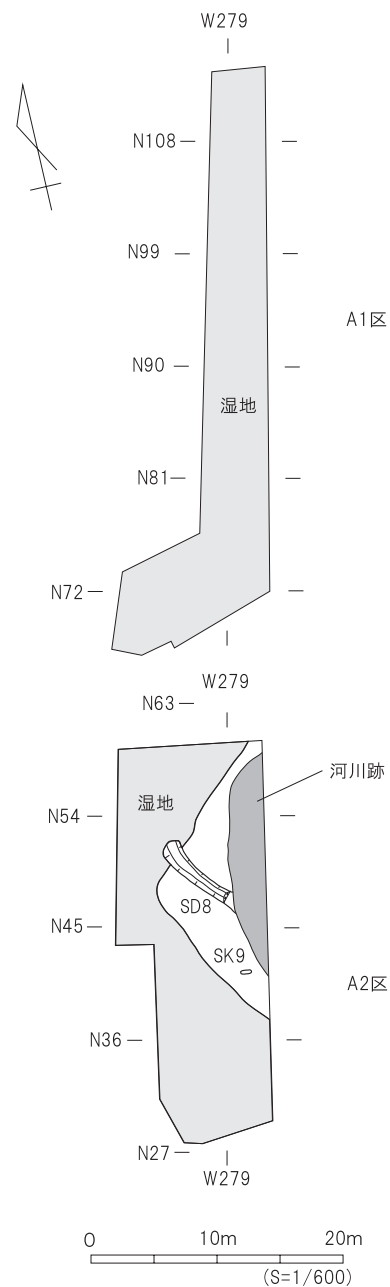
調査区南半部で検出した北西～南東方向の溝跡で、検出面は第Ⅲ層上面である。検出長は約 8 m で、北西部と南東部を河川跡・湿地堆積層に覆われ、ゆるやかな弧状を呈する。規模は上端幅 1.0～1.6 m、下端幅 0.4～0.7 m、深さ 46～75 cm である。底面レベルは南に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形を呈する。堆積土は 8 層に細分され、すべて自然堆積土である。

遺物は、堆積土から土師器高坏・壺・甕などが少量出土している。

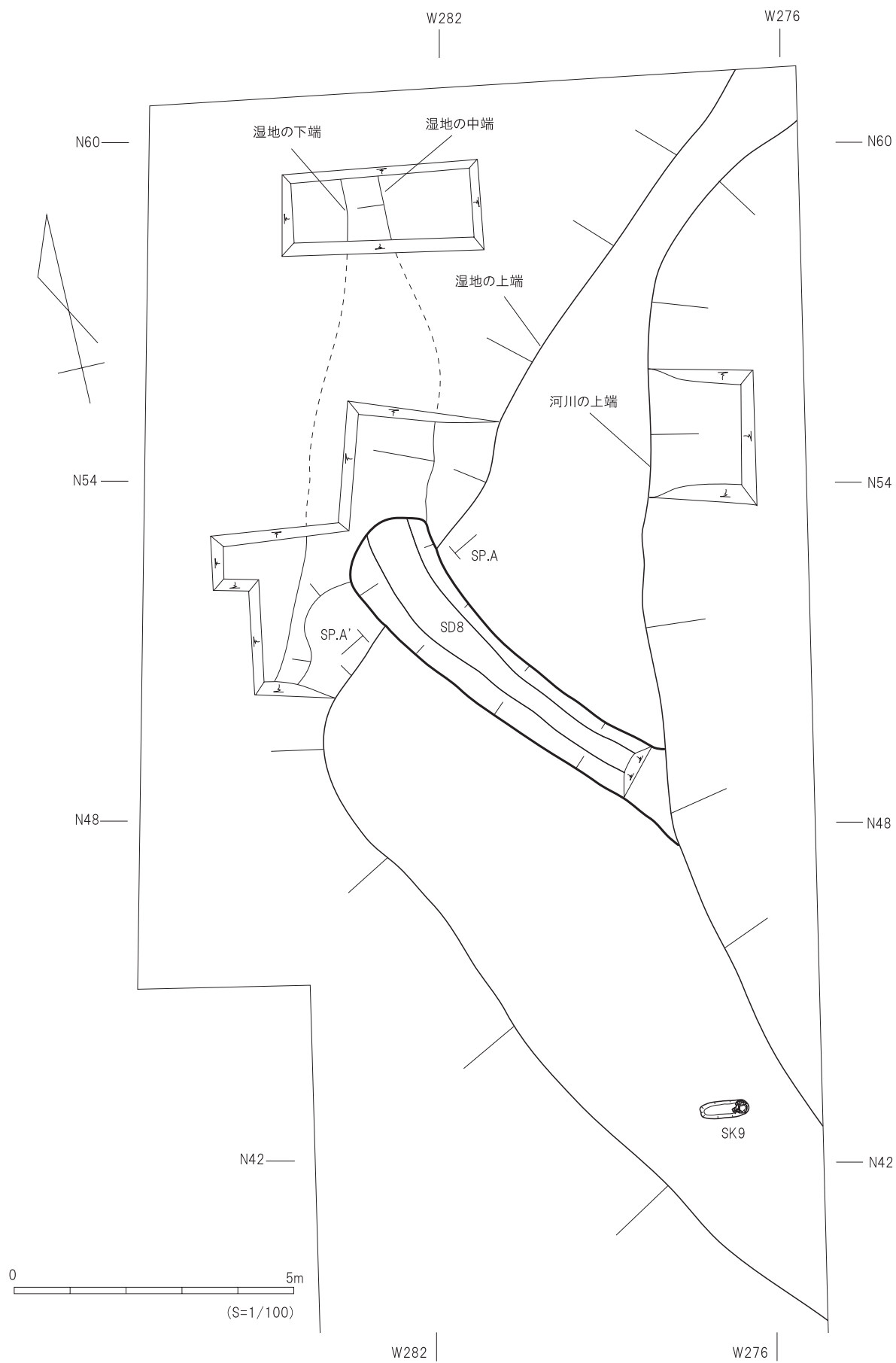
② 土壇

SK9 土壇 (第 3・4 図)

調査区中央部に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 85 cm、短軸 30 cm、深さ 15 cm である。断面形は皿状を呈する。土壇の長軸方向は東で南に 7 度偏している。堆積土は 1 層で、植物遺体を多く含む黒褐色シルトの自然堆積土である。



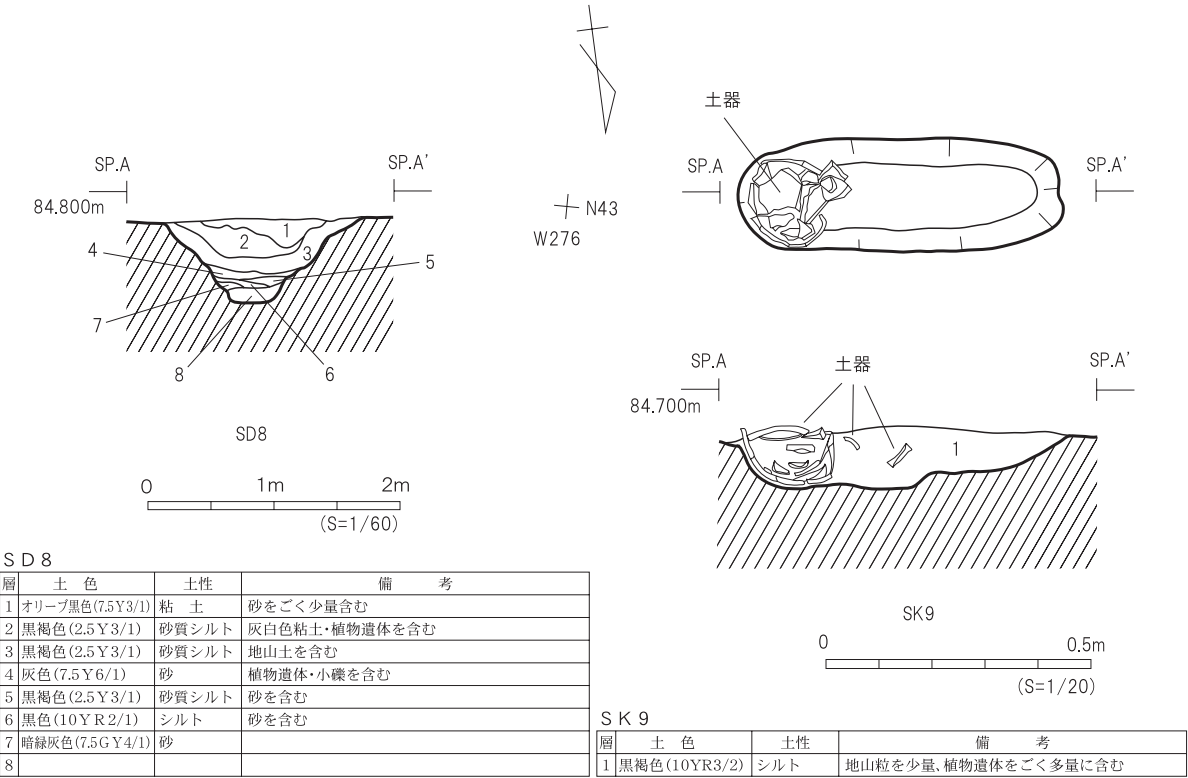
第 1 図 A 区全体図



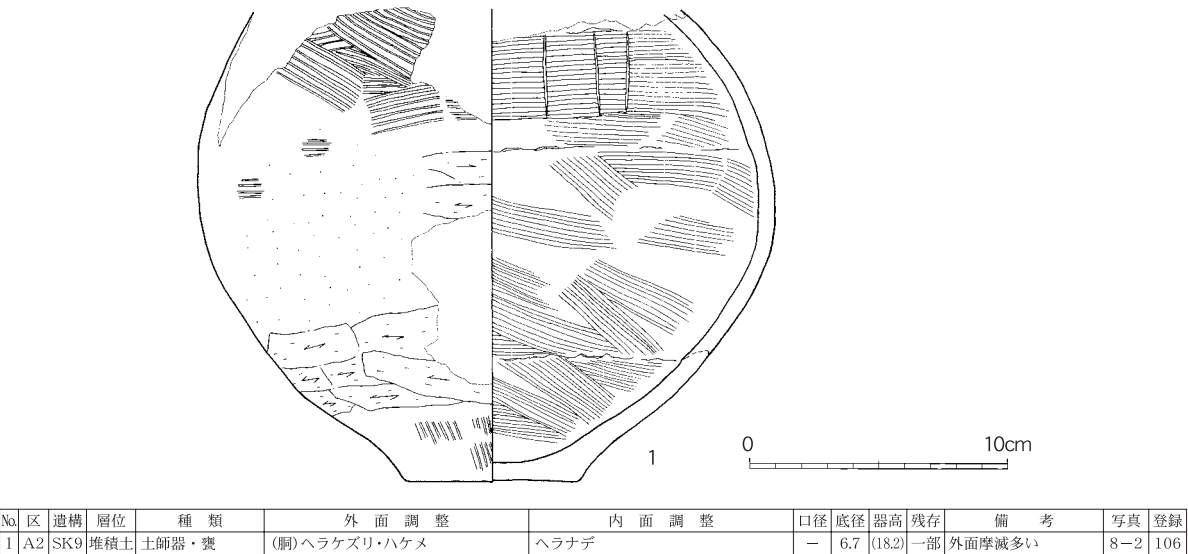
第2図 A2区遺構配置図

遺物は、土壇東壁際から土師器甕が正位の状態で出土している。明確な据え方をもたないため、土壇底面に堆積した薄い植物遺体層の上に置かれたものと考えられる。

遺物は、土壇内に置かれた土師器甕の他に、堆積土から別個体とみられる土師器甕の破片が少量出土している。



第3図 SD8溝跡、SK9土壇



第4図 SK9土壇出土遺物

I-2. B区

a. B2区

本調査区で検出した遺構は、竪穴住居跡1軒、溝跡1条、土壇2基である。全体的にみると遺構の分布密度は極めて希薄である。竪穴住居跡などの遺構は、B2区の東端部に集中し、中央部から西側では検出されていない。検出した遺構の機能時期は出土遺物から古代を主体とするものと考えられるが、溝跡・土壇には時期が不明確なものもある。

遺物は、竪穴住居跡などの遺構堆積土から主に土師器が出土している。また、表土などから弥生土器、土師器坏・高坏・甕、須恵器甕、陶器、青磁、近世陶磁器、平瓦、石製紡錘車、剥片などが若干量出土している。古墳時代中期の土師器坏・高坏には赤彩されたものがある。

①竪穴住居跡

S I 1 a・b 竪穴住居跡（第7～9図）

調査区東側に位置し、検出面は第Ⅱ層上面及び第Ⅲ層上面である。住居の方向は西辺でみると北で25度西に偏している。SK2・10土壇と重複し、SK10土壇より古い。SK2土壇との新旧関係は、本竪穴住居跡の残存状況が悪いことから不明である。精査の結果、建替えが行われていることがわかった。削平のため北辺は不明だが、古い住居の東辺を60cm、西辺を80cm、南辺を50cm程外側に拡張し、さらに床面を掘り下げて新しい住居を構築している。建替え前の住居をS I 1 a 竪穴住居跡、建替え後をS I 1 b 竪穴住居跡とし、以下に詳述する。

S I 1 a 竪穴住居跡（第7・8図）

〔平面形・規模〕 削平を受けており、全体の平面形・規模は不明であるが、現状から東西4.7m、南北3.5m以上の方形を呈していたと推定される。

〔壁・床面〕 残存していない。

〔柱穴・カマド・貯蔵穴〕 検出されなかった。

〔周溝〕 西辺の一部から確認された。長さ約190cm、幅12～30cmである。

〔出土遺物〕 住居掘り方埋土から土師器坏・甕などが少量出土している。

S I 1 b 竪穴住居跡（第8・9図）

〔平面形・規模〕 南東隅を攪乱によって壊されているが、平面形は方形で、規模は西辺6.0m、北辺5.9mである。

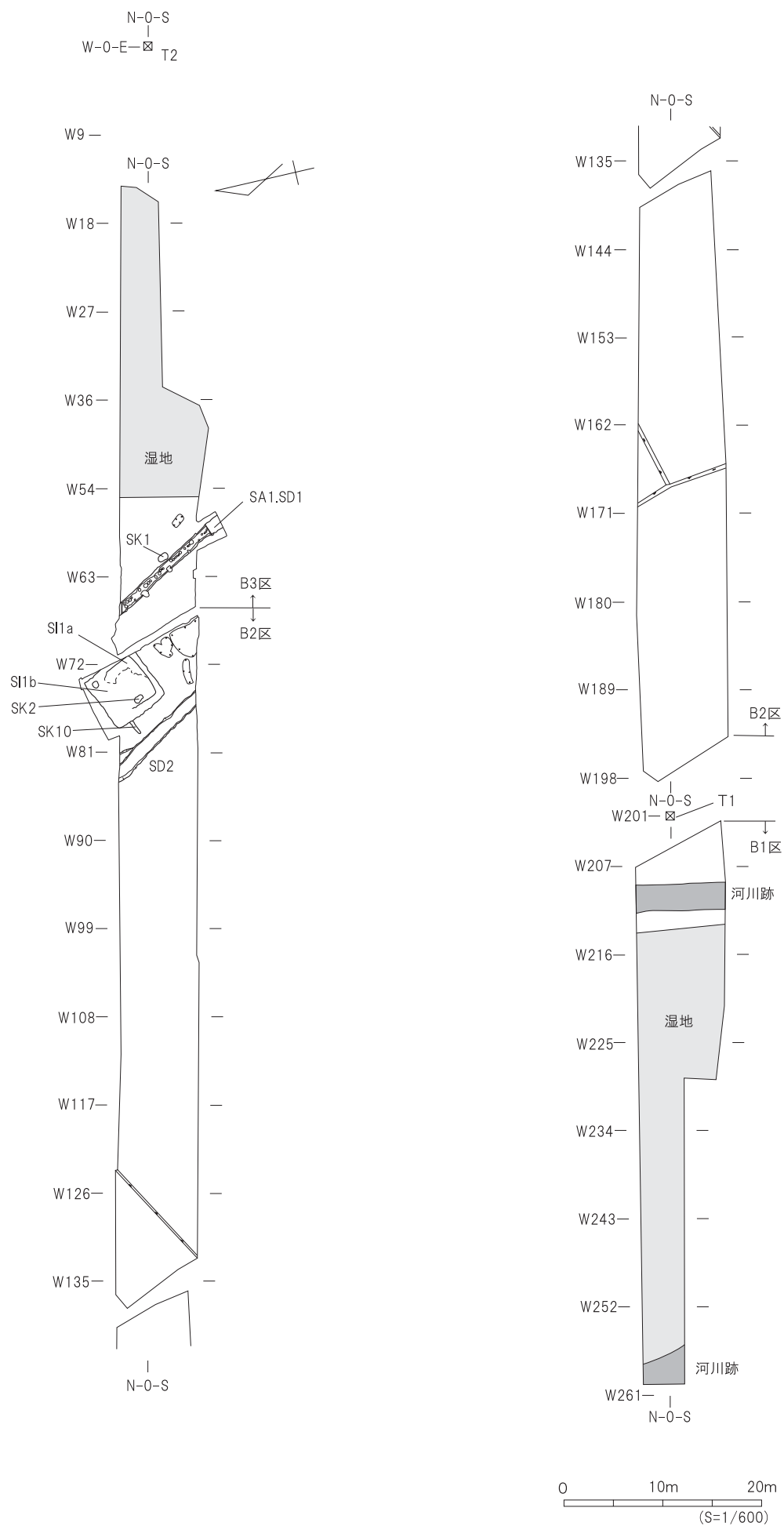
〔堆積土〕 1層認められる。黒褐色シルトの自然堆積土である。

〔壁〕 残存していない。

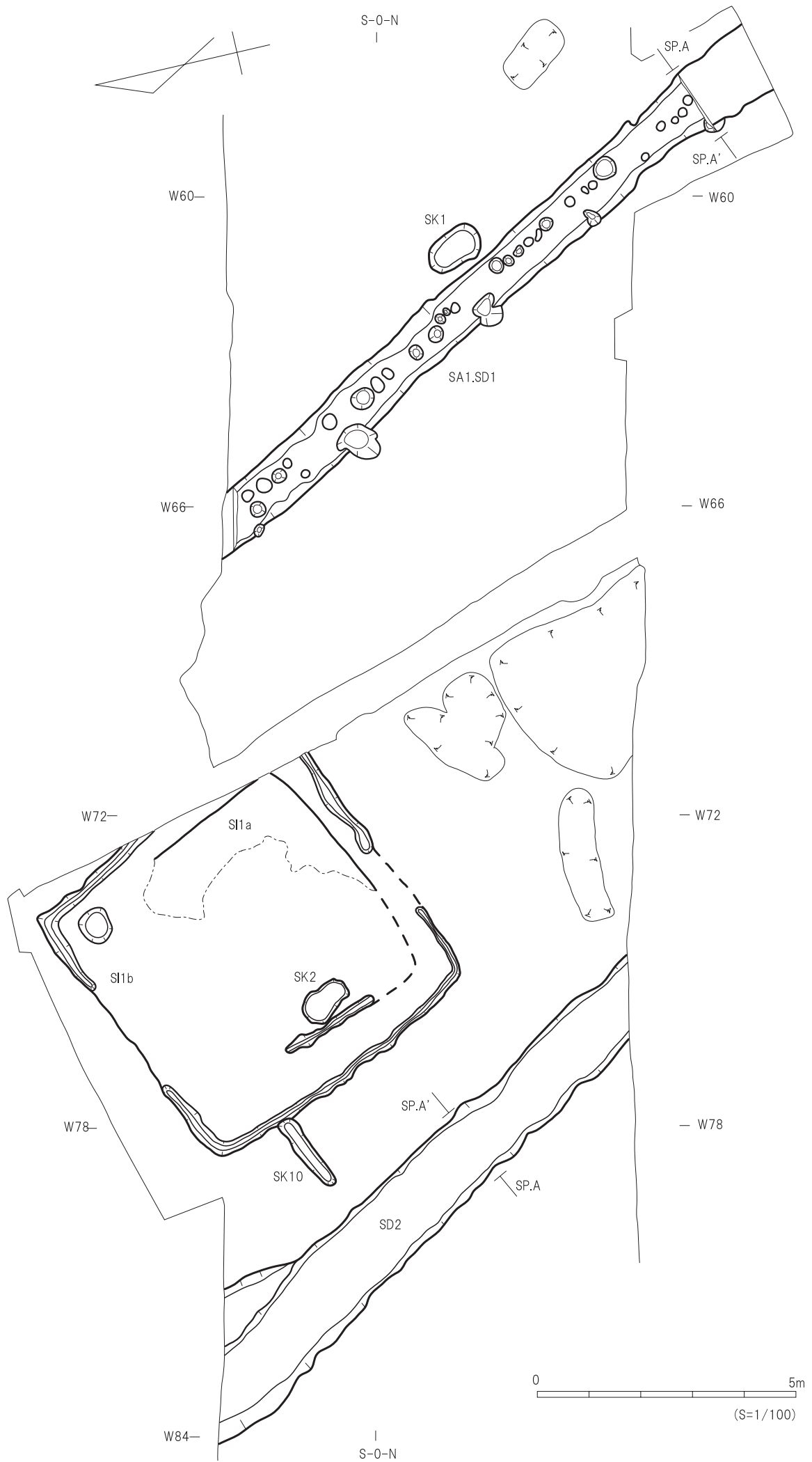
〔床面〕 削平のため、住居北西部にのみ残存する。掘り方埋土を床面としている。

〔柱穴〕 検出されなかった。

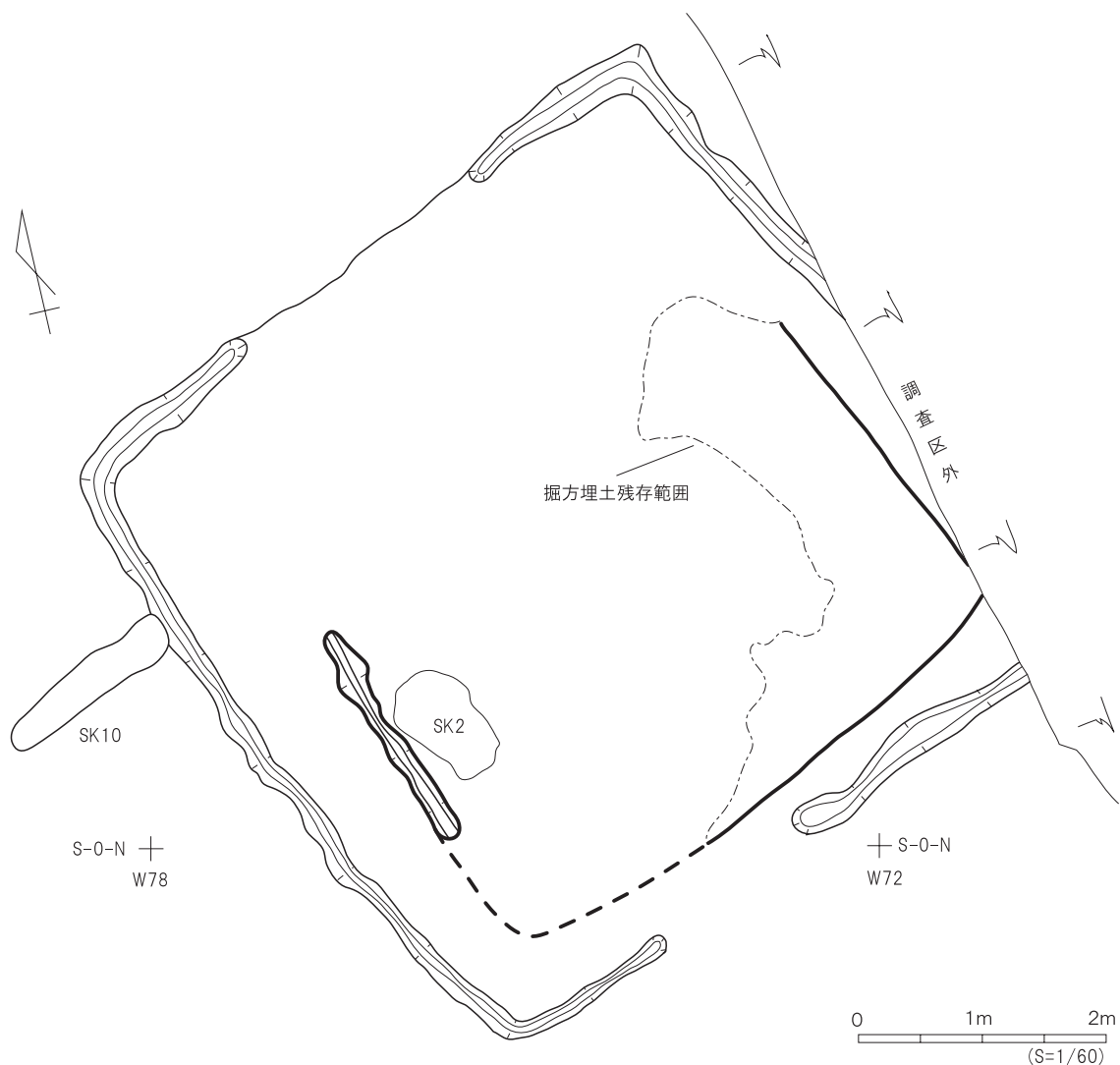
〔周溝〕 ほぼ全周するが、カマド部分と南辺西寄りで途切れる。幅15～40cm、深さ10～15cm、断面形はU字状を呈する。堆積土は1層で、極暗褐色シルトの自然堆積土である。



第5図 B区全体図



第6図 B区遺構配置図

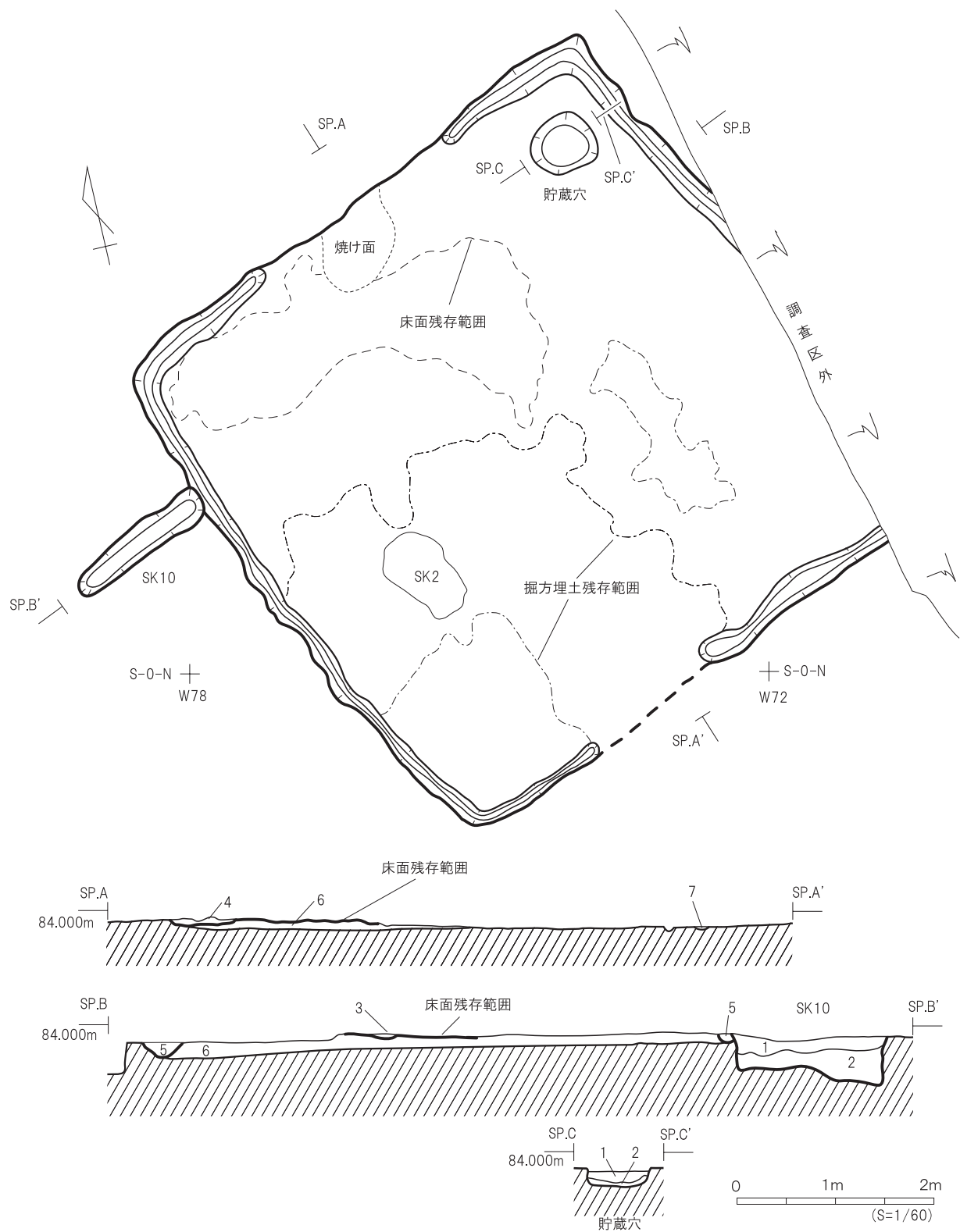


第7図 SI1a竪穴住居跡

〔カマド〕住居北辺中央の壁際に東西90cm、南北60cmの範囲で不整形な焼面を確認した。カマドの燃焼部底面と考えられる。側壁及び煙道は残存していない。焼面の上には焼土を多量に含む暗褐色土が堆積しており、カマド燃焼部崩落土と考えられる。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居北東隅に位置している。長軸70cm、短軸55cmの隅丸方形で、深さ18cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は2層に細分される。黒色・黒褐色のシルトで、いずれも自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居床面から土師器甕が、住居床面直上から土師器坏・高坏・甕が出土している。掘り方埋土から土師器坏・甕・甌などが、貯蔵穴堆積土から土師器坏・甕が出土している。周溝堆積土から土師器甕が、堆積土から土師器坏・甕・壺・甌・鉢が出土している。この甌は無底のものである。なお、土師器坏などには赤彩されたものが少数認められる。また、住居堆積土、貯蔵穴堆積土、住居掘り方埋土からごく少量の弥生土器が出土している。



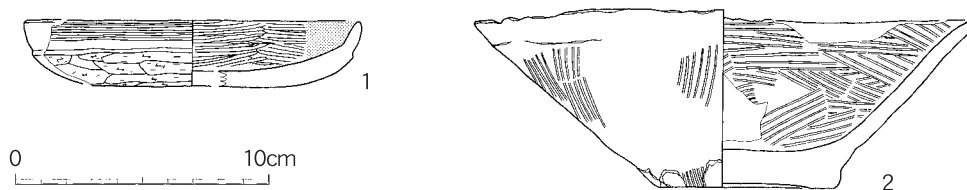
SI1a・b, SK10

層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒を含む SK10堆積土
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山土を含む SK10堆積土
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
4	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	焼土粒・ブロックを多量に含む
5	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	地山土をごく少量含む
6			SI1b住居掘り方埋土
7			SI1a住居掘り方埋土

SI1b貯蔵穴

層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	
2	黒色(10YR2/1)	シルト	

第 8 図 SI1b竪穴住居跡・SK10土壌



No.	区	遺構	層位	種 類	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	器高	残存	備 考	写真	登録
1	B2	SI1b	床直	土師器・坏	(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(13.4)	—	2.6	1/5			43
2	B2	SI1b	堆積土	土師器・鉢	(胴)ハケメ→ナデツケ(底)木葉痕	(口~胴)ハケメ	19.8	6.7	7.0	4/5		8-1a,b	9

第9図 SI1b竪穴住居跡出土遺物

②溝跡

SD2溝跡 (第6・10図)

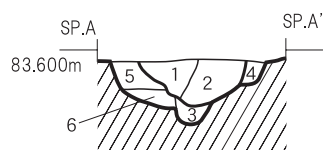
調査区東側で検出した南北方向の溝跡である。検出面は第Ⅱ層上面及び第Ⅲ層上面である。他の遺構との重複はない。検出長は約11mで、さらに調査区外南北に延びる。方向は北で33度西に偏している。規模は上端幅1.2~1.6m、下端幅0.7~1.2m、深さ5~15cmである。底面レベルは緩やかに南へ傾斜している。断面形は皿状~逆台形状を呈する。堆積土は3層に細分される。地山や礫を含む黒褐色・暗褐色・褐色のシルト・粘質シルトで、いずれも自然堆積土である。

遺物は、堆積土から土師器坏・高坏・壺・甕が少量出土している。また、ごく少量の弥生土器が出土している。

③土壌

SK2土壌 (第11図)

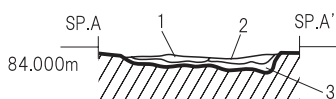
調査区東側に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。SI1a・b竪穴住居跡と重複するが、SI1a・b竪穴住居跡の残存状態が悪いため、新旧関係は不明である。平面形は不整形で、規模は長軸1.0m、短軸0.6m、深さ50cmである。断面形状は逆台形を呈し、壁は底面から急に立ち上がる。堆積土は1層で、黒褐色シルトの自然堆積土である。遺物は堆積土から弥生土器が少量出土している。



SA1,SD1

SA1・SD1

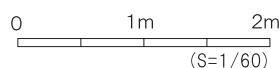
層	土 色	土性	備 考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山小ブロック・焼土を少量含む SD1堆積土
2	褐色(7.5YR5/3)	シルト	地山ブロック・礫を多量に含む SD1堆積土
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	SA1材痕跡
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック・礫を少量含む SA1側柱穴掘り方埋土
5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む SA1掘り方埋土
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	黒褐色土を含む SA1掘り方埋土



SD2

SD2

層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	小礫をごく少量含む
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	礫をごく少量含む
3	褐色(10YR4/6)	粘質シルト	地山ブロック・礫を非常に多量に含む

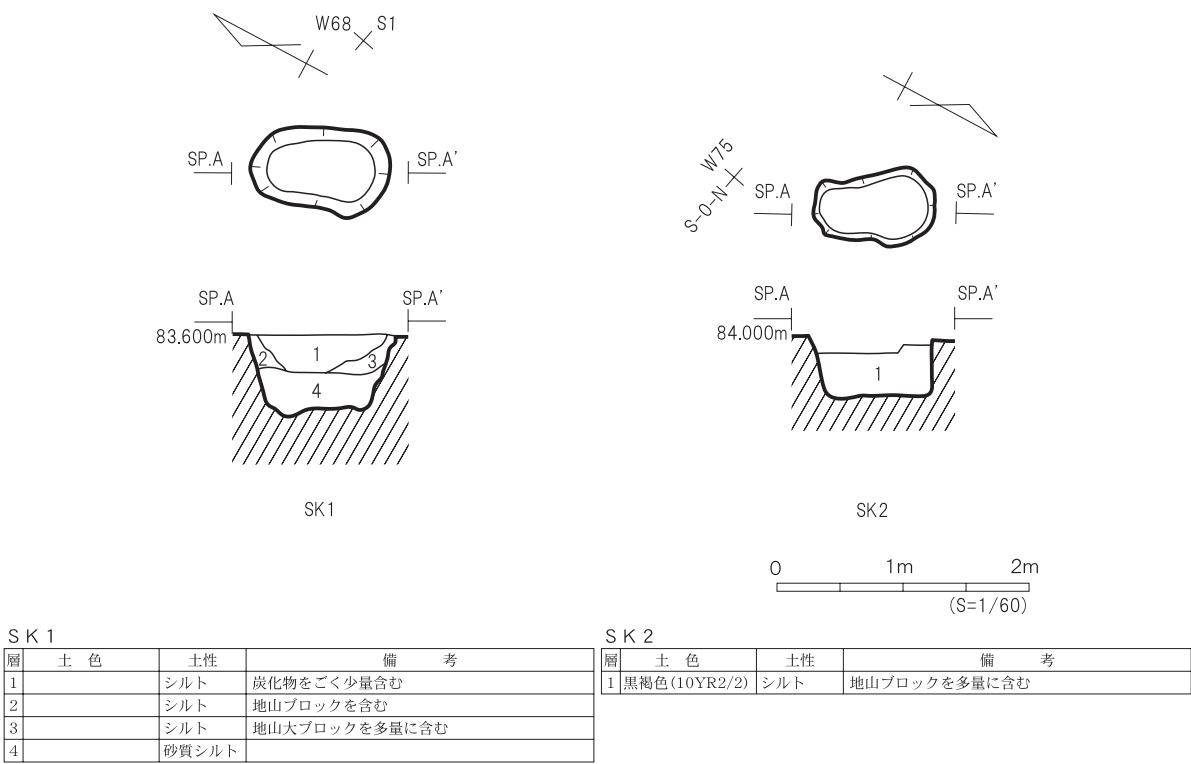


第10図 SA1堀跡・SD1溝跡、SD2溝跡断面図

S K 10土壙（第8図）

調査区東側に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。S I 1 b 竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.5m、短軸0.3m、深さ50cmである。底面は西側がやや深くなっている。短軸方向の断面形はV字状を呈している。堆積土は2層に細分され、地山を含む黒褐色シルトである。いずれも自然堆積土である。

遺物は出土していない。



第11図 S K 1・S K 2 土壙

b. B 3 区

本調査区で検出した遺構は、堀跡1条、溝跡1条、土壙1基である。遺構はB 2 区と隣接する調査区西端部に偏って分布し、全体的に遺構の分布密度は希薄である。これらの遺構の機能時期は、出土遺物から古代を主体とするものと考えられる。

遺物は、遺構堆積土から主に土師器が出土している。また、表土などから弥生土器、土師器坏・高坏・甕、ロクロ土師器坏、須恵器甕、中世陶器、近世陶磁器、剥片などが若干量出土している。古墳時代中期の土師器坏・高坏・壺などには、赤彩が施されたものがある。

①堀跡

SA1堀跡（第6・10図）

調査区西側で検出した北西～南東方向の堀跡で、検出面は第Ⅱ層上面及び第Ⅲ層上面である。SD1溝跡と重複し、これよりも古い。検出長は約21.5mで、さらに調査区外南北に延びる。方向は北で29度西に偏している。

布掘り状の掘り方に材を据えて埋め戻したものと考えられ、掘り方底面から0.3～1.2m程の間隔で径12～40cm程の材痕跡が確認されている。掘り方の規模は、上部をSD1溝跡に壊されているため幅は不明であるが、深さ40～45cm程で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層に細分され、うち2層が掘り方埋土、1層が材痕跡の堆積土である。掘り方埋土はにぶい黄褐色の地山土主体層と黒褐色シルト層で、いずれも地山ブロックを多量に含む。材痕跡の堆積土は黒褐色シルトである。また、掘り方の西辺から2.7～3.5m間隔で深さ20～50cm程のピットが5個検出された。これらは堀跡に伴う側柱穴の可能性がある。

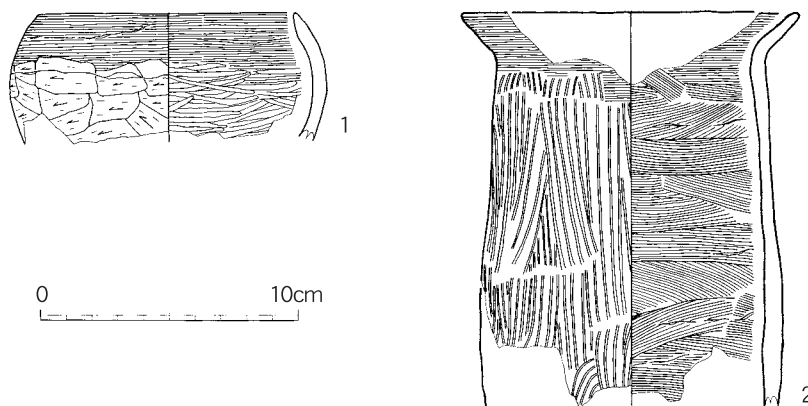
遺物は比較的多く、土師器坏・高坏・甕・甑などが出土している。甑は無底のものである。また弥生土器、剥片が少量出土している。

②溝跡

SD1溝跡（第6・10・12図）

調査区西側で検出した北西～南東方向の溝跡で、検出面は第Ⅱ層上面及び第Ⅲ層上面である。SA1堀跡と重複し、これよりも新しい。検出長はSA1堀跡と同じく約21.5mで、さらに調査区外南北に延びる。方向は北で29度西に偏している。規模は上端幅0.7～0.8m、下端幅0.3m程で、深さ40～50cmである。断面形はU字状を呈する。堆積土は2層に細分され、地山ブロック・礫を含む暗褐色・褐色シルトである。

遺物は、堆積土から土師器坏・高坏・鉢・甕などが出土している。



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	B3	SD1	堆積土上層	土師器・鉢?	(口)ヨコナデ→(胴)ヘラケズリ	(口)ヨコナデ(胴)ヘラミガキ	(10.2)	—	(5.0)	1/4		8-3	11
2	B3	SD1	堆積土	土師器・長胴甕	(口)ヨコナデ(胴)ハケメ	ヘラナデ	13.2	—	(15.3)	一部		8-4	42

第12図 SD1溝跡出土遺物

③土壙

SK1土壙（第11図）

調査区西側に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸115cm、短軸65cm、深さ65cmである。断面形は壁がやや急に立ち上がる逆台形で、底面に凹凸がある。堆積土は4層に分けられ、炭化物や地山ブロックを含む黒褐色のシルト及び砂質シルトである。

遺物は、堆積土から弥生土器がごく少量出土している。

I-3. C区

a. C1区

本調査区で検出した遺構は、溝跡3条、河川跡1条である。遺構密度は極めて希薄で、調査区の西端部に溝跡・河川跡を確認するに留まった。これらの遺構の機能時期は、重複関係や出土遺物から、最も古い溝跡は古墳時代中期、最も新しい河川跡は奈良時代を中心とするものと考えられる。

遺物は、遺構内堆積土や表土などから、弥生土器、土師器坏・高坏・壺・甕、ロクロ土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・壺・甕、瓦、須恵器転用砥、石製模造品、鉄製品、剥片などが出土している。また、表土から墨書土器が出土している。古墳時代中期の土師器坏・高坏などには赤彩されたものがある。

①溝・河川跡

調査区西側でSD5溝跡、SD6溝跡、SD7溝跡、SD12河川跡を検出した。これらの溝跡、河川跡は互いに隣接しており、埋没した古い溝に一部かかる形で新しい溝・河川が形成されている。検出面は第Ⅱ層上面及び第Ⅲ層上面である。方向はいずれも南北方向で、SD5溝跡とSD12河川跡が北でみるとわずかに東に偏している。検出長は約9mで、さらに調査区外南北に延びる。新旧関係はSD7溝跡が最も古く、以降SD6溝跡→SD5溝跡→SD12河川跡の順で新しくなる。

SD5溝跡（第14～16図）

東側をSD12河川跡に壊されるが、残存する規模は上端幅0.5～1.0m、下端幅1.0m、深さ40cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に細分される。細砂をラミナ状に含む粘土層などで、いずれも水成堆積土である。

遺物は、堆積土から土師器坏・甕が少量出土している。

SD6溝跡（第14・15図）

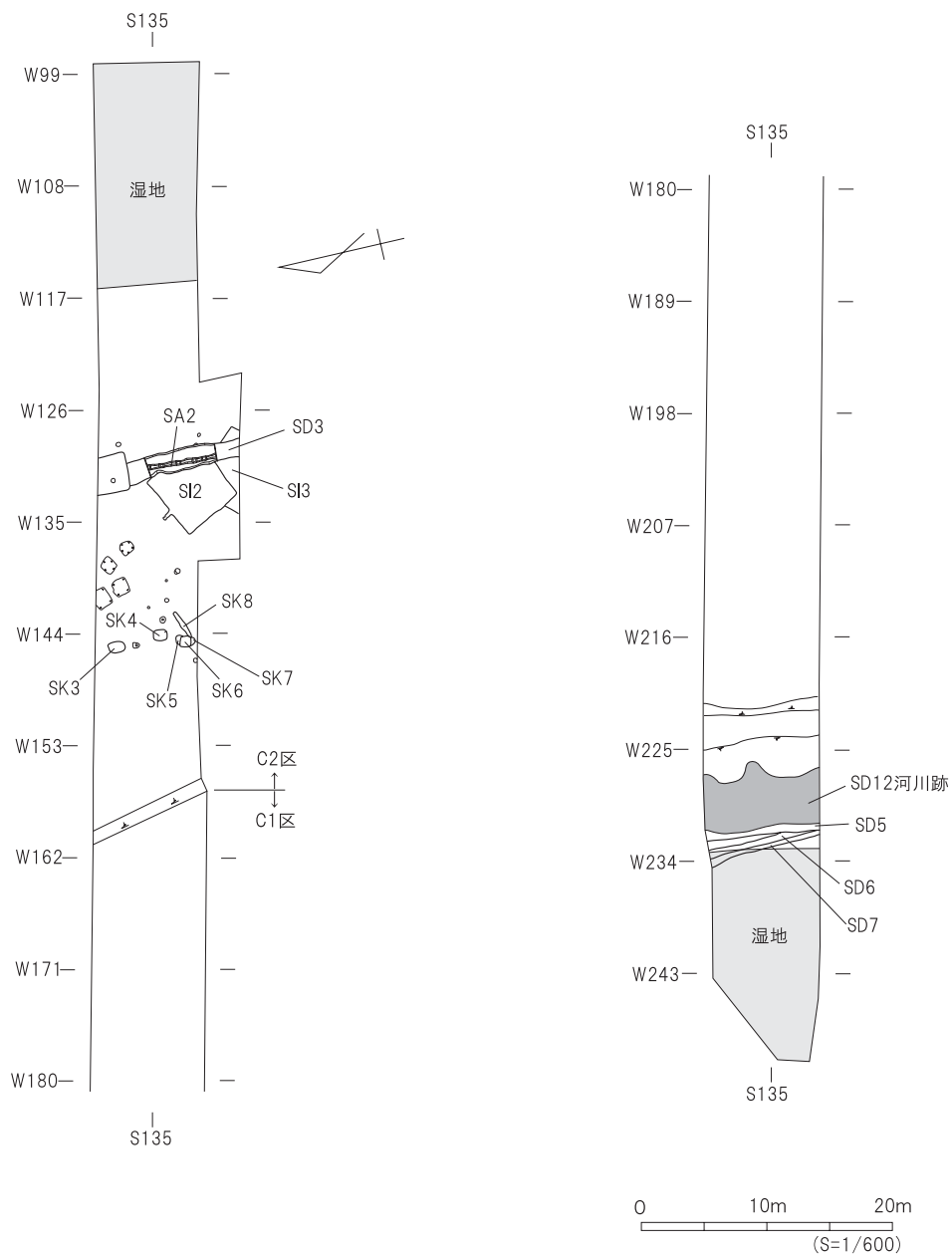
東側をSD5溝跡に壊されるが、残存する規模は上端幅0.5～0.7m、下端幅0.3m、深さ30cmである。断面形は底面から壁が急に立ち上がる逆台形を呈する。堆積土は6層に細分される。細砂と粘土の互層で、いずれも水成堆積土である。

遺物は、堆積土下層から若干量の土師器坏・高坏・壺・甕・石製模造品が出土している。また、赤彩された古墳時代中期の土師器坏も少量出土している。

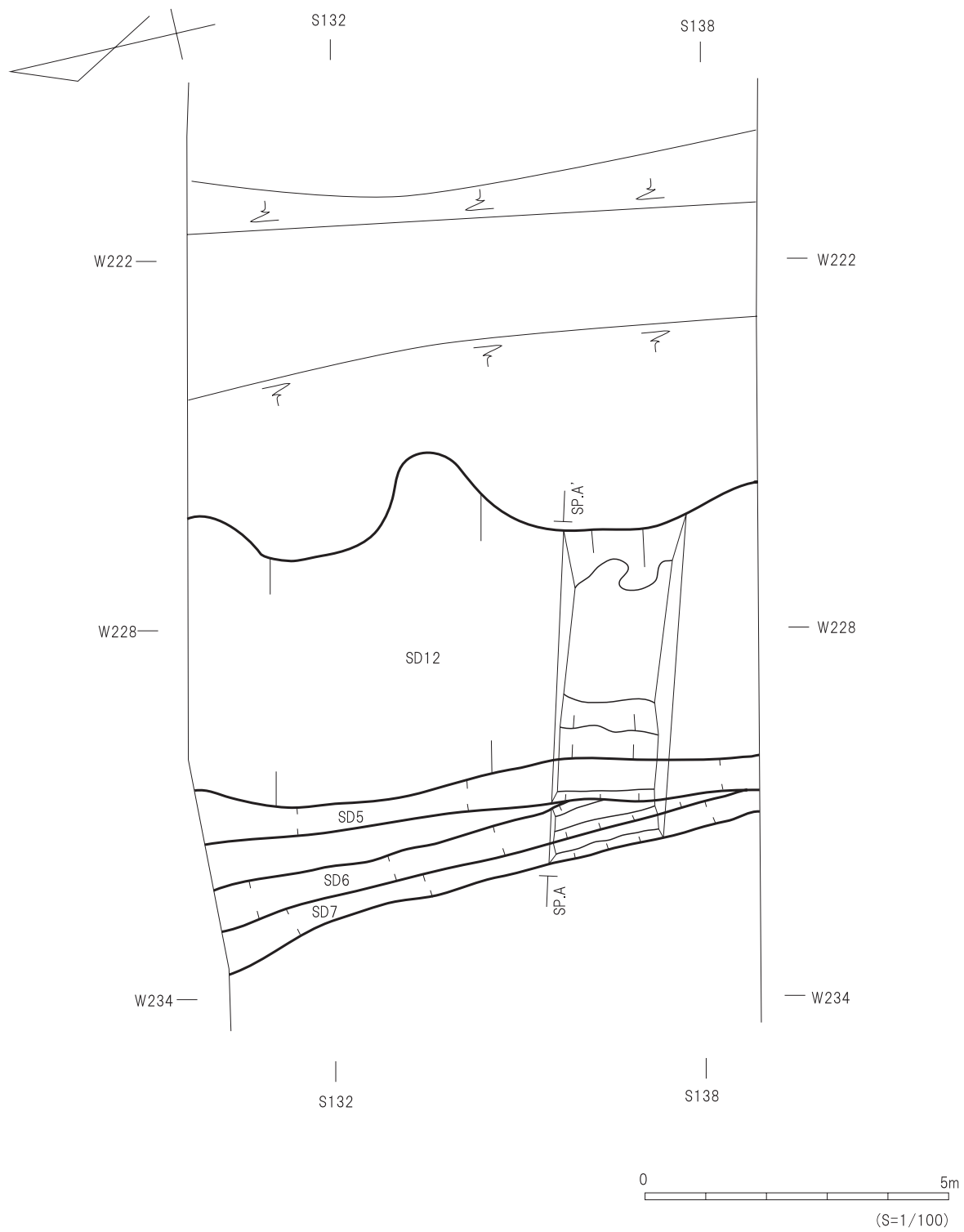
SD7 溝跡 (第14~16図)

東側をSD6 溝跡に壊されるが、残存する規模は上端幅0.4~0.5m、下端幅0.3m、深さ20cm程である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に細分される。いずれも水成堆積土である。下層の砂礫層は遺物を比較的多く含んでいる。

遺物は、堆積土から土師器坏・高坏・壺・甕、須恵器・甕が比較的多く出土している。また、赤彩された古墳時代中期の土師器坏・高坏も少量出土している。



第13図 C区全体図



第14図 C1区遺構配置図

SD12河川跡（第14～16図）

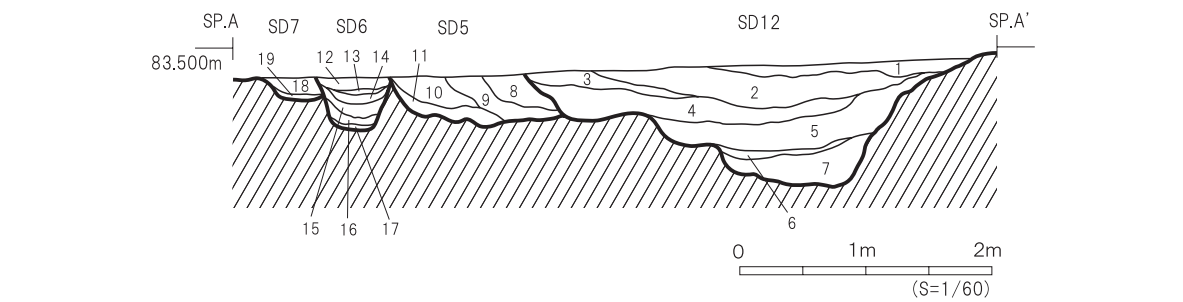
規模は上端幅4.0～5.4m、下端幅1.5～2.0m、深さ1.0mである。断面形は逆台形を呈し、西側がやや浅くなっている。堆積土は7層に細分される。主に砂礫、粘土の互層で、いずれも水成堆積土である。

遺物は、堆積土から土師器坏・高坏・壺・甕、須恵器壺・甕、瓦が出土している。また、赤彩された古墳時代中期の土師器高坏が出土している。その他、剥片も少量出土している。

b. C2区

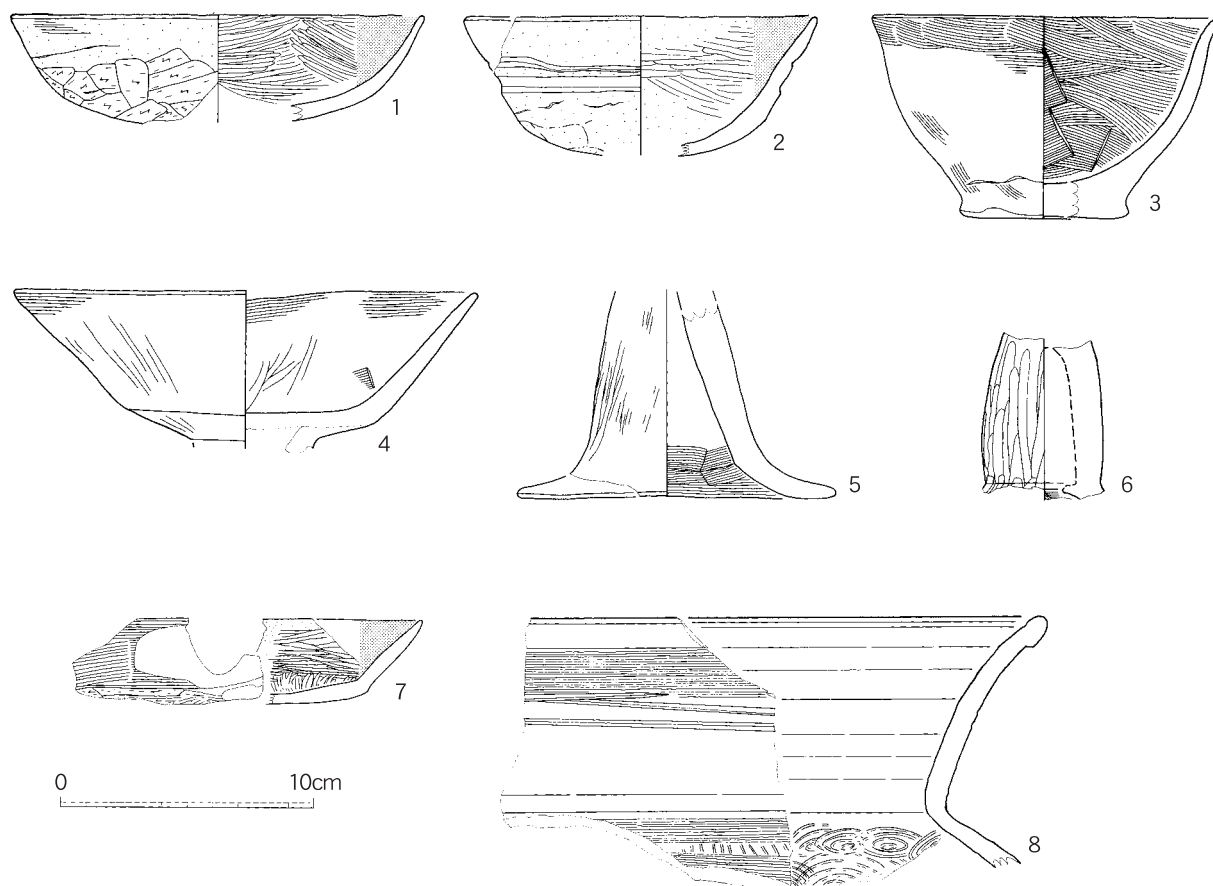
本調査区で検出した遺構は、竪穴住居跡2軒、堀跡1条、溝跡1条、土壌6基、柱穴少数である。いずれも調査区西側に展開する。これらの遺構の時期は、古墳時代中期と古代を主体とするものと考えられるが、住居跡以外の遺構からは遺物の出土量は少ない。このため、機能時期が不明確なものが多い。なお、検出した竪穴住居跡のうち、精査を行ったのはSI2竪穴住居跡1軒である。

遺物は、遺構堆積土や表土から土師器坏・高坏・甕、ロクロ土師器坏・甕、須恵器甕、赤焼土器坏、中世陶器、青磁、土師質土器、鉄製品、砥石、石製模造品、石製紡錘車、石錐、土製品が出土している。古墳時代中期の土師器坏・高坏には赤彩が施されたものがある。なお、ロクロ土師器の底部は切り離しの後、再調整を施されるものが大半を占めている。また、遺構堆積土などから弥生土器、石錐・剥片などが少量出土している。



層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	褐灰色(10YR4/1)	粘土	小砂礫をごく少量含む SD12堆積土	11	オリブ黒色(5Y3/1)	粘土	灰オリブ色粘土を多量に含む SD5堆積土
2	灰色(5Y4/1)	砂	シルトと砂礫の互層 SD12堆積土	12	オリブ黒色(5Y3/1)	粘土	SD6堆積土
3	オリブ黒色(5Y3/2)	シルト	灰オリブ色砂をラミナ状に含む SD12堆積土	13	灰色(5Y4/1)	細砂	SD6堆積土
4	灰色(5Y4/1)	砂	シルトと砂礫の互層 SD12河川跡堆積土	14	オリブ黒色(7.5Y3/1)	粘土	SD6堆積土
5	灰色(7.5Y4/1)	砂礫	円礫を少量含む SD12堆積土	15	オリブ黒色(7.5Y3/1)	粘土	灰色細砂をラミナ状に含む SD6堆積土
6	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土	灰オリブ色砂をラミナ状に含む SD12堆積土	16	オリブ黒色(5Y3/1)	粘土	灰色細砂をラミナ状に含む SD6堆積土
7	灰色(10Y4/1)	砂礫	円礫を含む SD12堆積土	17	灰色(5Y4/1)	細砂	砂礫層 SD6堆積土
8	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土	灰色細砂をラミナ状に含む SD5堆積土	18	オリブ黒色(5Y3/1)	粘土	灰オリブ色シルト小ブロックをごく少量含む SD7堆積土
9	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土	灰色細砂をラミナ状に含む SD5堆積土	19	オリブ黒色(5Y3/1)	砂	小礫を多量に含む SD7堆積土
10	オリブ黒色(5Y3/1)	粘土	SD5堆積土				

第15図 SD5・6・7溝跡、SD12河川跡断面図



No	区	遺構	層位	種 類	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	器高	残存	備 考	写真	登録
1	C1	SD12	堆積土3層	土師器・坏	(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(16.4)	丸底	(4.3)	1/5	外面摩滅多い		61
2	C1	SD12	堆積土	土師器・坏	(体下)ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(14.0)	—	(5.5)	一部	外面口縁に沈線 内面摩滅多い		68
3	C1	SD12	堆積土4層	土師器・鉢	(口)ヘラナデ(胴)ヘラナデ・ナデ(底)ナデ	ヘラナデ	(13.7)	(6.7)	8.0	1/4		8-5	56
4	C1	SD7	堆積土2層	土師器・高坏	(口)ヨコナデ→(口~体)ヘラミガキ	(口)ヨコナデ(体)ヘラナデ→(口~体)ヘラミガキ	18.4	—	(6.2)	一部			38
5	C1	SD7	堆積土	土師器・高坏	(脚)ヘラミガキ(裾)ヨコナデ?	(脚)マメツ(裾)ナデ?→ヨコナデ	—	(12.6)	(8.2)	一部	内外面共摩滅多い		32
6	C1	SD12	堆積土	土師器・高坏	ヘラミガキ	(脚)不明(裾)ヘラナデ	—	—	(6.3)	脚部			80
7	C1	SD5	堆積土2層	土師器・坏	(口)ヨコナデ(体)ヘラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理	—	—	(3.4)	一部			134
8	C1	SD12	堆積土	須恵器・甕	(口)カキメ→沈線(胴)平行タタキ→カキメ	(口)ロクロナデ(胴)同心円状オサエ	—	—	(9.9)	一部	外面口縁に沈線巡る		100

第16図 SD5・7・12溝跡出土遺物

①竪穴住居跡

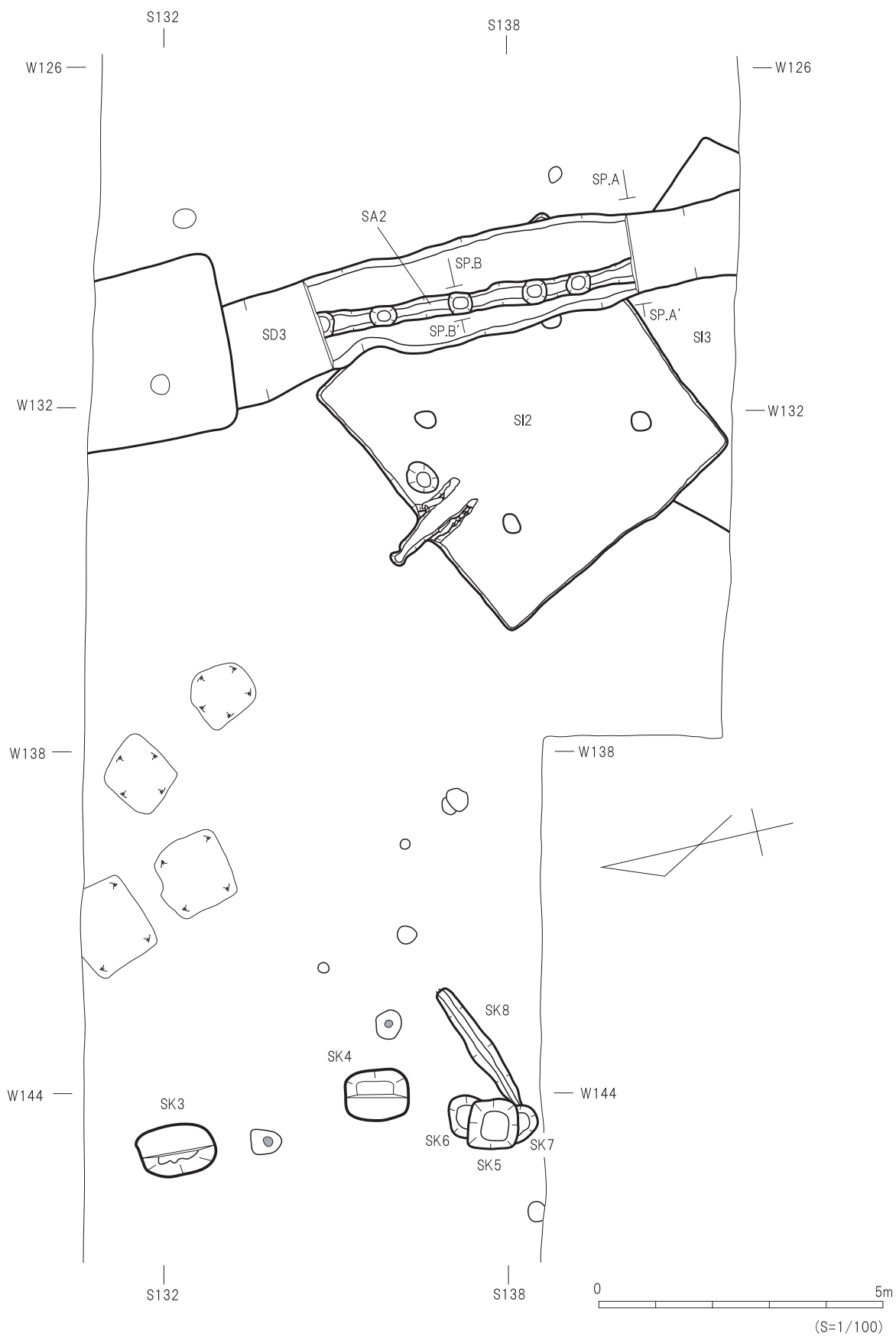
S I 2 竪穴住居跡 (第18~21図)

調査区西側に位置し、第II層上面で検出した。S I 3 竪穴住居跡、S A 2 堀跡SD 3 溝跡と重複し、S A 2 堀跡、SD 3 溝跡より古く、S I 3 竪穴住居跡より新しい。

[平面形・規模] 平面形は正方形で、規模は北辺5.4m、西辺5.1mである。

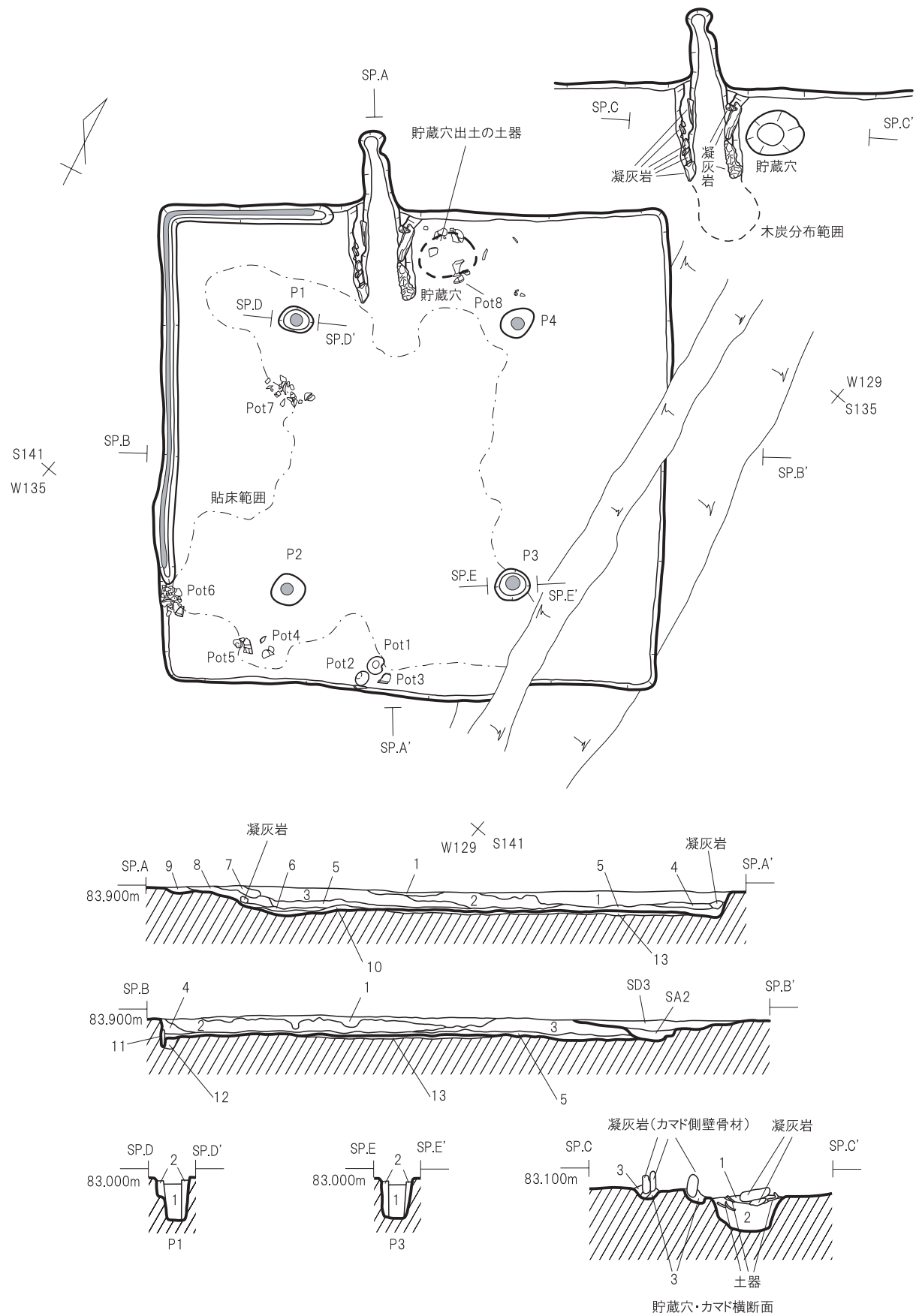
[方向] 西辺でみると、北で28度西に偏している。

[堆積土] 10層認められ、1~2層は住居廃絶後の人為的埋土、3~5層は自然流入土で、この堆積



第17図 C2区遺構配置図

カマド周辺・貯蔵穴の状況



第18図 S12竪穴住居跡

0 1m 2m
(S=1/60)

SI12竪穴住居跡土層注記表

SI2

層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	凝灰岩ブロック・炭化物粒を含む
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山小ブロックを少量含む
5	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	焼土・炭化物粒を少量含む
6			焼土ブロックを多量に含む カマド崩落土
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土粒を多量に含む
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土粒を多量に含む
9	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土・炭化物粒を少量含む
10	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土・炭化物・灰を多量に含む カマド機能時の堆積
11	黒褐色(10YR3/1)	シルト	壁材痕跡
12	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む 壁材押え土
13	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロック・凝灰岩粒を多量に含む 住居掘り方埋土

SI2 カマド・貯蔵穴

層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土・炭化物粒・ブロックを含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物粒を含む 遺物多い
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多量に含む カマド芯材据え方埋土

SI2 支柱穴(P1～P4)

層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	しまりなし 柱痕跡
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む 掘り方埋土

土層には凝灰岩が含まれる。6層はカマド燃焼部崩落土、7～9層はカマド内・煙道の堆積土である。10層はカマド機能時の堆積土である。

〔壁〕 ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は最も残りのよい北東隅で床面から18cmである。

〔床面〕 地山もしくは掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦だが、北東部へ向かってわずかに傾斜している。床面から、住居北半部を中心に多数の凝灰岩を検出した。

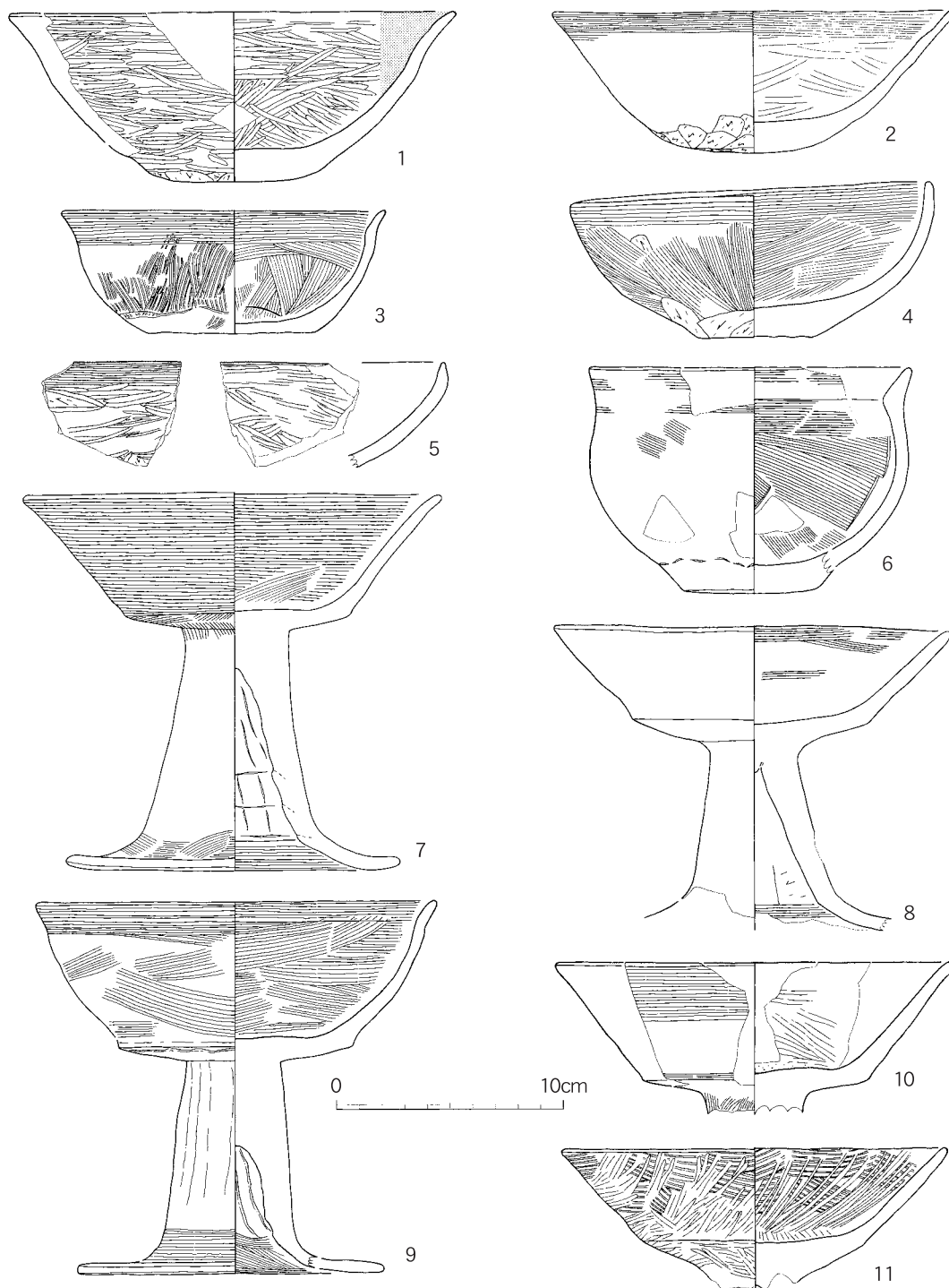
〔柱穴〕 支柱穴は住居平面形の対角線上に4個（P1～P4）検出した。掘り方は長軸35～37cm、短軸25～36cmの円形もしくは楕円形を呈する。深さ45cm程である。柱痕跡は径15cm程の円形で、堆積土はしまりのない黒褐色シルトである。

〔周溝〕 西辺と北辺西側の壁際で検出した。幅5～10cmの壁材痕が認められる。周溝は上端幅10～18cm、深さ10cmで、断面形はU字状を呈する。埋土は黒褐色シルトである。

〔カマド〕 北壁中央からやや左寄りに位置し、燃焼部と煙道が残存している。燃焼部の大きさは、幅30cm、奥行き90cmである。底面には炭化物・灰を多く含んだ黒褐色シルト（10層）が堆積している。燃焼部側壁は据え方に据えた凝灰岩を芯材として、均質な黒褐色シルトで構築されている。右側壁は長さ95cm・幅15cm・高さ27cm、左側壁は長さ105cm・幅23cm・高さ28cmが残存している。奥壁は傾斜して煙道へ続く。煙道は長さ80cm・幅30cm、深さ4～20cmで、底面は先端に向かって緩やかな昇り傾斜を呈する。先端には径25cm程の円形を呈する煙出しピットが取り付けく。煙出しピットの底面は浅く窪んでいる。

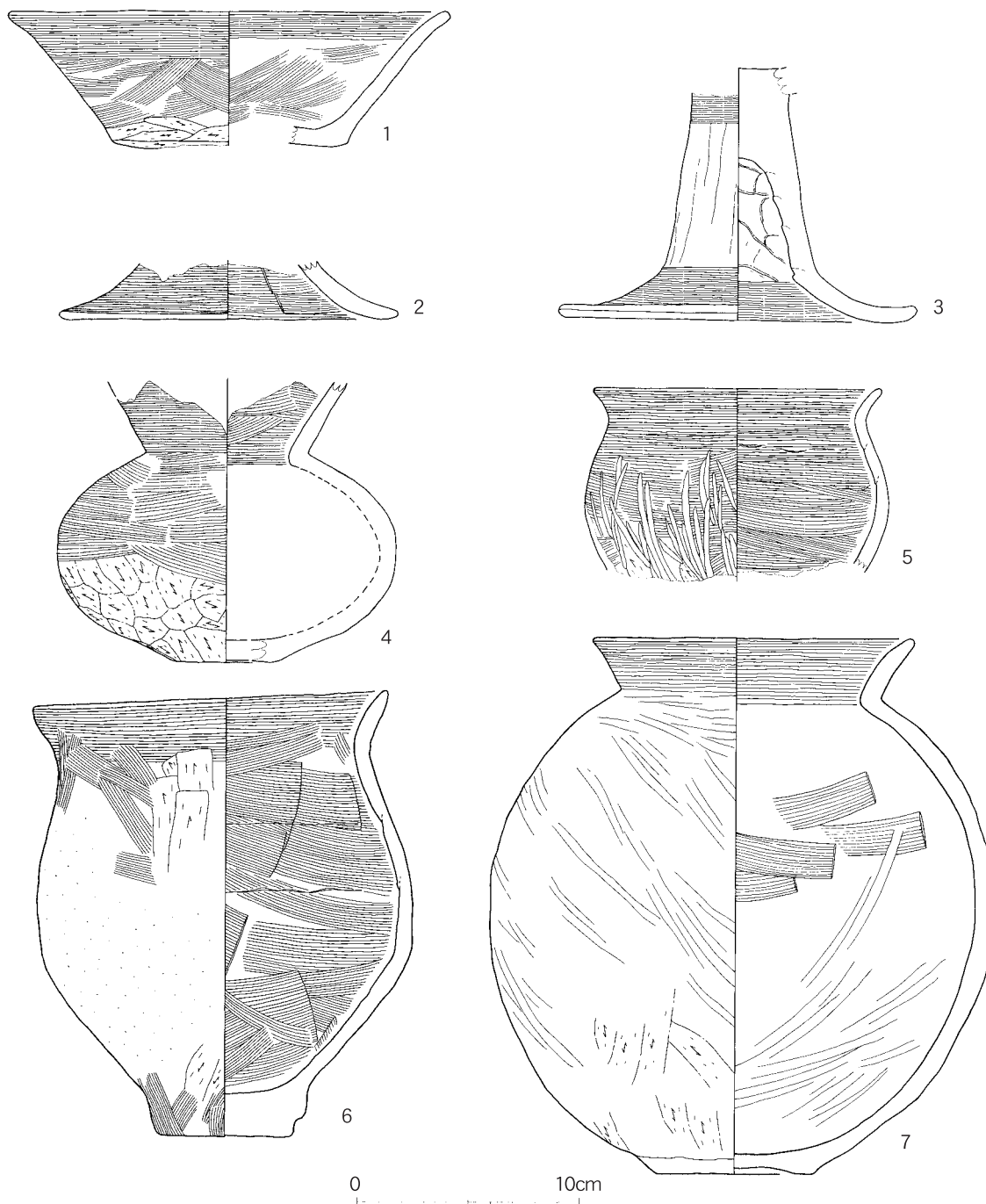
〔貯蔵穴〕 カマド右側壁際で検出した。長軸60cm、短軸45cmの楕円形を呈する。深さ35cmである。断面形は逆台形で、堆積土は2層に細分される。焼土や炭化物を含む黒褐色シルトで、いずれも自然堆積土である。堆積土上層から土師器甕の破片がまとまって出土している。

〔出土遺物〕 住居床面から土師器杯・高杯・壺・甕、石製模造品、石製紡錘車、砥石、土製品などが、住居床面直上から土師器杯・高杯・甕、土製品などが出土している。掘り方埋土から高杯・甕などが、カマド内堆積土から土師器高杯・壺・甕が出土している。貯蔵穴堆積土から土師器杯・高杯・甕が、住居堆積土から土師器杯・高杯・壺・甕、土製品などが出土している。土師器杯・高杯・壺などには赤彩が施されたものが認められる。また、住居堆積土などから弥生土器が若干量出土している。



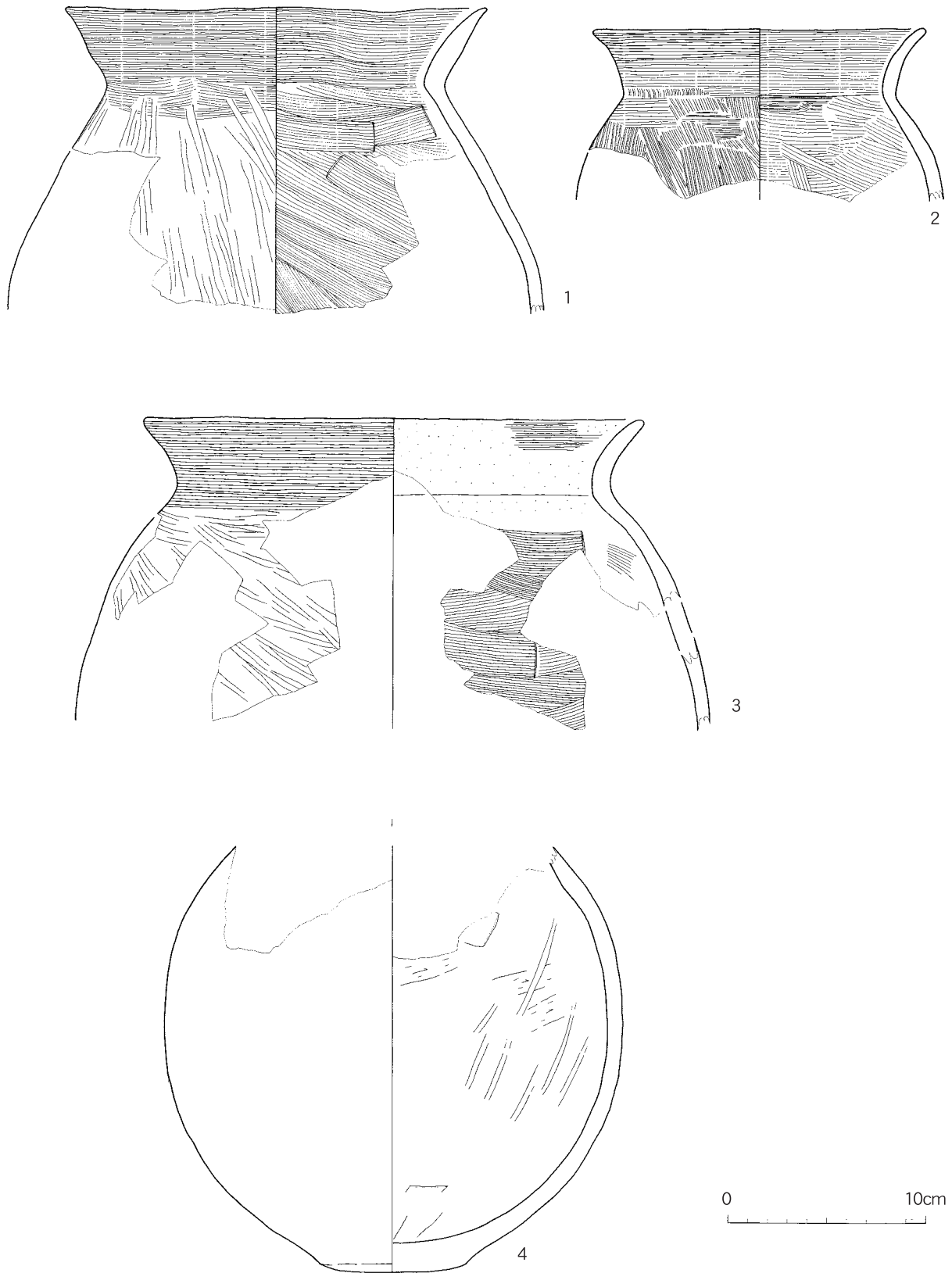
No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	C2	S12	堆積土	土師器・坏	(口～体)ヘラミガキ(底)ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(19.6)	丸底	7.7	1/4		9-4	37
2	C2	S12	堆積土	土師器・坏	(口)ヨコナデ(体下～底)ヘラケズリ	(体)ヘラミガキ(口)ヨコナデ	17.7	—	6.3	ほぼ完形	内外面赤彩	9-3	6
3	C2	S12	堆積土	土師器・坏	(口)ヨコナデ(体)ハケメ(底)ヘラケズリ	(口)ハケメ→ヨコナデ(体)ヘラナデ	14.3	7.4	5.4	1/2		9-1	2
4	C2	S12	貯蔵穴	土師器・坏	(口)ヨコナデ→(体)ヘラケズリ→ナデ(体下～底)ヘラケズリ	ナデ	16.1	4.9	6.5	4/5		9-2	4
5	C2	S12	床直	土師器・坏	(口)ヨコナデ(体)ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	(4.6)	一部	内外面赤彩		53
6	C2	S12	貯蔵穴	土師器・坏	(口)ヨコナデ(胴)ナデ(底)ヘラケズリ	(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ	(14.3)	6.0	10.0	1/3	内面胴部黒色付着物	9-8	19
7	C2	S12	床直	土師器・高坏	(坏)ヨコナデ(脚)ナデ	(坏)ヨコナデ→ナデ(脚)シボリメ(裾)ヨコナデ	18.5	14.8	16.7	4/5	pot8	9-5	7
8	C2	S12	堆積土	土師器・高坏	(坏～脚)不明	(坏)不明(脚)ヘラケズリ(裾)不明	17.5	—	(13.4)	4/5	内外面摩滅多い		17
9	C2	S12	貯蔵穴	土師器・高坏	(坏口)ヨコナデ(坏体～脚)ナデ(裾)ヨコナデ	(坏)ナデ(脚)シボリメ(裾)ヨコナデ	17.7	13.6	16.4	1/3	pot5	9-6	8
10	C2	S12	堆積土	土師器・高坏	(口)ヨコナデ(体)ナデ	(口)不明(体)ヘラミガキ	(17.6)	—	(6.7)	坏部のみ	底面摩滅		52
11	C2	S12	床面	土師器・高坏	ハケメ→ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ	17.0	—	(6.2)	坏部のみ	pot1 内外面共赤彩		54

第19図 SI2竪穴住居跡出土遺物(1)



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	C2	SI2	確認面	土師器・高坏	(口)ヨコナデ(体)ナデ(坏下~接合部)ヘラケズリ	(口)ヨコナデ(体)ナデ	20.0	—	(6.1)	坏部のみ			1
2	C2	SI2	床直	土師器・高坏	(裾)ヨコナデ→ナデ	(裾)ヘラナデ→ヨコナデ	—	(15.4)	(2.7)	一部	pot5 裾外面と内面裾端部に赤彩	9-7	3
3	C2	SI2	確認面	土師器・高坏	(脚)ナデ(裾)ヨコナデ	(脚)無調整(裾)ヨコナデ	—	(16.1)	(11.3)	一部			12
4	C2	SI2	床面	土師器・壺	(頸)ヨコナデ(胴)ヘラケズリ→ナデ(底)ナデ	(頸)ナデ(胴)ナデ?	—	4.2	(12.7)	4/5	pot2 外面(頸~体)・内面(頸)赤彩	9-9	39
5	C2	SI2	床直	土師器・甕	(口)ヨコナデ(胴)ナデ→(胴下部)ヘラケズリ→ヘラミガキ	(口)ヨコナデ(胴)ナデ	(13.0)	—	(8.7)	一部	pot3 海綿骨針多量 外面胴上半黒色付着物		71
6	C2	SI2	床面	土師器・甕	(口)ヨコナデ(胴)ヘラケズリ→ナデ(底)ナデ	(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ	16.0	6.2	19.8	3/4	pot6 外面摩擦多い	10-4	27
7	C2	SI2	床面	土師器・甕	(口)ヨコナデ(胴)ヘラケズリ→ヘラミガキ(底)ナデ	(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ→ミガキ	14.4	7.0	24.2	4/5	pot7	10-5	25

第20図 SI2竪穴住居跡出土遺物(2)



No.	区	遺構	層位	種 類	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	器高	残存	備 考	写真	登録
1	C2	SI2	堆積土	土師器・甕	(口)ヨコナデ(胴)ナデ→ヘラミガキ	(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ	(21.4)	—	(15.5)	一部			13
2	C2	SI2	床	土師器・甕	(口)ヨコナデ(胴)ハケメ	(口)ハケメ→ヨコナデ(胴)ヘラナデ	(16.8)	—	(8.6)	一部			22
3	C2	SI2	床	土師器・甕	(口)ヨコナデ(胴)ヘラミガキ	(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ	(25.4)	—	(15.7)	一部	内面口縁部摩滅多い		48
4	C2	SI2	貯蔵穴堆	土師器・甕	(胴～底)ヘラミガキ	(胴下半)ヘラナデ・(胴上半)ヘラケズリ→(胴)ヘラミガキ	—	(7.7)	(21.6)	一部			35

第21図 SI2竪穴住居跡出土遺物(3)

① 堀跡

SA2堀跡（第17・22図）

調査区西側で検出した南北方向の溝跡で、底面から5個の材痕跡を検出したため、堀跡とした。検出面はSD3溝跡の底面である。SI2竪穴住居跡、SD3溝跡と重複し、SI2竪穴住居跡より新しく、SD3溝跡より古い。方向はこれとほぼ一致している。検出長は5.5mで、さらに調査区外南北へ延びるものとみられる。方向は北で3度東に偏している。規模は上端幅30～40cm、下端幅15～30cm、深さ15～23cmで、断面形はU字状を呈する。堆積土は1層で、黒褐色シルトである。底面から0.8～1.3m程の間隔で、長軸40～45cm短軸30～40cmの楕円形を呈する深さ20～40cmの材痕跡が5個検出された。その様相はB3区のSA1堀跡に類似しており、同様の堀跡と考えられる。従って材痕跡上の溝部は、材を据えるための布掘り状の掘り方、あるいは材を撤去する際の布掘り状の抜き取りもしくは切り取り痕跡と考えられる。

遺物は、堆積土から土師器坏・甕が出土している。また、弥生土器がごく少量出土している。

③ 溝跡

SD3溝跡（第17・22図）

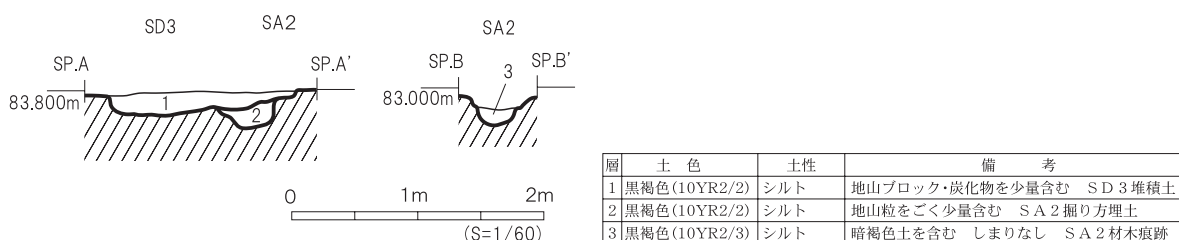
調査区西側で検出した南北方向の溝跡で、検出面は第II層上面である。SI2竪穴住居跡・SA2堀跡と重複し、これらの中で最も新しい。SA2堀跡の位置及び方向を踏襲することから、これと同様の性格を持つ溝跡の可能性がある。検出長は約7.4mで、さらに調査区外南北へ延びる。規模は上端幅1.4～1.7m、下端幅1.2～1.5m、深さ15cm程で、断面形は皿状を呈する。堆積土は1層で、黒褐色シルトの自然堆積土である。

遺物は、堆積土から土師器坏・高坏・壺・甕などが出土している。また、弥生土器、剥片が少量出土している。

④ 土壇

SK3土壇（第23図）

調査区西側に位置し、検出面は第III層上面である。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を



第22図 SA2堀跡・SD3溝跡断面図

呈し、規模は長軸1.3m、短軸0.9m、深さ35cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に細分され、1層は焼土・炭化物・地山を含む黒褐色シルトの自然堆積土、2層は礫・地山が主体の人為的埋土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕が出土している。

S K 4 土壙（第23図）

調査区西側に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.9m、深さ20cmである。断面形は皿状を呈し、底面には凹凸がある。堆積土は1層で、黒褐色シルトの自然堆積土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、ロクロ土師器坏が出土している。また、少量の弥生土器、石錐が出土している。

S K 5 土壙（第23図）

調査区西側に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。S K 6・7・8土壙と重複し、これらのなかで最も新しい。南側を攪乱によって壊されるが、平面形は隅丸正方形とみられ、規模は一辺80cm程、深さ50cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は1層で、暗褐色シルトの人為的埋土である。

遺物は堆積土中から土師器甕、ロクロ土師器坏などが出土している。なお、ロクロ土師器坏は底部が回転糸切りで手持ちヘラケズリの再調整が施されている。

S K 6 土壙（第23図）

調査区西側に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。S K 5土壙と重複し、これよりも古い。南側をS K 5土壙に壊されるが、平面形は不整形円形とみられ、規模は径70cm、深さ50cmである。断面形は壁が底面から急に立ち上がる逆台形を呈する。堆積土は1層で、暗褐色シルトの人為的埋土である。

遺物は出土していない。

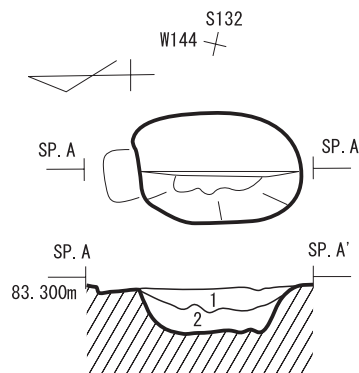
S K 7 土壙（第23図）

調査区西側に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。S K 5・8土壙と重複し、S K 5土壙より古く、S K 8土壙より新しい。北側を攪乱・S K 5土壙に壊されるが、平面形は楕円形を呈するとみられ、規模は長軸80cm、短軸60cm、深さ60cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は地山ブロック主体層と暗褐色シルト層の2層に細分される。いずれも人為的埋土である。

遺物は出土していない。

S K 8 土壙（第23図）

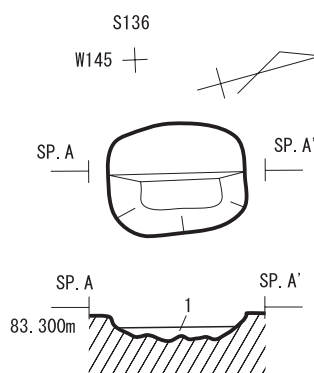
調査区東側に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。S K 5・7土壙と重複し、これらの中で最も古い。



SK3

SK3

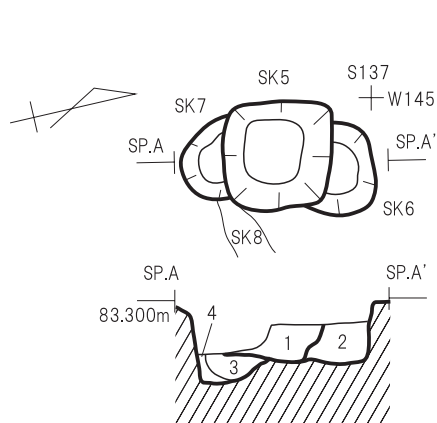
層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを少量、焼土・炭化物をごく少量含む
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック・礫をごく多量に含む



SK4

SK4

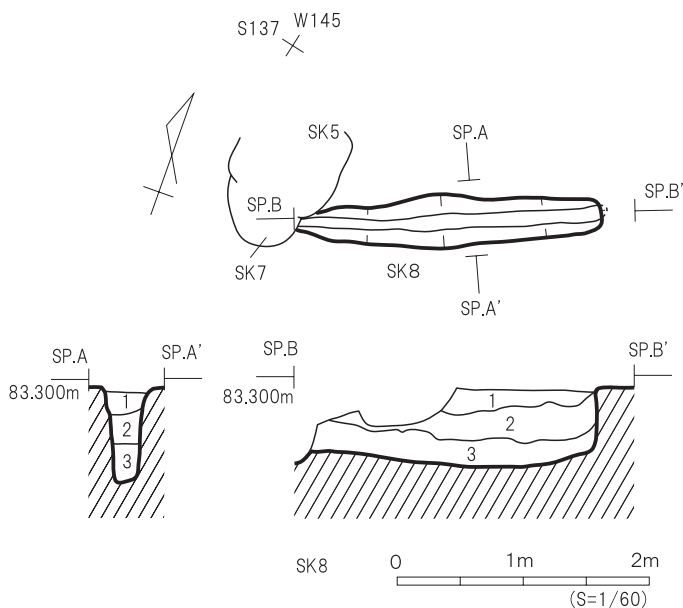
層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロック・炭化物をごく少量含む



SK5, SK6, SK7

SK5・6・7

層	土 色	土性	備 考
1	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	地山ブロックを多量に、焼土・炭化物を少量含む SK5堆積土
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック・焼土・炭化物を少量含む SK6堆積土
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロックをごく多量に含む SK7堆積土
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを少量含む SK7堆積土



SK8

層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒をごく少量含む
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックをごく少量含む
3	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック・礫を含む

第23図 SK3・4・5・6・7・8土壌

西側を攪乱によって壊されるが、平面形は東西に細長い隅丸長方形を呈するとみられ、規模は長軸2.4m、短軸0.4m、深さ60cmである。断面形はV字状を呈する。堆積土は3層に細分され、黒褐色・暗褐色・褐色シルトの自然堆積土である。その形態から「陥し穴」と考えられる。

遺物は出土していない。

I-4. D区

a. D2区

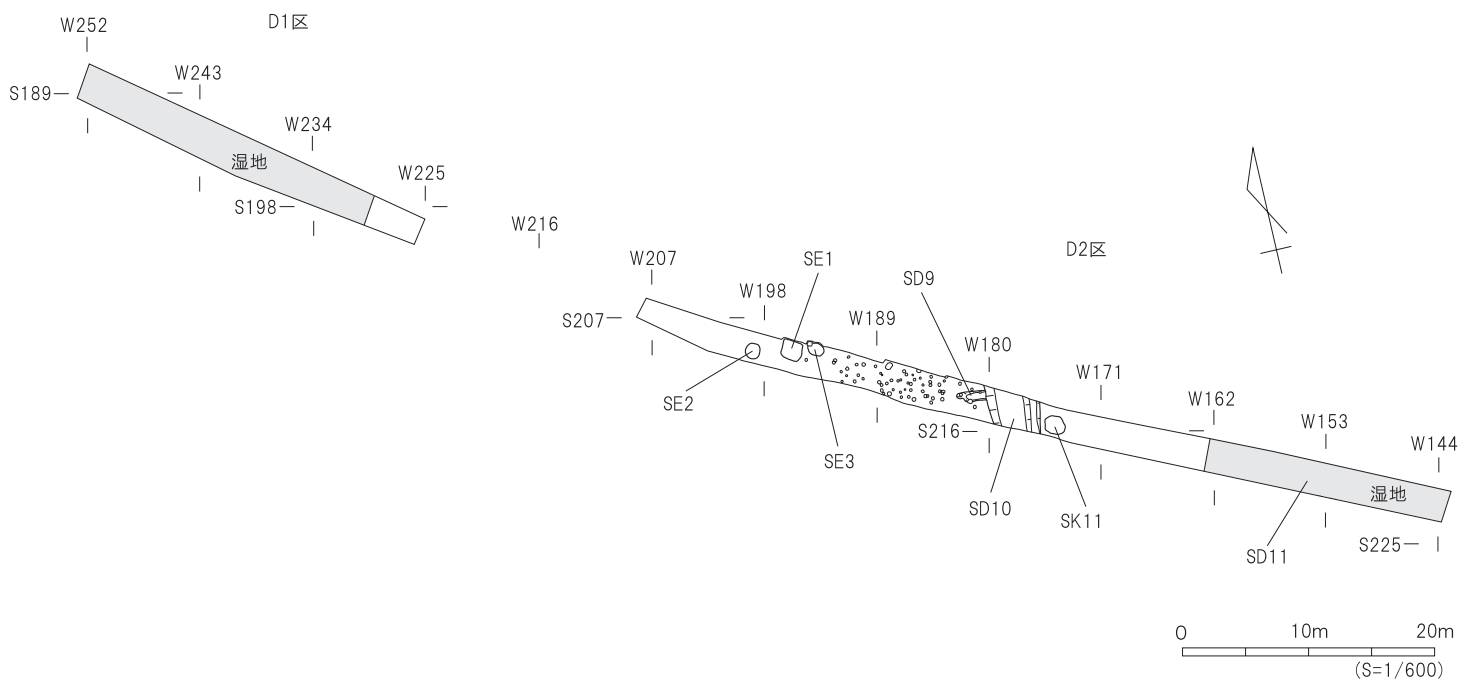
本調査区で検出した遺構は、井戸跡3基、溝跡3条、土壇1基、柱穴多数である。遺構は主に調査区中央部から西側で検出されている。これらの遺構の機能時期は概ね古代と考えられるが、遺物の出土量が少ないことから不明なものも多い。

遺物は遺構堆積土や表土から土師器坏・高坏・壺・甕、須恵器甕、ロクロ土師器坏、石製模造品、砥石、土製品、平瓦、弥生土器などが出土している。なお、ロクロ土師器の底部は回転糸切りで、およそ半分が再調整を施されている。

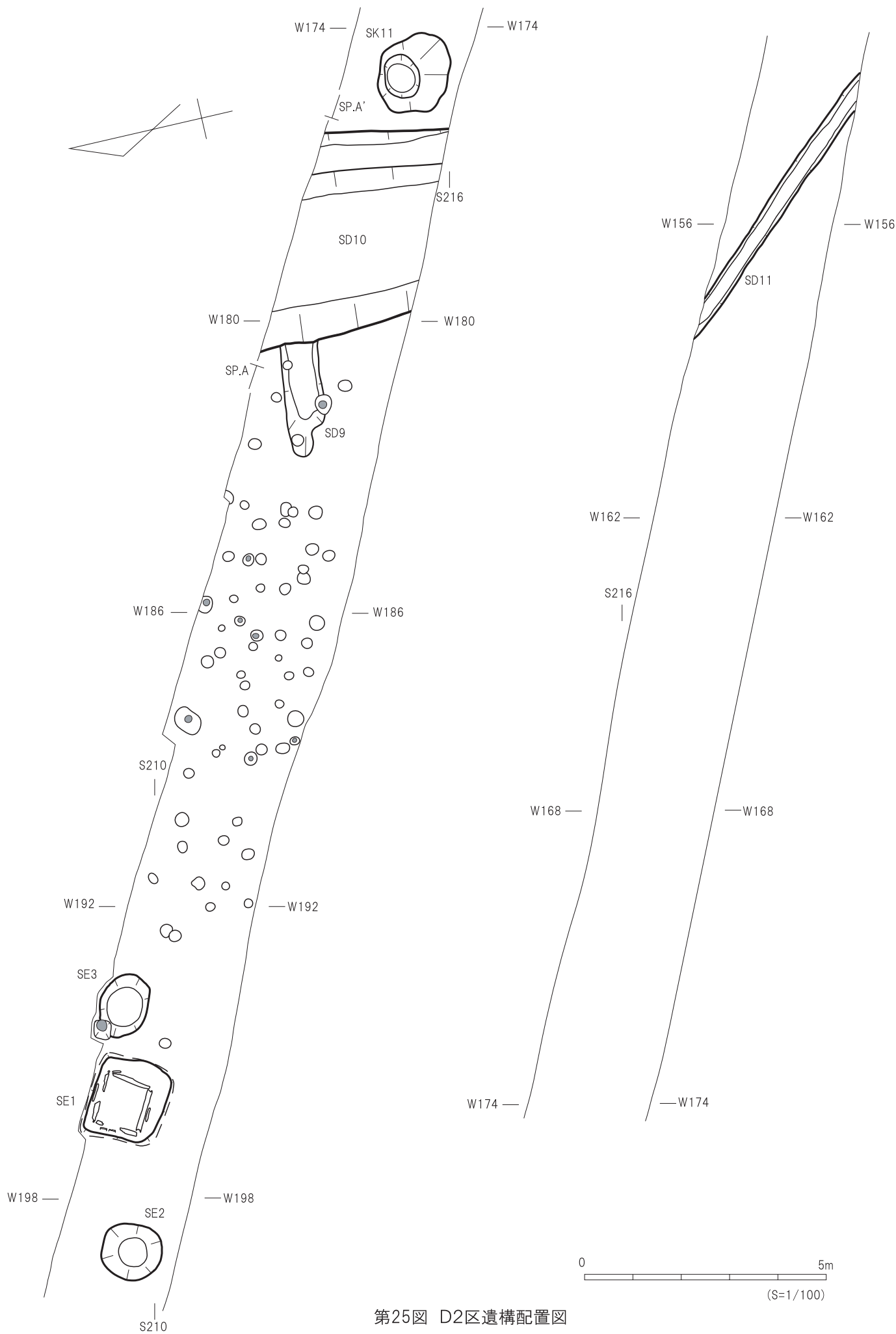
①井戸跡

SE1井戸跡（第26・29図）

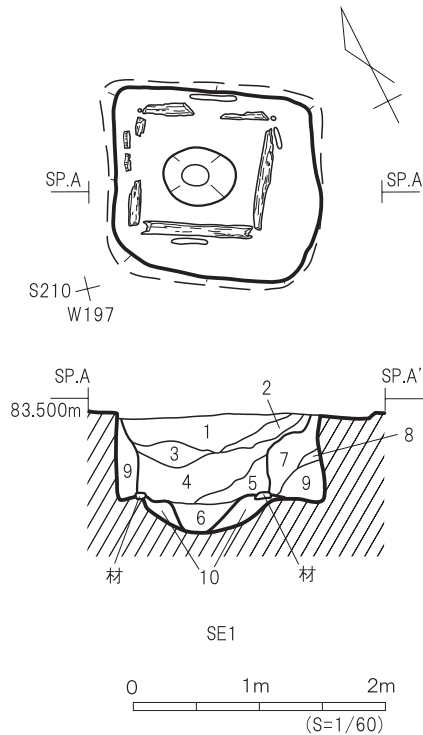
調査区西側で検出した井戸枠をもつ井戸跡で、検出面は第Ⅲ層上面である。掘り方を掘り、木組みの井戸枠を据えたものと考えられるが、井戸枠はほとんど抜き取られ、最下部のみが残存している。掘り方の平面形は隅丸正方形を呈し、規模は1辺1.6m程で、深さは約1.0mである。断面形は長方形を呈する。底面から、平面形は長軸60cm、短軸46cmの楕円形、断面形は深さ24cmの播鉢状を呈する窪みが確認された。井戸枠の抜き取り穴は径1.5m程の円形である。井戸枠は最下部の木枠が4辺と北東・北西隅の隅柱が残存している。現状で内法0.8m～1.0mである。木枠は長さ80cm、幅10cm、厚さ5cm程の板材で、両端部に加工痕などは確認できなかった。また、木枠の外側に縦板とみられる板状の材の痕跡を検出したが、抜き取りのため井戸枠の構造は不明である。堆積土は10層に細分され、1～5層が抜き取り穴堆積土、6層が井戸枠内堆積土、7～10層が掘り方埋土である。



第24図 D区全体図



第25図 D2区遺構配置図



層	土 色	土性	備 考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを含む 井戸枠井戸枠採取穴堆積土
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	砂礫を多量に含む 井戸枠採取穴堆積土
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを多量に含む 井戸枠採取穴堆積土
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロック、炭化物粒をごく少量含む 井戸枠採取穴堆積土
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘質シルト	暗褐色土ブロックを含む 井戸枠採取穴堆積土
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘 土	地山ブロックを多量に含む 井戸枠内の堆積土
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロックごく多量に含む 掘り方埋土
8	明黄褐色 (10YR6/8)	粘 土	地山ブロックごく多量に含む 掘り方埋土
9	暗褐色 (10YR3/4)	砂	小礫をごく多量に含む 掘り方埋土
10	黒褐色 (10YR3/2)	粘 土	掘り方埋土

第26図 SE 1井戸跡

遺物は、堆積土からロクロ土師器坏が、抜き取り穴から須恵器甕、砥石が出土している。ロクロ土師器坏底部は回転糸切り無調整である。

SE 2 井戸跡 (第27図)

調査区西側で検出した素掘りの井戸跡で、検出面は第Ⅲ層上面である。他の遺構との重複はない。平面形は円形を呈し、規模は径1.2m程で、深さ160cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に細分され、にぶい黄橙色の地山粘土主体層と暗褐色シルト層である。

遺物は、堆積土中から土師器坏・甕が少量出土している。

SE 3 井戸跡 (第27図)

調査区西側で検出した素掘りの井戸跡で、検出面は第Ⅲ層上面である。ピットと重複し、これよりも古い。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.3m、短軸1.0mで、深さ140cmである。断面形は上部がやや広がる長方形を呈する。堆積土は6層に細分され、いずれも小礫・砂・地山を含み、上層は人為的埋土とみられる。

遺物は、堆積土中から土師器坏、須恵器甕がごく少量出土している。

② 溝跡

SD 9 溝跡 (第25図)

調査区中央部で検出した東西方向の溝跡で、検出面は第Ⅲ層上面である。SD 10 溝跡と重複し、

これよりも古い。西側をSD10溝跡に壊されるが、検出長は約2.4mで、規模は上端幅0.7～0.8m、下端幅0.5m、深さ15～20cmである。断面形は逆台形を呈し、溝跡底面には凹凸がある。堆積土は1層で、黒褐色シルトの自然堆積土である。

遺物は、堆積土中から土師器高坏・壺・甕、須恵器甕が出土している。なお、古墳時代中期の土師器壺には赤彩が施されているものがある。

SD10溝跡（第25・27・29図）

調査区中央部で検出した南北方向の溝跡で、検出面は第Ⅲ層上面である。SD9溝跡と重複し、これよりも新しい。検出長は3.5mで、さらに調査区外南北に延びる。方向は北で3度東に偏している。規模は上端幅3.8～4.5m、下端幅2.0～2.3m、深さ70cm程である。断面形は上部が開く逆台形を呈する。堆積土は8層に細分され、いずれも自然堆積土である。

遺物は、遺構確認面と堆積土から土師器坏・高坏・壺・甕、石製模造品、土製品、ごく少量の弥生土器、中世陶器甕が出土している。このうち、古墳時代中期の土師器高坏には赤彩が施されているものがある。

SD11溝跡

調査区東側で検出した北西～南東方向の溝跡で、検出面は第Ⅲ層上面である。検出長は5.7mで、さらに調査区外北西～南東方向に延びる。規模は上端幅0.45m、下端幅0.2m、深さ20cm程である。断面形はU字状を呈する。堆積土は1層で、黒褐色粘質シルトの自然堆積土である。

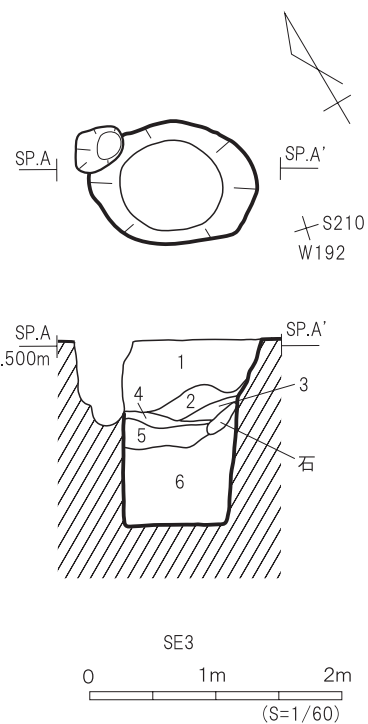
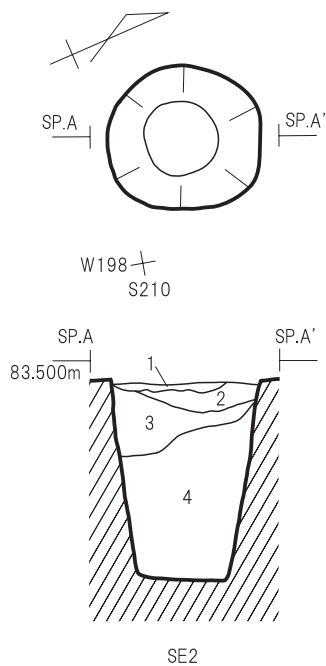
遺物は、堆積土から土師器坏・高坏・甕、須恵器甕、弥生土器が若干出土している。

③土壇

SK11土壇（第28・29図）

調査区中央部に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。平面形は不整楕円形を呈し、大きさは長軸1.8m、短軸1.5m、深さ80cmである。断面形は逆台形で、土壇底面は南東側でやや浅く、壁は急に立ち上がる。堆積土は6層に細分される。黒褐色・暗褐色のシルトで、いずれも自然堆積土である。

遺物は、堆積土から土師器坏・甕、弥生土器鉢が出土している。

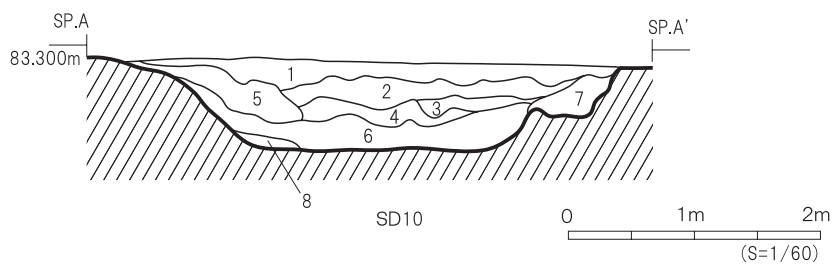


SE 2

層	土 色	土性	備 考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土小ブロックを少量含む
2	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粘 土	暗褐色土ブロックを含む
3	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粘 土	黒褐色土を多量に含む
4	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粘 土	黒褐色土を含む

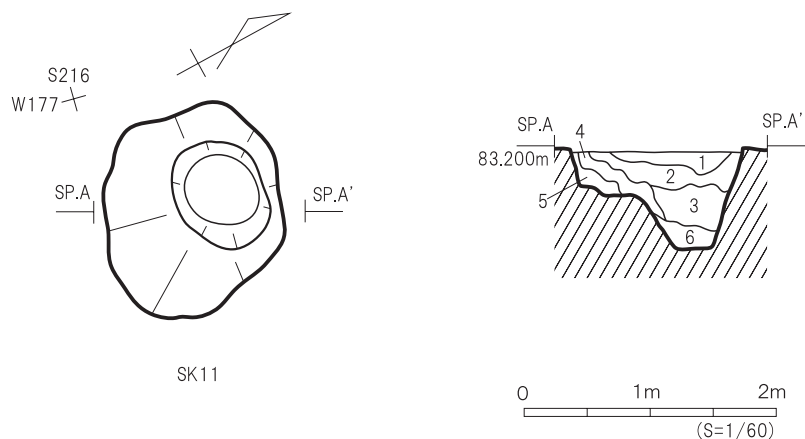
SE 3

層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山土・小礫を含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	小礫を多量に含む
3	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粘 土	
4	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山粒を少量含む
5	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質シルト	灰白色粘土・砂を多量に含む
6	オリーブ黒色(5Y3/2)	粘質シルト	砂を多量に、灰白色粘土を少量含む



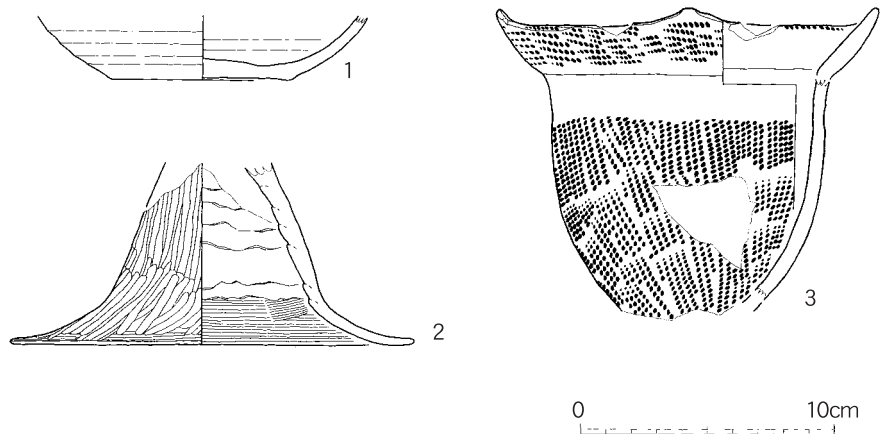
層	土 色	土性	備 考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山土・炭化物粒を含む
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山土・炭化物粒を含む
3	暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	地山小ブロックを含む
4	暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	地山小ブロックを少量含む
5	黒褐色(10YR2/3)	粘質シルト	地山粒を多量に含む
6	暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	地山土を多量に含む
7	暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む
8	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒を多量に含む

第27図 SE2・3井戸跡・SD10溝跡



層	土 色	土性	備 考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒をごく少量含む
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を少量含む
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を含む
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	黒褐色土を含む
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	黒褐色土を少量含む
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを多量に含む

第28図 SK11土壌



No.	区	遺構	層位	種 類	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	器高	残存	備 考	写真	登録
1	D2	SE1	堆積土	ロクロ土師器・坏	ロクロナデ(底)回転糸切無調整	ロクロナデ	—	7.0	(2.5)	一部			87
2	D2	SD10	堆積土	土師器・高坏	(裾)ヨコナデ→(脚~裾)ヘラミガキ	ナデ	—	16.0	(7.15)	脚部のみ	(底径=裾径)		81
3	D2	SK11	堆積土	弥生土器・鉢	(口)押圧縄文(口~胴)縄文RL→頸部擦消		(15.1)	—	(12.3)	一部	弥生土器	8-6	137

第29図 SE1井戸跡・SD10溝跡・SK11土壌出土遺物

1-5. その他の出土遺物

ここでは表土や湿地堆積土などの遺構外出土遺物や、土製品、石製品などについて概述する。

本遺跡は昭和30年代に行われた土取り工事の際、多量の遺物が表土層に混入した。今回の調査でも表土から非常に多くの遺物が出土したが、ほとんどが小破片で接合するものも少ない。土師器、ロクロ土師器、須恵器、赤焼土器、土製品、青磁、中世陶器、瓦、石製品、鉄製品、弥生土器、石器などがあり、数量的には土師器、ロクロ土師器が大部分を占める。

1. 土師器、ロクロ土師器、須恵器（第30図・第31図1～6）

いずれも表土などから多量に出土している。土師器には坏・高坏・壺・甕・甑が、ロクロ土師器には坏・甕が、須恵器には壺・甕がある。このうち土師器9点、ロクロ土師器9点、須恵器5点を図示した。第30図1・2は土師器坏である。体部外面に段をもち、内面に対応する屈曲をもつ。この特徴から栗圀式の範疇におさまり、年代は7世紀代と考えられる。第30図3～5は高坏である。脚部のみの破片資料で、全体の器形を捉えられるものはない。3は円錐状を呈する裾部である。外面調整は緻密なヘラミガキが施されている。4は円錐状を呈する柱状部である。内外面調整は摩滅のため不明であるが、形状から南小泉式とみられ、年代は5世紀代と考えられる。5は円錐状を呈する脚部である。裾部は大きく開く。形態から年代は7世紀～8世紀頃と考えられる。6・7は土師器壺である。6は須恵器壺の模倣とみられ、全体の器形は捉えられないが、口縁部に隆帯をもつ。口頸部内外面は緻密なヘラミガキが施され、内面は黒色処理されている可能性がある。7は二重口縁で、胴部は球状を呈するものとみられる。形態から南小泉式と考えられ、年代は5世紀代と考えられる。8は土師器甕で、胴部は長胴を呈する。頸部に段をもち、口縁部は大きく外反する。外面調整は摩滅が著しいが、縦方向のハケメが認められる。この特徴から栗圀式の範疇におさまり、7世紀代を中心とした年代が考えられる。9は土師器甑である。破片資料のため全体の器形は捉えられない。無底式で外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキが施される。10～14はロクロ土師器坏である。14以外の全てにおいて、底部・体部下端に切り離しのち手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。いずれも内面底部のヘラミガキは放射状である。15～17はロクロ土師器高台坏で、いずれも付け高台で、内面底部のヘラミガキは放射状である。破片資料のため、全体の器形を把握できるものはない。15・16は高台が高く外側に開いている。17は低い三角高台をもつ。第31図1はロクロ土師器甕である。破片資料のため、全体の器形は把握できない。胴部は直立気味で、口縁部は外反する。内面はヘラミガキのち黒色処理が施されている。これらのロクロ土師器坏・高台坏・甕は9世紀以降に普及すると考えられていることから、時代的には平安時代に属するものと考えられる。2～4は須恵器甕である。2・3は口縁端部がつまみ出されて縁帯状をなし、胴部は肩部が張るものとみられる。4は胴下部～底部の破片資料である。平行タタキのちヘラケズリが施されている。5・6は須恵器壺でいずれも長頸壺とみられる。5は頸部の付け根にリング状の隆帯をもつもので、6は高台をもち胴部下端に回転ヘラケズリが施されている。

2. 墨書土器（第31図8・9）

表土から2点出土している。破片資料ではあるが、このうち1点を判読した。第31図9はロクロ土師器坏の底部に複数字が墨書されており、「大寺」と判読された。同10はロクロ土師器坏の底部に複数字が墨書されているが、判読には至らなかった。年代は墨書される土師器坏がロクロ調整であること、推定される器形や底部の切り離し・再調整などから概ね9世紀代と考えられる。

3. 青磁（第31図10）

表土から1点出土している。全体の器形は不明であるが碗とみられる。釉は青灰色で、胎土は灰白色を呈し、緻密である。断面に補修痕とみられる漆状の付着物が認められる。

4. 中世陶器（第32図1～3）

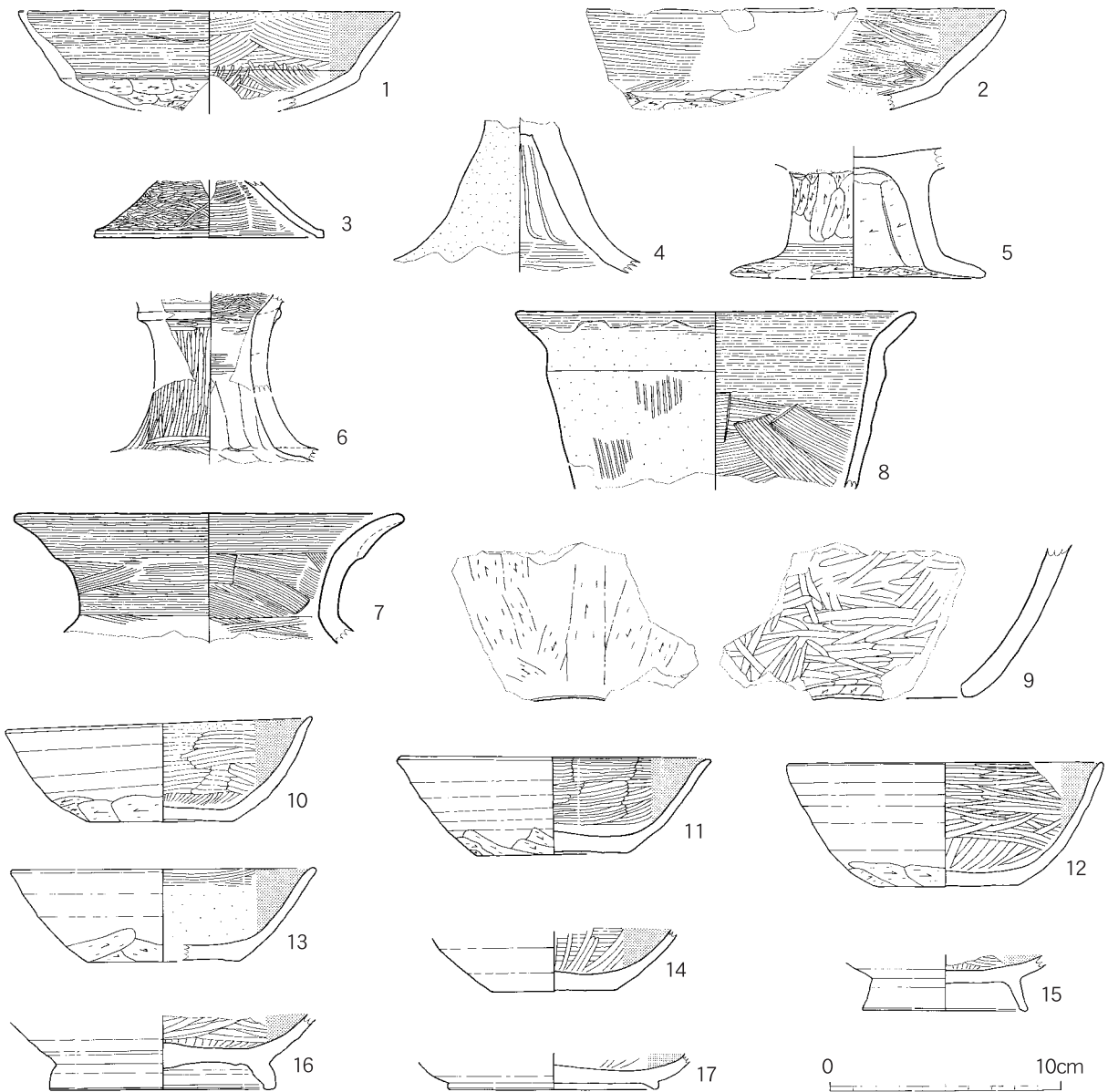
表土などから20点出土している。大部分は甕胴部破片で、全体の器形を把握できるものはないが、碗・播鉢・甕がみられる。在地産とみられるものが多いが、常滑産も若干量出土しており、この中には12世紀代のものとみられるものがある。3点を図示した。第32図1は播鉢である。体部が直線的に外傾し、そのまま口縁部に至るものである。7本単位の櫛歯状の工具で筋目を施し、「+」のヘラ描きも認められる。同2・3は甕胴部である。いずれも格子簾状の押印が認められ、常滑産と考えられる。

5. 陶器（第31図7）

表土から1点出土している。全体の器形は不明であるが小碗とみられる。内面に茶褐色の釉が施されており、外面は無施釉である。外面底部に字が墨書されているが、判読には至らなかった。

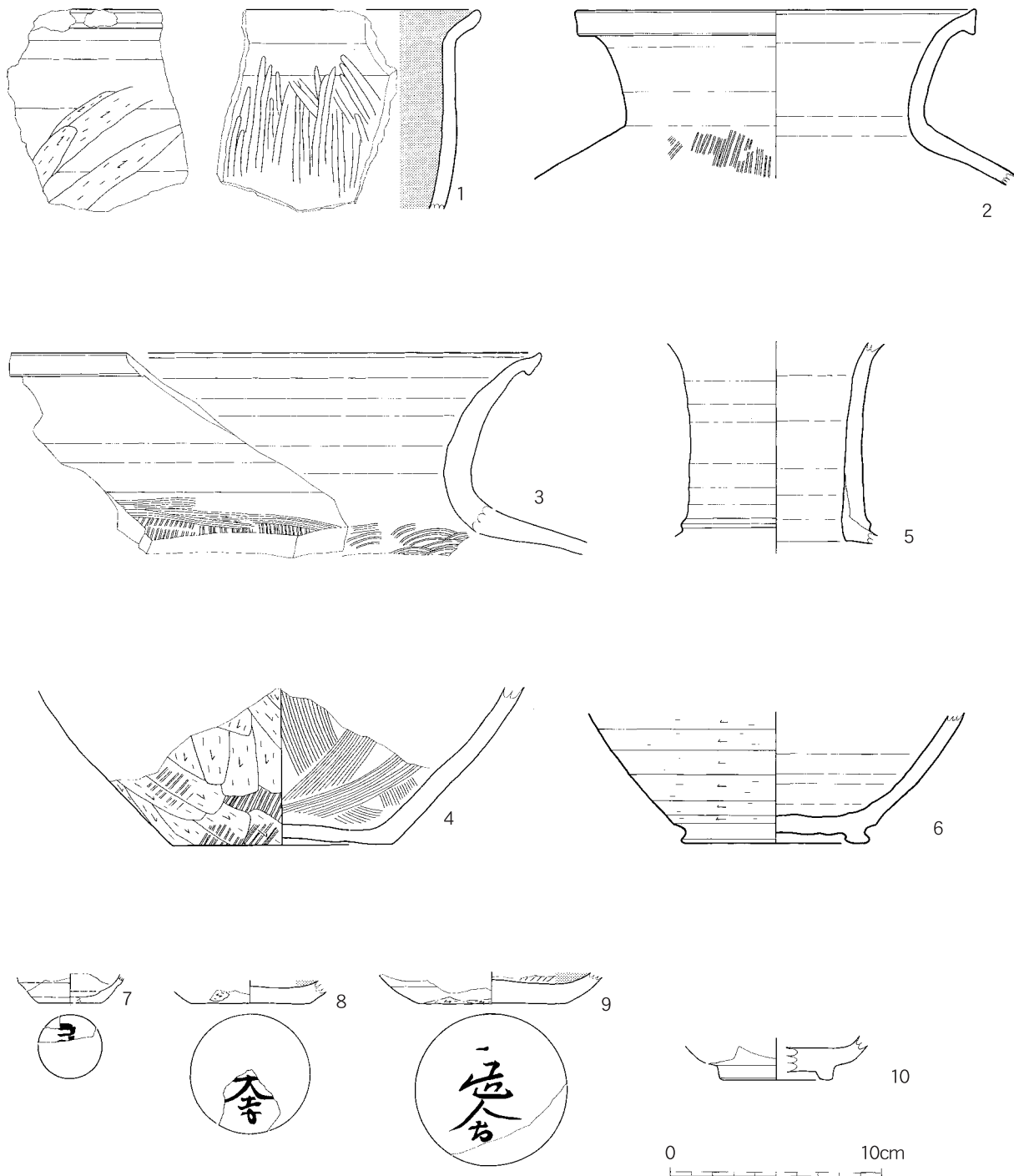
6. 瓦（第32図4～7）

表土・C1区SD12河川跡から軒平瓦・平瓦・丸瓦が8点出土している。いずれも小破片である。全体的に厚みがあり、胎土に砂粒を含む。焼成はやや不良のものもある。このうち4点を図示した。第32図4は軒平瓦で、瓦当文様は半截管状工具によるロクロ挽き三重弧文の可能性はある。凸面は斜格子タタキで、顎面の鋸歯文は小破片のため確認できない。凹面・側面はヘラケズリが施され、凹面のヘラケズリは縦方向である。色調は黄褐色を呈し、焼成はやや不良である。同5は平瓦で、凸面が斜格子タタキ、凹面・側面がヘラケズリである。凹面のヘラケズリは縦方向で、布目は確認できない。同6は平瓦で、凸面がナデ調整で叩き目は認められない。凹面は布目、側面・小口面はヘラケズリである。同7は平瓦としたが、曲率などから丸瓦の可能性もある。凸面・側面・小口面がヘラケズリで、凸面のヘラケズリは縦方向である。凹面は布目である。これらの他、図示できなかったものに丸瓦とみられるものがあり、凸面が縦方向のヘラケズリ、凹面が布目である。これらの瓦類は、共通して模骨痕が認められないことから、一枚造りの可能性が高い。



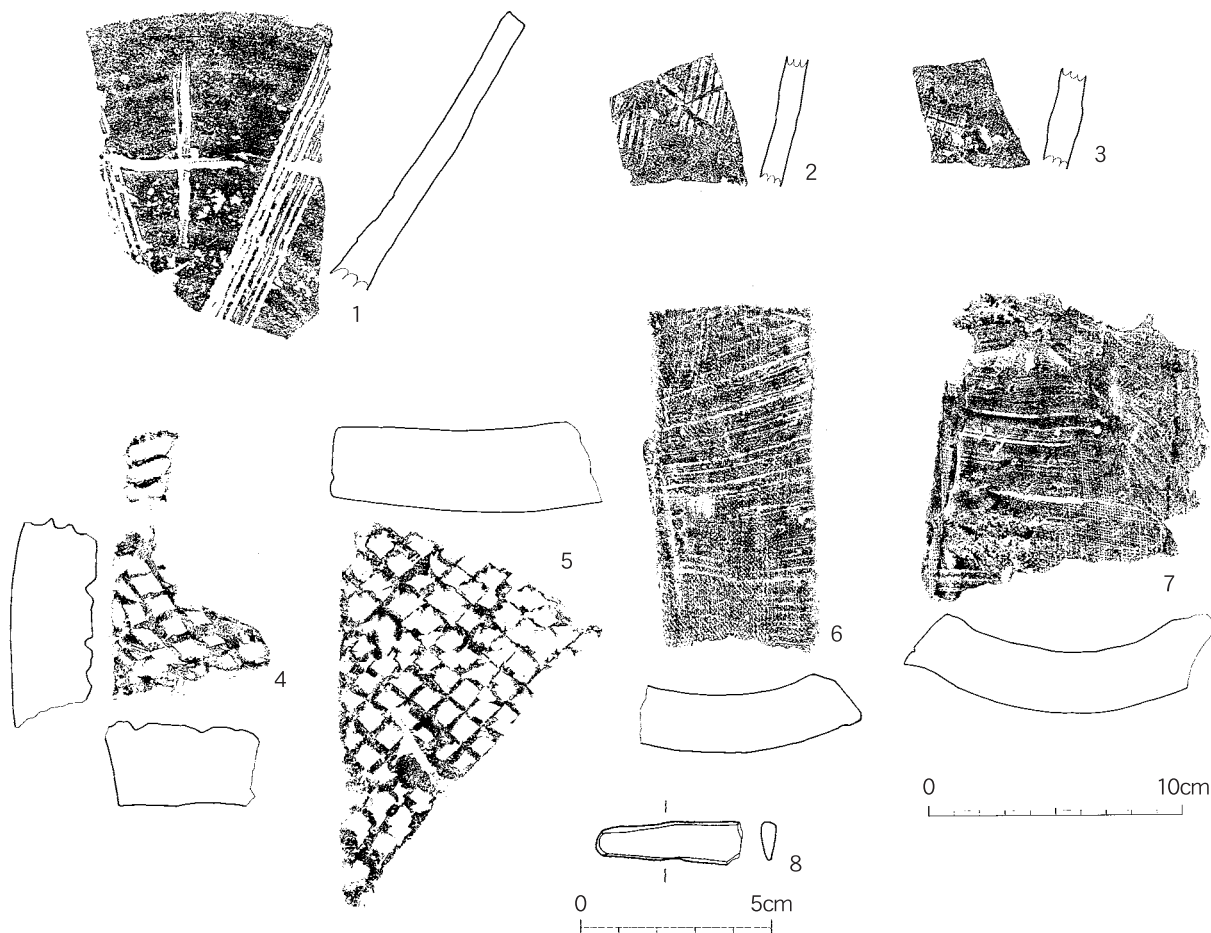
No	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	C1	表土	土師器・杯	(口)ヨコナデ(体~底)ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(16.6)	丸底	(4.3)	1/5	口縁部摩滅			63
2	C1	表土	土師器・杯	(口)ヨコナデ(体)ナデ→ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	—	—	(4.4)	一部	内面摩滅			66
3	C1	表土	土師器・高杯	ヘラミガキ	(裾端)ヨコナデ(裾)ハケメ→ナデ	—	(10.0)	(2.5)	一部				77
4	C2	表土	土師器・高杯	摩滅により不明	(脚)シボリメ(裾)ナデ	—	—	(6.7)	一部	外面摩滅			51
5	B2	表土	土師器・高杯	(脚)ヘラケズリ(裾)ヨコナデ→ヘラケズリ	(脚~裾)ヘラケズリ	—	11.1	(5.7)	脚部のみ	(底径=裾径)			88
6	B1	表土	土師器・壺	ヘラミガキ	(上部)ナデ→ヘラミガキ(下部)シボリメ	—	—	(7.4)	一部		11-3		105
7	C1	表土	土師器・壺	(口)ナデ→ヨコナデ	(口)ヘラナデ→ヨコナデ	(16.9)	—	(5.6)	一部				64
8	B2	表土	土師器・甕	(口)ヨコナデ(胴)ハケメ	(口~胴)ナデ→ヘラナデ	(17.4)	—	(7.7)	一部	外面摩滅多い			33
9	C1	表土	土師器・甕	ヘラケズリ(火ハネ有り)	(胴)ヘラミガキ(底)ヘラケズリ	—	—	(6.8)	一部				72
10	C1	表土	ロクロ土師器・杯	(体)ロクロナデ(体下)手持ちヘラケズリ(底)回転糸切→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	13.3	6.2	4.2	ほぼ完形	口縁部摩滅	11-2		41
11	C1	表土	ロクロ土師器・杯	(体)ロクロナデ(体下)手持ちヘラケズリ(底)回転糸切→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	13.6	6.4	4.2	3/5		11-1		40
12	B3	表土	ロクロ土師器・杯	(体)ロクロナデ切り離し不明→(体下~底)手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(13.7)	(6.4)	5.4	1/5				70
13	C1	表土	ロクロ土師器・杯	(体)ロクロナデ(体下)手持ちヘラケズリ(底)回転糸切→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(13.2)	(6.4)	4.0	1/3	内面摩滅多い			44
14	D2	表土	ロクロ土師器・杯	(体)ロクロナデ(底)回転糸切無調整	ヘラミガキ→黒色処理	—	(5.5)	(2.6)	一部				49
15	C1	表土	ロクロ土師器・高台杯	(体)ロクロナデ(底)切り離し不明→高台接合→ロクロナデ	ヘラミガキ(底面放射状)→黒色処理	—	(7.2)	(2.4)	一部				94
16	C1	表土	ロクロ土師器・高台杯	ロクロナデ 切り離し不明	ヘラミガキ→黒色処理	—	9.8	(3.2)	一部				74
17	C1	表土	ロクロ土師器・高台杯	(体)ロクロナデ(底)切り離し不明→高台接合→ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理	—	(9.1)	(1.6)	一部				97

第30図 その他の出土土器(1)



No	区	遺構	層位	種 類	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	器高	残存	備 考	写真	登録
1	C1		表土	ロクロ土師器・甕	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理	—	—	(9.4)	一部			62
2	C1		表土	須恵器・甕	(口)ロクロナデ(胴)平行タタキ	(口~頸)ロクロナデ	(19.0)	—	(8.0)	一部			34
3	C1		表土	須恵器・甕	平行タタキ→ナデ→ロクロナデ	同心円状オサエ→ロクロナデ	—	—	(9.7)	一部			114
4	C1		表土	須恵器・甕	(胴)平行タタキ→ヘラケズリ(底)ナデ	(胴)ナデ	—	(10.4)	(7.4)	一部			24
5	C1		表土	須恵器・広口壺	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	(9.5)	一部			75
6	C1		表土	須恵器・壺	(胴下)回転ヘラケズリ(底)切離し不明→高台接合後高台ロクロナデ	ロクロナデ	—	8.9	(6.2)	一部			46
7	B2		表土	陶器・器種不明	ロクロナデ(底)回転糸切無調整	ロクロナデ→ [*] 施釉	—	3.0	(1.4)	一部	外面底部に墨書「口」	12-2	117
8	C1		表土	ロクロ土師器・坏	(体下~底)手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	—	(5.6)	(1.1)	一部	外面底部に墨書「大寺」?	12-3	140
9	C1		表土	ロクロ土師器・坏	(体)ロクロナデ(体下)手持ちヘラケズリ(底)手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	—	(7.1)	(1.5)	一部	外面底部に不明墨書		141
10	C2		旧表土	青磁・碗	施釉	施釉(高台無釉)	—	(5.40)	(2.1)	一部	割れ口に漆継ぎ痕跡あり	12-4	128

第31図 その他の出土土器(2)・青磁



No.	区	遺構	層位	種 類	外 面 調 整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備 考	写真	登録
1			表土	中世陶器・擂鉢		筋目あり	—	—	(11.1)	一部	内面にへら書「十」	12-7	112
2	D2		表土	中世陶器・甕(常滑)	押印(簾状)		—	—	—	一部		12-5	142
3	D2		表土	中世陶器・甕(常滑)	押印(格子状)		—	—	—	一部		12-6	143
4	C1	SD12	堆積土4層	軒平瓦	特徴(凹)ヘラケズリ(凸)格子状タタキ		長(8.2)	幅(5.9)	厚(2.3)	一部	三重弧文?	12-12	144
5	B2		表土	平瓦	特徴(凹)ヘラケズリ・ナデ(凸)格子状タタキ(側)ヘラケズリ		長10.7	厚3.3	—	一部		12-10	109
6	A2		表土	平瓦	特徴(凹)ヌノメ(凸)ナデ(側)ヘラケズリ		長(8.8)	厚2.3	—	一部		12-9	107
7	D		表土	平瓦	特徴(凹)ヌノメ(凸)ヘラケズリ(側)ヘラケズリ		長(12.3)	厚2.4	—	一部		12-11	108
8	C1		表土	鉄製品・刀子?			長(3.9)	幅(1.1)	厚(0.4)	一部		13-15	139

第32図 中世陶器・瓦・鉄製品

7. 土製品

〔ミニチュア土器〕 (第33図1～5)

S I 2 堅六住居跡及びSD10溝跡から5点出土している。いずれも手捏ね土器で坏形である。全体に厚手で、体部が外傾するもの（第33図1・4）と内弯気味に立ち上がるもの（同2・3・5）がある。同1～3は指オサエや指頭によるナデが内外面に認められる。同4は外面調整にハケメが施されている。同5は破片資料で全体の器形は不明であるが、口縁部に径0.2cmほどの穿孔がある。

〔転用砥〕 (第33図6)

C 1 区表土から1点出土している。素材に須恵器甕の胴部破片を用いたもので、破断面のうち1辺のみを使用している。

8. 石製品

〔模造品〕（第33図7～11）

S I 2 竪穴住居跡床面、S D 6・10 溝跡堆積土などから5点が出土している。第33図7・8は剣形である。7は片面に鏑が作出されている。同9～11は有孔円盤形で、単孔のもの（同9・10）と複孔のもの（同11）がある。平面形状は単孔のものが楕円形と長方形、複孔のものが不整楕円形を呈している。いずれも研磨痕が顕著に観察される。石材は、同11が滑石製である以外は不明である。

〔紡錘車〕（第34図1～3）

S I 1 竪穴住居跡床面などから3点が出土している。径4.2～4.4cmほどで、断面形は台形、D字形である。いずれも中央の孔はほぼ垂直にあげられている。同1は全体に緻密に作られており、側面には鋸歯文が巡っている。石材は不明確であるが、第35図2は珪化木の可能性がある。

〔砥石〕（第35図）

S I 2 竪穴住居跡、S E 1 井戸跡などから5点出土している。砂岩や凝灰岩などを用いている。大型の角柱礫を素材としたとみられるもの（第35図1・2）と柱状の形態をもつ小～中型品（同3～5）がある。砥面は4面以上のものが多い。同2の研磨面には溝がみられる。断面形はV字形を呈し、製品を研いだ痕跡と考えられる。

〔不明品〕（第34図5）

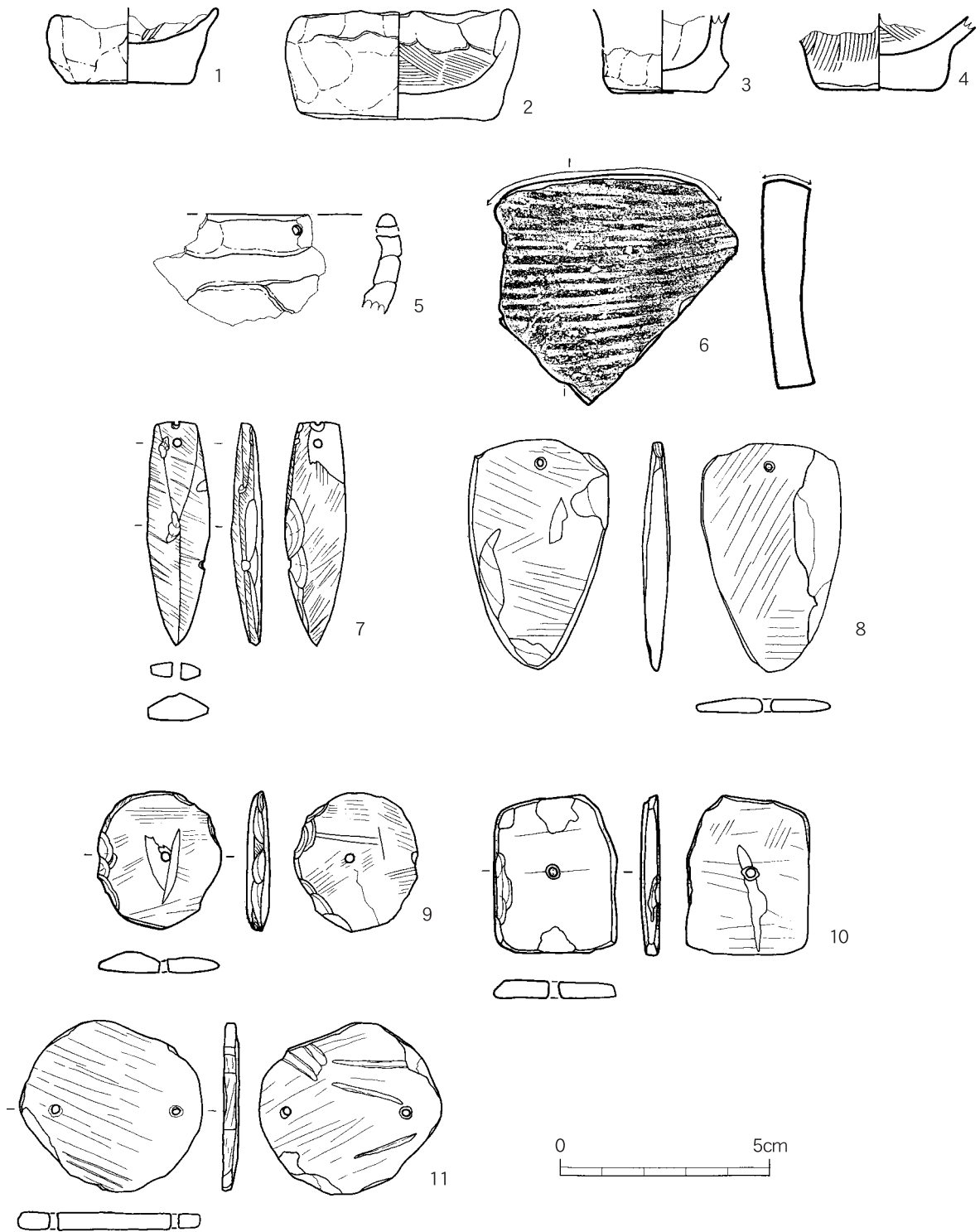
S I 2 竪穴住居跡床面から1点出土している。破片資料のため全体の形状は不明であるが、径約0.5cmの穿孔が2個認められる。素材は粘板岩である。

9. 鉄製品（第32図8）

表土から1点出土している。小片で全体の形状は不明であるが、刀子とみられる。

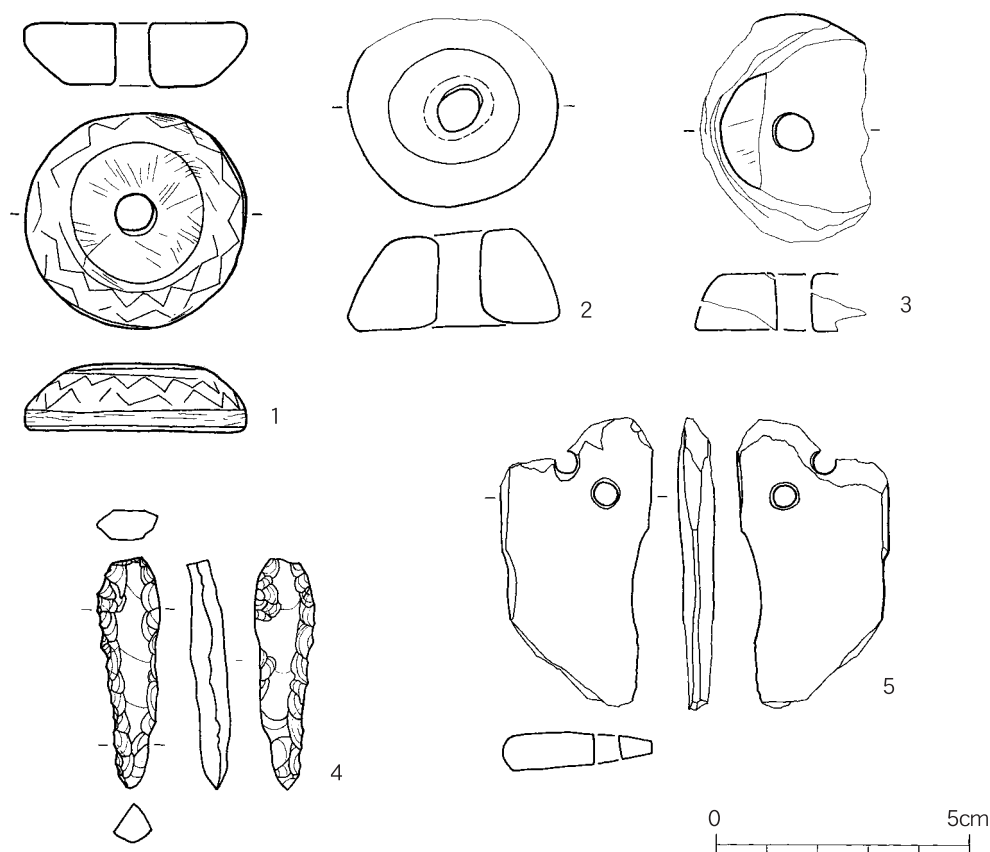
10. 弥生土器（第36図）

表土などから出土している。いずれも小片で、器形の判明するものは少ない。第36図4・7・9・10・12・13・18・19は、その文様的特徴から弥生時代中期円田式のものともみられる。同10は、器種は不明だが頸部が屈曲して口縁部が外形するもので、体部に平行沈線、口縁部に三重の連弧文を施す。体部に長さ約7mm、幅約4mm、深さ約3mmの植物種子の圧痕が認められる。圧痕の表面には約1.5mm間隔で縦方向の条が認められ、さらに条間には12～15本の微細な縦条と、縦条と並行する微細な横条がみられる。こうした特徴はイネ穎果にみられるものであることから、この圧痕はイネのものと考えられる。同1・11・14・16・17・21・22は、その文様的特徴から弥生時代後期天王山式のものともみられる。



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	D2	SD10	堆積土2層	土製品(ミニチュア)	ナデ	ナデ・ナデツケ	3.9	2.9	1.8	4/5	口縁多くが欠損	12-1	135
2	C2	SI2	堆積土2層	土製品(ミニチュア)	(体)オサエ(底)ナデ	ナデ	5.5	4.8	2.7	完形		10-1	55
3	C2	SI2	堆積土1層	土製品(ミニチュア)	ナデ	ナデ	—	2.4	(2.0)	一部		10-2	78
4	C2	SI2	床	土製品(ミニチュア)	ハケメ	ナデ	—	2.8	1.8	一部			82
5	C2	SI2	床直	土製品(ミニチュア)	ナデ	ナデ	—	—	(2.3)	一部	口縁付近に孔	10-3	138
6	C1		表土	土製品・転用砥	特徴 長5.5 幅5.6 厚1.0					完形	一辺使用	12-8	110
7	D2		表土	石製模造品・剣	特徴 長5.3 幅1.5 厚0.7 孔径0.2 重6.6g					完形	片面に錆	13-4	132
8	D		廃土中	石製模造品・剣	特徴 長5.5 幅3.4 厚0.6 孔径0.2 重17.4g					完形		13-5	130
9	C2	SI2	床	石製模造品・単孔円盤	特徴 長3.3 幅2.9 厚0.5 孔径0.2 重7.5g					完形		13-1	131
10	D2	SD10	堆積土	石製模造品・有孔円盤	特徴 長3.8 幅2.9 厚0.4 孔径0.2 重9.1g					ほぼ完形		13-3	122
11	C1	SD6	堆積土3層	石製模造品・有孔円盤	特徴 長4.1 幅4.4 厚0.5 孔径0.2 重13.6g					完形	石材 滑石	13-2	125

第33図 土製品・石製品



No.	区	遺構	層位	種 類	特 徴	石 材	長	幅	厚	孔径	重(g)	残存	備 考	写真	登録
1	B2		表土	石製紡錘車	側面に鋸歯紋		4.4	4.3	1.3	0.7	40.0	完形		13-8a,b	126
2	C2	SI2	床面	石製紡錘車	磨耗激しい	珪化木?	4.2	(3.7)	1.9	0.8	9.2	ほぼ完形		13-6	129
3	C1		表土	石製紡錘車			(4.5)	(3.3)	1.1	0.7	15.8	一部		13-7	124
4	C2	SK4	埋土1層	石錐		流紋岩	4.6	1.3	0.7	—	3.8	完形		13-16a,b	133
5	C2	SI2	床	不明石製品	穿孔 2 個	粘板岩	(5.7)	3.0	0.7	0.5	11.2	一部		13-14	119

第34図 石製品・石器

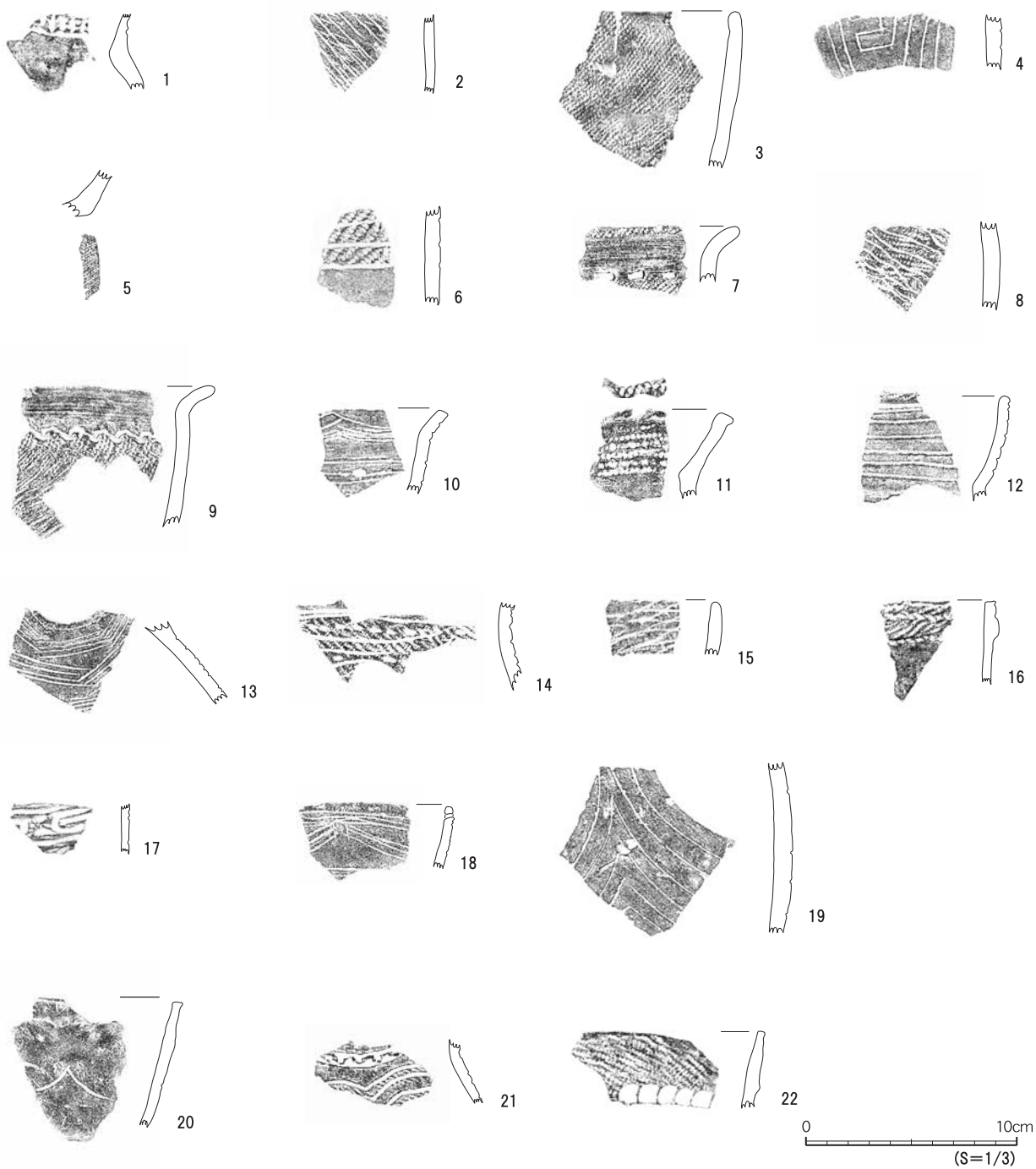
11. 石器（第34図4）

S K 4 堆積土から石錐が1点出土している。長さ4.6cm、幅1.3cm、厚さ0.7cmで、石材は流紋岩である。



No.	区	遺構	層	種 類	特 徴	石 材	長	幅	厚	重(g)	残存	備 考	写真	登録
1	C2	SI2	床	砥石	三面使用		(12.4)	8.1	5.2	955.0	一部		13-9	120
2	D2	SE1	堆積土	砥石	四面使用	凝灰岩	10.8	7.6	5.3	669.0	完形	砥面に溝あり	13-10	121
3			表土	砥石	三面使用	砂岩	(9.0)	3.5	3.3	97.5	一部		13-12	118
4	C1		表土	砥石	四面使用		(6.0)	5.0	3.3	142.0	一部		13-13	123
5			表土	砥石	五面使用	凝灰岩	(8.2)	5.5	4.4	273.0	一部		13-11	127

第35図 砥石



No.	区	遺構	層位	種類	特 徴	写真	登録	No.	区	遺構	層位	種類	特 徴	写真	登録
1	B2	SI1	貯蔵穴埋土	弥生	横位沈線 縦方向の刺突		63	12	C2	SI2	堆積土	弥生	平行沈線文		88
2	B2	SD2	堆積土	弥生	朱彩 燃系R		34	13	C2	SI2	堆積土	弥生	多角形櫛書		71
3	B2		表土	弥生・甕	縄文LR		102	14	C2	SI2	堆積土	弥生	縄文LR 波状沈線文 頸部列点文		74
4	B2		表土	弥生	重四角文		69	15	C2	SI2	堆積土	弥生	燃系R		84
5	B3	SD1	堆積土	弥生	縄文LR 底部に布目圧痕		62	16	C2	SI2	堆積土	弥生・甕	口縁部縄文LR 口縁部と頸部に押圧縄文		87
6	B3	SD1	堆積土	弥生	縄文RL 横位沈線		3	17	C2	SI4	堆積土	弥生	工字文		60
7	B3		表土	弥生・甕	縄文LR 頸部列点 口唇部縄文		82	18	C2		表土	弥生	山形文 孔 1		105
8	B3		表土	弥生	縄文LR 波状燃系R		29	19	C2		表土	弥生	同心円文		67
9	B3		表土	弥生・甕	燃系R 口唇部燃系R		103	20	D2		表土	弥生			100
10	C2	SI2	堆積土	弥生	平行沈線文 連弧文 植物種子圧痕	12-13a	98	21	D2		表土	弥生・壺	朱彩 縄文RL 頸部交互刺突		70
11	C2	SI2	堆積土	弥生・甕	口縁部縄文LR 口唇部押圧縄文LR		90	22			表探	弥生・甕	口縁部縄文RL 複合口縁下端に押圧		97

第36図 弥生土器

1-6. 都遺跡出土の瓦について

本遺跡は古くから瓦を含む多量の遺物が散布していることで知られ、仙南地方の古代史上重要な遺跡として認識されていた。遺跡は本来丘陵に立地していたが、昭和30年代に行われた藪川築堤工事の際に土取り場となり、大きく削平を受け、現在は平坦な耕作地となっている。その時、近隣の研究者や作業の従事者によって相当量の遺物が採集された。本節で取り上げる瓦も当時町内の小学校教員であった小島亮治氏によって採集されたものである。大半が消滅してしまった本遺跡の性格を推定するひとつの資料として今回紹介することとした。

採集された瓦は軒平瓦と丸瓦が各1枚である。丸瓦に「昭三十六 二、二 都出土」の注記があるだけで、詳しい出土状況などは不明である。この丸瓦は蔵王町史資料編Ⅰのなかで紹介されている。

軒平瓦は両側面と小口面を欠き、全体形は不明であるものの残存長38cm、残存幅26cmである。瓦当面も両側端部を欠くが、瓦当面残存幅は25cm、瓦当面中央の厚さは5cm、顎部長は10cmである。顎部の断面形は三角形を呈し、なだらかに平瓦部へ接続する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は軟調で、色調は暗灰褐色である。凹面は全面に布目が観察されるのみで、ナデなどの2次的な調整は認められない。模骨痕が観察されないことから、この瓦は一枚作りによって製作された可能性が高い。凸面は柂目状の叩き目が観察されることから、木目の明瞭な柂目板を素材とした叩き具が使用されたものと考えられる。また、顎部との接合部に横方向のナデ調整が施されている。瓦当面はヘラケズリ調整、顎面はナデ調整が施された後、それぞれ文様が施文されている。瓦当文様は半截管状工具による手描き二重弧文、顎面文様は半截管状工具による鋸歯文と、その下に2本の平行線が施される。この瓦当及び顎面文様は多賀城政庁跡第Ⅰ期の軒平瓦分類511の文様に相当する。しかし、文様以外の点では、胎土に砂粒を多く含む点、焼成が軟調な点、凸面の叩き目など、いくつかの相違が認められる。

丸瓦は粘土板巻き作りで製作されたもので、一方の小口部を欠くが、残存長37cm、最大幅22cm、厚さ2.5～3cmである。残存する小口の幅は約20cmで、小口付近の凸面にヘラケズリを加えてすばまるように成形していることから、この小口は狭端側と考えられる。断面形は半円形である。胎土は砂粒を多く含み、焼成は軟調で、色調はやや明るい褐色である。凹面は横走る糸切り痕と布目が観察される。凸面は全面に縦位のヘラケズリが施された後、小口付近に再度のヘラケズリが加えられている。小口面はヘラケズリの後、側端付近を除いてナデ調整が施される。側面はヘラケズリ調整である。

宮城県南部において確認されている瓦窯跡には、白石市兀山窯跡、柴田郡柴田町兎田窯跡、角田市峰窯跡・川前窯跡・今泉窯跡・八重田窯跡・山中窯跡・桜井窯跡・小佐田窯跡・田中窯跡などがある。また、瓦が一定量出土している遺跡には、白石市大畑遺跡、柴田郡大河原町中屋敷遺跡、角田市角田郡山遺跡などがある。角田市内で発見された窯跡は田中窯跡を除いて阿武隈川より東に位置し、製品の供給先は隣接する角田郡山遺跡である。角田郡山遺跡出土の瓦はその特徴から多賀城第Ⅰ期のものより古相を呈しており、より南方の福島県内から出土する瓦と類似している。軒平瓦の

文様も連菱文などで本遺跡出土の瓦と差異が大きい。また、田中窯跡の製品の供給先は不明であるが、出土した平瓦は柴田町兎田窯跡出土の平瓦に類似し、凸面は格子叩き目、凹面は布目が認められる。ここでは、これらの窯跡・遺跡のうち、歴史的・地理的に本遺跡と関係が深いと考えられる刈田・柴田郡域内に所在する白石市大畑遺跡及び柴田町兎田遺跡より出土した瓦について、本遺跡出土の瓦と比較し検討する。

大畑遺跡は白石市字東大畑に所在する。これまでの数次にわたる発掘調査の結果、大規模な建物跡や多数の瓦などが発見され、刈田郡衙跡に比定されている。出土した瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。いずれも胎土は砂粒を多く含み、焼成は軟調である。平瓦・軒平瓦は全て桶巻き作りで、凸面には格子叩き目が認められる。丸瓦は玉縁のあるものとないものがあり、玉縁のないものの中には、破片ではあるものの、厚さ、曲率からみて相当の大形品と考えられるものも少量みられる。軒平瓦はその特徴から大きく2分類される。顎部の張り出しがきわめて弱く、瓦当文様がロクロ引き四重弧文で、顎面に瓦当面と並行する沈線が1条施されるものと、顎部の断面形がバチ状に広がり、瓦当文様がヘラ描きの三ないし四重弧文で、顎面文様がヘラ描き鋸歯文のものである。その他、無文と思われるものがごく少量認められる。これらのうちロクロ引き四重弧文のものは白石市兀山窯跡出土の瓦と類似し、兀山窯跡から大畑遺跡に供給されたものと考えられている。一方、ヘラ描きの三ないし四重弧文のものは多賀城政庁跡第1期の瓦群との類似が指摘されており、比較的本遺跡出土の軒平瓦にも類似する。

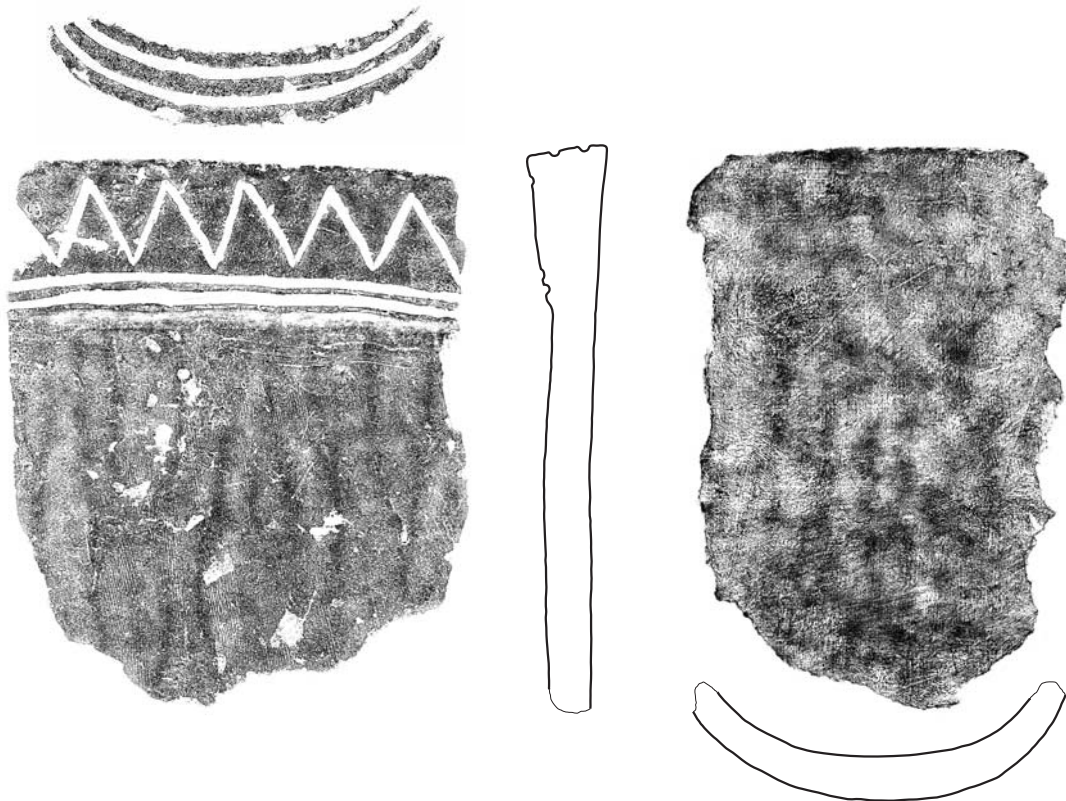
兎田窯跡は柴田町字西船迫二丁目に所在し、上野山丘陵から派生した丘陵裾部に位置している。出土した瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。いずれも胎土は砂粒を多く含み、焼成は軟調である。軒平瓦は瓦当文様が半截管状の工具による二重弧文、顎面文様が半截管状の工具による鋸歯文とその下に2本の平行線を施したものである。瓦当・顎面ともに施文はやや粗雑である。顎部の断面形は長方形である。これらの特徴から、多賀城跡による軒平瓦分類512に相当するものとみられる。桶巻き作りによって製作され、凸面には格子叩き目が認められる。側面と小口はヘラケズリである。また、ヘラ描きの文字瓦とみられるものがある。丸瓦は粘土紐巻き作りで玉縁があり、凸面は縄目叩きの後ナデ調整が施されている。また、破片ではあるが、重弁蓮華文軒丸瓦が出土している。仙台市郡山遺跡出土の軒丸瓦に酷似しており、多賀城創建期の瓦に先行するものと考えられている。

これら両遺跡から出土した瓦と本遺跡出土の瓦とを比較すると、胎土に砂粒を多く含み、焼成が軟調なことが共通点として挙げられるものの、軒平瓦については、本遺跡のものは顎部断面形が三角形を呈し、文様が比較的丁寧に施文されるのに対し、他遺跡のものは桶巻き作りによって製作される点、顎部の断面形がバチ状あるいは長方形である点、文様の施文が比較的粗雑である点、凸面に格子叩き目が認められる点など、多くの相違が挙げられる。丸瓦については、本遺跡のものは玉縁がなく、大形品であるのに対し、他遺跡のものは玉縁があり大きさも一般的なもので、類似性に乏しい。しかし、大畑遺跡から出土している玉縁がない大形品と考えられるものは、厚さ、曲率とも

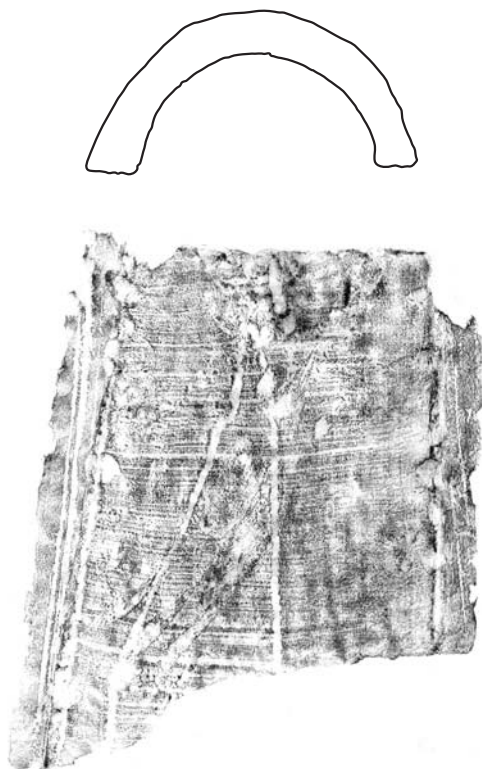
に本遺跡のものに類似している。

このように、本遺跡より出土した瓦は大畑遺跡・兎田窯跡の両者とも異なる特徴を有しており、直接的な関連を持つものとはいえない。多賀城跡における平瓦に関する考察によると、桶巻き作りが一枚作りに先行する製作技法であり、その変遷は多賀城第Ⅰ期の中でおこり、第Ⅱ期以降は全て一枚作りになるとされている。大畑遺跡・兎田窯跡出土の瓦はいずれも先行する技法である桶巻き作りによって製作されている一方、本遺跡出土の瓦は後続する技法である一枚作りである可能性が高い。さらに平瓦凸面の叩き目について、格子叩き目がその他の叩き目に比してより古式であるとの見解がある。大畑遺跡・兎田窯跡出土の平瓦はいずれも格子叩き目が認められる一方、本遺跡出土の軒平瓦は桁目状の叩き目が認められる。これらのことから、両者に見られる相違は製作時期の差に端を発するものである可能性がある。大畑遺跡では、出土瓦の年代をおおむね8世紀前半と位置付けており、養老五（721）年に荊田郡を建置したという続日本紀の記述とも矛盾しないとしている。本遺跡の出土瓦がこれに後続し、さらに、本遺跡出土の瓦と多賀城政庁第1期の瓦との類似性から、神亀元（724）年の多賀城創建期とも大きな時間的差異がないものとする、本遺跡出土瓦の年代はおおむね8世紀中葉に位置付けることができよう。

本遺跡の瓦が近隣にあるいずれの窯跡・遺跡とも特徴を異にすることから、本遺跡に瓦を供給した生産地について、現在未発見の窯跡が存在する可能性も視野に入れる必要がある。また、荊田郡内における本遺跡の性格について、瓦以外の多方面からの検討を加える必要があろう。本節ではこれ以上論を進めることなく、今後の資料の蓄積を待つこととしたい。



1



2

No.	遺構	種類	調整	長	幅	厚	残存	写真	登録
1	採集	軒平瓦	凸面タタキ 凹面ヌノメ	(37.3)	(24.7)	2.7(平瓦部) 4.9(瓦当部)		14-2a,b	145
2	採集	丸瓦	凸面・側面・小口ヘラケズリ 凹面ヌノメ	(36.4)	(21.8)	3.0		14-1a,b	146

第37図 採集瓦

II. 考 察

今回の調査によって検出した遺構は竪穴住居跡3軒・堀跡2条・井戸跡3基・溝跡10条・土壇11基・河川跡4条などがある。また、これらの遺構の内外から、弥生土器・土師器・須恵器・墨書土器・中世陶器・近世陶磁器・瓦類・石製品・土製品・金属製品・石器が出土している。以下、出土遺物と遺構に検討を加え、本遺跡の様相について考察する。

II-1. 遺物について

今回の調査によって出土した遺物は時期的には弥生時代・古墳時代・古代・中近世のもので、主体を占めるのは古墳時代の土師器である。出土遺物はその多くが表土からのもので、遺構に伴い、一括性が認められるものはS I 2 竪穴住居跡以外にはない。ここでは各遺構から出土した遺物のうち図化できたものを中心に分析し、他遺跡における類例を求める形で検討を行うものとする。なお、図化できる遺物のなかった遺構については破片資料を分析してその特徴を把握し、可能な限り検討を行うものとする。

(1) 各遺構の出土土器とその年代

A区

〔S K 9 土壇〕 (第4図1)

土壇東壁際から土師器甕が正位に据えられた状態で出土している。

(甕) 口縁部が欠損し、全体の器形は不明である。胴部は最大径がほぼ中央にある球形のもので、底部は平底である。調整は外面がハケメ・ヘラケズリ、内面がヘラナデである。胴部上位のハケメは比較的細かく、横方向に施されている。口縁部を欠くが、このような特徴は古墳時代前期の塩釜式もしくは中期の南小泉式の土師器甕にみられることから、S K 9 土壇の機能時期はおおむね古墳時代前期～中期と考えられる。

B区

〔S I 1 b 竪穴住居跡〕 (第9図1・2)

床面直上から土師器坏が、確認面から土師器鉢が出土している。

(坏) 口縁部が直立気味に立ち上がり、底部は平底風丸底である。体部外面に沈線が巡り、対応する内面に屈曲がある。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部～底部がヘラケズリである。内面はヘラミガキののち黒色処理が施される。

(鉢) 体部が直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至るものである。形状から球胴甕の胴下部を製作途中に鉢に転用したものとみられる。口縁部は薄く、粗雑な印象を受ける。外面調整はハケメ・ナデツケ、内面調整はハケメである。

これらのうち坏は亘理郡山元町狐塚遺跡第7号竪穴住居跡出土遺物(窪田：1995)、多賀城市山王遺跡S D 2050河川跡2 A～5層出土遺物(後藤・村田：2001)などに類例を求めることができる。これらは古墳時代後期の栗囲式に位置付けられており、S I 1 b 竪穴住居跡出土土器も同

様に栗圀式のものと考えることができる。なお、山王遺跡SD2050河川跡2A～5層出土遺物の年代は7世紀前半代と考えられていることから、SI1b 竪穴住居跡の機能時期もおおむね同様の年代と考えられる。

〔SD1 溝跡〕 (第12図1・2)

堆積土から土師器鉢・甕が出土している。

(鉢) 底部を欠損するが、体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は内弯する。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリである。内面調整はヨコナデ・ヘラミガキである。

(甕) 底部を欠損するが、長胴形で、最大径は口縁部に来るものと思われる。口縁部は外反し、頸部に段はつかない。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、胴部外面がハケメ、内面がヘラナデである。

これらの遺物は、蔵王町塩沢北遺跡第1・2号竪穴住居跡出土遺物(小川：1980)、栗原市(旧高清水町)観音沢遺跡第3・8号竪穴住居跡出土遺物(加藤・阿部1980)などに類例を求めることができる。現在、塩沢北遺跡第1・2号竪穴住居跡出土遺物の実年代は7世紀末～8世紀初頭、観音沢遺跡第3・8号竪穴住居跡出土遺物の実年代は8世紀前半と考えられていることから、SD1 溝跡の機能時期もおおむね同様に7世紀末～8世紀前半という年代が考えられる。

〔SD2 溝跡〕

堆積土・遺構確認面から土師器坏・壺・甕が出土している。出土量は少なく、小片で図化できるものはないが、全て製作にロクロを使用していない。また、内面黒色処理を施しているものは見られない。壺は頸部～口縁部で、直線的に外傾し、口唇部を若干内傾気味に立ち上げるものである。甕は、形状が把握できるものは全て球胴形を呈する。このような特徴は古墳時代中期の南小泉式の遺物にみられるものであることから、SD2 溝跡の機能時期はおおむね古墳時代中期と考えられる。

C区

〔SI2 竪穴住居跡〕 (第19～21図)

床面・貯蔵穴内及び住居堆積土・確認面などから多くの遺物が出土している。これらのうち坏・高坏・壺・甕、計22点を図示した。うち坏1点(第19図1)は内面黒色処理を施しており、その他の本遺構出土遺物と比較すると、その様相は大きく異なるものである。この坏の類例としては、大和町一里塚遺跡第16号竪穴住居跡(三好・藤村：1999)よりきわめて酷似した坏が出土している。一里塚遺跡第16号竪穴住居跡出土遺物は7世紀末～8世紀初頭のものであると考えられていることから、この坏も同様の年代のものと考えられる。この様相を異にする坏以外は、床面・貯蔵穴内及び堆積土・確認面の遺物ともに大きな差異は認められないことから、ある程度一括性の高いものと考え、図示した22点のうち、先の坏1点を除外した21点について検討する。

なお、本住居の出土遺物としては上記の他にミニチュア土器4点(第33図2～5)、石製模造品1点(第33図9)、石製紡錘車1点(第34図2)、不明石製品1点(第34図5)などが出土していることを付記しておく。

(坏) 床面直上から1点、貯蔵穴埋土から2点、住居堆積土から2点の計5点である。いずれも体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部の形状は、①くびれて外傾するものが3点(第19図2・3・6)、②内屈気味に直立するもの1点(第19図5)、③体部から変化せず、内弯気味に立ち上がるもの1点(第19図4)に細分される。

(高坏) 床面から1点、床面直上から2点、貯蔵穴埋土から1点、住居堆積土から2点、住居確認面から2点の計8点である。全体形が把握できるものは3点で、他は坏部のみのも3点、脚部のみのも1点、裾部のみのも1点である。坏部の形状が把握できる6点は、坏体部及び口縁部の形状から、①下端部に稜をもち、坏体部が直線状に外傾し、そのまま口縁部となるものが5点(第19図7・8・10・11、第20図1)、②下端部に稜をもち、坏体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がくびれて外傾するものが1点(第19図9)に細分される。細分②の坏部は、第19図3の坏と形状が酷似している。また、脚部の形状が把握できる4点はいずれも脚柱部が中空の円錐台状で、裾部が外反する。脚柱部と裾部との境目の形態から、①ゆるい屈曲によって脚柱部と裾部を区画し、屈曲より下部に裾部の調整(ヨコナデあるいは横方向のナデ)が施されるもの3点(第19図7・8、第20図3)、②脚柱部と裾部との境に明瞭な区画がなく、裾部の調整(ヨコナデ)の施される上端と裾部外反の開始位置とに関連性がないもの1点(第19図9)とに細分される。

(壺) 床面から1点出土している。口縁部を欠損するが、平底球胴で頸部がくびれ、口縁部が直線的に外傾するものである(第20図4)。

(甕) 床面から4点、床面直上から1点、貯蔵穴埋土から1点、住居堆積土から1点の計7点である。全体形が把握できるものは2点で、他は体部下半～底部を欠くもの4点、口縁部～頸部を欠くもの1点である。7点全て球胴形で、体部全体の形状が把握できる3点はいずれもやや縦長球胴となる。体部全体の形状が把握できない4点も、頸部～体部上半の形状からいずれもやや縦長球胴となるものと考えられる。頸部～口縁部の形状が把握できる6点は①頸部が強く屈曲し、頸部内面に明瞭な稜を形成し、口縁部が短く直線的に外傾するもの2点(第20図7、第21図1)、②頸部の屈曲が弱く、頸部内面に稜が発達せず、口縁部が短く直線的に外傾するもの2点(第20図5・6)、③頸部がやや強く屈曲し、頸部内面に稜が発達せず、口縁部が外傾して立ち上がったのち、やや屈曲気味に外反するもの2点(第21図2・3)に細別される。

これらの遺物は、多賀城市山王遺跡S X 230出土遺物(菅原・吾妻：1994)、仙台市南小泉遺跡第26次調査第5号竪穴住居跡出土遺物(五十嵐：1998)、仙台市藤田新田遺跡第201号竪穴住居跡出土遺物(岩見：1994)などに類例を求めることができる。これらは古墳時代中期の南小泉式に位置付けられており、S I 2 竪穴住居跡出土遺物も同様に南小泉式のものと考えられる。山王遺跡S X 230出土遺物と南小泉遺跡第5号竪穴住居跡出土遺物との間には、前者においてはA：小型壺が存在する、B：壺口縁部の高さ及び径が体部の高さ及び径とほぼ等しい、C：縦長球胴の甕が認められない、のに対して、後者においては、A：小型壺が伴わない、B：壺口縁部が高さ・径ともに小形化、C：縦長球胴の甕が存在する、といった点で差異が認められ、前者が後者に先行する様相であるものと把握されている。また、藤田新田遺跡第201号竪穴住居跡出土遺物については、A：小型壺が伴わない、B：壺口縁部が高さ・径ともに小形化、などの点で南小泉遺跡第5号竪穴住居跡出土遺物と様相を等しくするものであると理解される。S I 2 出土

遺物を見ると、小型壺を伴わない点、縦長球胴の甕が存在する点など、南小泉遺跡第5号竪穴住居跡出土遺物・藤田新田遺跡第201号竪穴住居跡出土遺物などと様相を等しくするものと考えることができる。藤田新田第201号竪穴住居跡出土土器については、その実年代は5世紀後半代と考えられていることから、S I 2の機能時期もおおむね同様の年代が考えられる。

〈赤彩もしくは橙色を呈する土器について〉

S I 2 竪穴住居跡から出土した古墳時代中期の土器をみると、赤彩が施されたものが目立ち、さらに胎土が橙色を呈するものがある。これらをあわせると、出土土器の半分以上がこれに該当する。器種は坏・高坏・壺で、特に高坏は顕著で図示した8点中6点が赤彩もしくは橙色を呈している。一方、煮沸具である甕類には赤彩もしくは橙色のものは認められず、意識的に器種を選択しているものと考えられる。

〔S A 2 堀跡〕

堆積土から土師器坏・甕などが出土している。出土量は少なく、小片で図示できるものはないが、全て製作にロクロを使用していない。坏は丸底とみられ、体部の外面に痕跡的な段が認められ、調整は段の上がヨコナデ、下がヘラケズリである。内面に段や屈曲は認められず、調整はヘラミガキの後黒色処理が施される。甕は、形状が把握できるものの中に長胴形を呈するものがあり、その外面調整は縦位のハケメである。特に坏の形状に着目すると、蔵王町塩沢北遺跡第1・2号竪穴住居跡出土遺物、栗原市（旧清水町）観音沢遺跡第3・8号竪穴住居跡出土遺物などに類例を求めることができる。現在、塩沢北遺跡第1・2号竪穴住居跡出土遺物には7世紀末～8世紀初頭、観音沢遺跡第3・8号竪穴住居跡出土遺物の実年代は8世紀前半と考えられていることから、S A 2 堀跡の機能時期もおおむね同様に7世紀末～8世紀前半という年代が考えられる。

〔S D 3 溝跡〕

堆積土から土師器坏・高坏・壺・甕などが出土している。小片で図示できるものはないが、全て製作にロクロを使用していない。坏は丸底で、体部の外面に痕跡的な段が認められ、調整は段の上がヨコナデ、下がヘラケズリである。内面に段や屈曲は認められず、調整はヘラミガキの後黒色処理が施される。甕は形状が把握できるものとしては球胴形と長胴形両方が認められるが、長胴形を呈するものの外面調整は縦位のハケメで、頸部には痕跡的な段が認められるものと、無段のものがある。これらは蔵王町塩沢北遺跡第1・2号竪穴住居跡出土遺物、栗原市（旧清水町）観音沢遺跡第3・8号竪穴住居跡出土遺物などに類例を求めることができる。現在、塩沢北遺跡第1・2号竪穴住居跡出土遺物には7世紀末～8世紀初頭、観音沢遺跡第3・8号竪穴住居跡出土遺物の実年代は8世紀前半と考えられていることから、S D 3 溝跡の機能時期もおおむね同様に7世紀末～8世紀前半という年代が考えられる。

なお、S D 3 溝跡はS A 2 堀跡と重複し、これより新しい遺構であるが、出土遺物を検討すると遺構間に時間的な差はほとんど認められないことから、重複しているとはいえ非常に限られた時間幅の中で変遷しているものと考えられる。

〔SD 5・6・7 溝跡、SD 12河川跡〕（第16図）

これらは重複関係にあり、その新旧関係はSD 7→SD 6→SD 5→SD 12である。ここでは古い順に検討していく。

〔SD 7 溝跡〕（第16図4・5）

堆積土から土師器坏・高坏・壺・甕などが出土している。すべて製作にロクロを使用していない。また、内面黒色処理を施しているものは見られない。このうち高坏2点を図示した。いずれも全体形を把握できるものではなく、坏部のみ把握できるもの1点、脚部のみ把握できるもの1点である。

（高坏）

坏部の形状が把握できるものは、下端部に稜をもち、坏体部が直線状に外傾し、そのまま口縁部となるものである。脚部の形状が把握できるものは、脚柱部が中空の円錐台状で、脚柱部と裾部との境に明瞭な区画がなく、裾部が外反するものである。

また、図示することはできなかったが、坏は丸底で、口縁部の形状はくびれて外傾するもの、内屈気味に直立するものが認められる。甕は体部の形状が把握できるものは球胴形を呈し、調整はヘラケズリ・横位～斜位の細かいハケメ・ナデが認められる。頸部の形状が把握できるものは頸部無段で強く外側に屈曲するものである。なお、坏など小型品には主催が施されるものが認められる。このような特徴は古墳時代中期の南小泉式の遺物にみられるものであることから、SD 7 溝跡の機能時期はおおむね古墳時代中期と考えられる。

〔SD 6 溝跡〕

堆積土から土師器坏・高坏・甕などが出土している。小片で図示できるものはないが、全て製作にロクロを使用していない。また、内面黒色処理を施しているものは見られない。坏は丸底で、口縁部の形状は内屈気味に直立するものが認められる。高坏は形状が把握できるものは脚部で、脚柱部が中空の円錐台状で、裾部との境目がゆるい屈曲によって区画されるものである。このような特徴は古墳時代中期の南小泉式の遺物にみられるものであることから、SD 6 溝跡の機能時期はおおむね古墳時代中期と考えられる。

なお、SD 6 溝跡はSD 7 溝跡と重複し、これより新しい遺構であるが、出土遺物を検討すると遺構間に時間的な差はほとんど認められないことから、重複しているとはいえ非常に限られた時間幅の中で変遷しているものと考えられる。

〔SD 5 溝跡〕（第16図7）

堆積土から土師器坏・甕などが出土している。全て製作にロクロを使用していない。このうち坏1点を図示した。

（坏）丸底で、体部外面に段、対応する内面に屈曲がある。調整は、底部外面がヘラケズリ、段より上がヨコナデ、内面はミガキののち黒色処理を施す。

このような遺物は多賀城市山王遺跡SD 2050河川跡2 A～5層出土遺物などに類例を求めるこ

とができる。このような特徴は古墳時代後期の栗圀式の遺物にみられるものであることから、SD5溝跡の機能時期はおおむね古墳時代後期と考えられる。

〔SD12河川跡〕（第16図1・2・3・6・8）

堆積土から土師器坏・高坏・鉢、須恵器甕が出土している。古墳時代中期～奈良時代の遺物が混在し、主体を占めるのは古墳時代後期～奈良時代にかけての土師器である。このうち土師器坏2点・鉢1点・高坏1点、須恵器甕1点を図示した。うち高坏は形状から古墳時代中期南小泉式期のものと考えられるが、裾部の接合方法に特徴があるため図示した。SD12河川跡出土遺物の主体を占める時期のものではないので除外して検討する。

（坏）いずれも製作にロクロを使用しない。丸底で内弯気味に立ち上がる器形で、①体部外面に2条の沈線が巡るもの（第16図2）と、②体部内外面とも段や稜、屈曲が認められないもの（第16図1）とに細分される。調整はいずれも体部下半がヘラケズリ、内面はミガキののち黒色処理を施す。

（鉢）製作にロクロを使用しない。平底で、内弯気味に立ち上がり、口縁部で外傾する。調整は口縁部外面が横位のヘラナデ、体部が空疎なヘラナデ・ナデ、内面全体がヘラナデである。

（須恵器甕）中型甕で、口縁部～体部上半のみ把握できる。口頸部は外反し、端部は軽くつまみ出されて縁帯となる。口頸部中央には浅い沈線が巡り、外面には平行タタキののち、カキメが施される。

これらのうち、坏は蔵王町塩沢北遺跡第1・2号竪穴住居跡出土遺物、栗原市（旧高清水町）観音沢遺跡第3・8号竪穴住居跡出土遺物などに類例を求めることができる。また、須恵器甕は多賀城市山王遺跡伏石地区SI491竪穴住居跡（佐藤他：1997）などに類例を求めることができる。現在、塩沢北遺跡第1・2号竪穴住居跡出土遺物には7世紀末～8世紀初頭、観音沢遺跡第3・8号竪穴住居跡出土遺物の実年代は8世紀前半と考えられている。また、多賀城市山王遺跡伏石地区SI491竪穴住居跡出土遺物の実年代は7世紀代と考えられていることから、SD12河川跡の機能時期もおおむね7世紀末から8世紀前半であると考えられる。

〔SK5土壌〕

堆積土からロクロ土師器坏、土師器甕などが出土している。小片で図示できるものはない。ロクロ土師器坏の大半は、底部回転糸切りののち手持ちヘラケズリの再調整が施されるもので、内面底部のヘラミガキは井桁状である。宮城県内においてロクロ土師器が普及するのは平安時代の9世紀以降と考えられ、体部下端・底部の外面調整は漸次減少すると考えられている（加藤：1989）。こうした特徴からSK5土壌出土遺物の年代は9世紀代であると考えられる。このことからSK5土壌の年代もおおむね同様と考えられる。

D区

〔SD10溝跡〕

堆積土から比較的多くの遺物が出土している。主体となるのは古墳時代中期の土師器で、坏・

高坏・壺・甕などがある。破片資料のため図示できたものはない。一方、1点ながら中世陶器甕が含まれている。このことからSD10溝跡の機能時期は中世以降と考えられる。

〔SK11土壌〕

弥生土器、土師器が若干量出土している。弥生土器はその特徴から弥生時代後期天王山式のものと考えられる。また、土師器は小片のため図示できるものはなかったが、その特徴から7世紀末～8世紀前半のものと考えられる。このことからSK11土壌の年代はおおむね7世紀末～8世紀前半と考えられる。

II-2. 遺構について

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡3軒・堀跡2条・井戸跡3基・溝跡10条・土壌11基・柱穴群・河川跡4条などがある。これらの機能時期は古墳時代～中世にわたっている。ここでは各遺構を機能時期ごとに分類し、遺構の特徴について若干の考察をするとともに、それぞれの時期における本遺跡の様相がどのようなものであったかを考える。

(1) 各時期の遺構群の設定

1. 古墳時代の遺構

- a. 前期～中期 SI 3 竪穴住居跡（未精査）、SK 9 土壌
- b. 中期 SI 2 竪穴住居跡、SD 2・6・7 溝跡
- c. 後期 SI 1 竪穴住居跡、SD 5 溝跡

2. 7世紀末～8世紀前半の遺構

SA 2 堀跡、SD 1・3 溝跡、SD12河川跡、SK11土壌

3. 平安時代の遺構

SK 5 土壌

4. 中世以降の遺構

SD10溝跡

5. 機能時期不明の遺構

SA 1 堀跡、SD 8・9・11 溝跡、SE 1・2・3 井戸跡、SK 1・2・3・4・6・7・8・10 土壌、D 2 区小柱穴群

これらは出土遺物等から機能時期が推定できなかった遺構である。このうち、SA 1 堀跡はSD 1 溝跡と位置、方向ともに完全に重複しており（SA 1→SD 1）、後者を設置する際、明らかに前者の存在を考慮に入れ、それを踏襲したものと考えられる。従って両遺構の機能時期に大

きな開きがあるとは考えにくい。SD 1 溝跡は上記のとおり 7 世紀末～8 世紀前半という機能時期が推定されるが、SA 1 堀跡もまた、それと大きな隔たりのない時期として 7 世紀後葉～8 世紀前半に機能したものと考えられよう。

SK 8 はその形状から陥し穴であると考えられるが、この形状の落とし穴は縄文時代以降に認められるものである。また、本遺跡においては弥生時代以降各時期の遺物が多量に出土していることから、本遺跡の立地する丘陵部が弥生時代以降連続的に人間の生活の場として活用してきたことは確実であり、弥生時代以降の時期においては、野生動物を捕獲する「狩場」として活用される機会はなかったものと考えられる。これらのことから、SK 8 の機能時期は縄文時代と考えられる。

(2) 各時期の様相

1-a. 古墳時代前期～中期

SK 9 土壇と、未精査であるがSI 3 竪穴住居跡がある。

SK 9 は、遺跡北辺部に位置する。平面形が楕円形を呈し、東壁際に口縁部を上にした正位の状態で土師器甕が据えられていた。土壇底面には薄い植物遺体層が確認された。遺構そのものの残存状態が悪く、機能は判明しなかった。

SI 3 は、遺跡南寄り東端部に位置する。遺構確認のみで精査をしていないが、古墳時代中期の遺構であるSI 2 竪穴住居跡と重複し、これに切られていることから古墳時代中期以前の遺構であることがわかる。さらに、平面形が正方形を基調とする竪穴住居跡であることからその上限は古墳時代前期となる。従ってSI 3 の機能時期は古墳時代前期～中期と考えられる。

今回の調査では明確な古墳時代前期の遺構は検出されなかったものの、遺跡全域において、表土中から古墳時代前期塩釜式期と考えられる土師器片が多数出土している。このことは、本遺跡の主体を成していた丘陵部には古墳時代前期の遺構が存在していたものの、削平によって破壊されたことが推測される。

1-b. 古墳時代中期

SI 2 竪穴住居跡、SD 2・6・7 溝跡がある。

SI 2 は、本遺跡が立地する南北に細長い丘陵の南寄り東端部に位置している。本住居跡より西側は削平により全ての遺構が破壊された地域である。東側は徐々に傾斜が強くなり湿地へと接続し、該期の遺構は検出されなくなることから、仮に本遺跡において該期の集落が存在していたとすると、SI 2 は集落の東端部に位置していたことが推測される。

SD 2 は遺跡の中央東端部に位置している。また、SD 6・7 は遺跡の南寄り西端部に位置している。これらは同時期作り替えと考えられ（SD 7→SD 6）、ほぼ同じ位置に並行して設置されている。SD 2・6・7 はいずれも、遺跡の立地する丘陵の際に沿うように南北方向にのびており、これらの溝によって丘陵上と湿地帯とを分かつ境界としていた可能性がある。

本遺跡全域において、表土中から該期の遺物が多数出土しており、他時期の遺構堆積土にも多く混入していることから、本遺跡における該期の遺構は決して少なくなかったことが推測される。

SI 2 床面の施設の中で、カマドについて若干述べる。本住居跡のカマドは住居北壁の中央やや

東よりに設置されている。側壁が直線的で、凝灰岩を多用している。燃烧部底面は奥壁から焚き口までほとんど幅に変化がない。燃烧部の奥行きは約90cmである。煙道は基部から若干幅が狭まりつつのびる。煙道の全長は約80cmである。

本住居跡とほぼ同時期と考えられる仙台市南小泉遺跡第26次調査 S I 1・5 竪穴住居跡のカマドも、燃烧部側壁は直線的で長く、燃烧部底面の幅も奥壁から焚き口までほぼ変化しないという点で共通した特徴を有しているといえる。しかし、本住居跡のカマド側壁構築材が凝灰岩主体であるのに対して、南小泉遺跡 S I 1・5 は粘土主体である点、煙道の形状が異なる点など、いくつかの差異も認められる。以上、この形態のカマドの該期における位置付けについては、本文においては類例を提示するに止め、今後の検討を待つことにしたい。

1-c. 古墳時代後期

S I 1 竪穴住居跡、S D 5 溝跡がある。

S I 1 は、本遺跡が立地する丘陵部の中央東端部に位置している。本住居跡より西側は削平により全ての遺構が破壊された地域である。東側は徐々に傾斜が強くなり湿地へと接続し、該期の遺構は検出されなくなることから、仮に本遺跡において該期の集落が存在していたとすると、S I 1 は集落の東端部に位置していたことが推測される。

S D 5 は遺跡の南寄り西端部に位置している。S D 5 は S D 6 と重複し、これより新しい。両溝跡は隣接しているものの、北微西～南微東方向に設けられた S D 6 に対して、S D 5 はより真北～真南方向に偏している。ただし、この変異は調査区内という限られた範囲において観察されるものであり、全体としては、丘陵西端部を区画する目的をもって設けられたものであることが推測される。

該期の遺物も遺跡範囲の全域において表土中から多数出土していることから、本遺跡における該期の遺構もまた、少ないものではなかったことが推測される。

2. 7世紀末～8世紀前半

S A 2 堀跡、S D 1・3 溝跡、S D 12 河川跡、S K 11 土壌がある。また、ほぼ同時期の遺構と考えられるものに S A 1 堀跡がある。

S A 1 と S D 1 は遺跡中央東端部に、S A 2 と S D 3 は遺跡南寄り東端部に位置している。いずれもそれぞれ重複関係にあり (S A 1 → S D 1、S A 2 → S D 3)、先行する堀跡 (S A 1・2) の位置・方向を完全に踏襲する形で溝跡 (S D 1・3) が設けられている。S D 1 と 3 の断面形状を比較すると、S D 1 が U 字状であるのに対して、S D 3 は幅広で底面がやや平坦な形状を呈する。また、S A 1 と 2 を比較すると、S A 1 では 0.3～1.2m 程度の間隔で、やや不規則に材木痕跡が認められ、さらにその西側 (丘陵寄り) に、材木痕跡と並行する形で 2.7～3.5m 間隔で柱穴が認められる。堀に付随する添え柱を設けていた痕跡と推測される。一方、S A 2 では 0.8～1.3m 程度の間隔で、比較的規則的に材木痕跡のみが認められ、添え柱の痕跡と考えられるものは認められない。このように、S A 1・S D 1 と S A 2・S D 3 とを比較するといくつかの差異が認められる。しかし、これらはともにほぼ同時期に存在した遺構であり、遺跡の立地する丘陵の東端部を区画するように設置されている点、まず材木堀が作られ、その位置・方向を踏襲して溝が設けられた点などを考慮すると、

やはり同一の目的を持って設置されたものであると考えることができよう。

S D 12河川跡は、遺跡南寄り西端部に位置している。S D 5と重複し、これより新しい。S D 12はS D 5の東側（丘陵寄り）に隣接しており、その方向はほぼ同一である。S D 12は自然流路だが位置的には丘陵西端部に沿う形で流れており、該期には丘陵西端部の区画として利用されていた可能性がある。

本遺跡全域において表土中から該期の遺物が多数出土しており、他時期の遺構堆積土にも多く混入していることから、本遺跡における該期の遺構は少なくなかったと考えられる。また、昭和36年に本遺跡において軒平瓦・丸瓦が採集されたこと（前掲）、今回の調査において表土等から瓦の破片が出土し、これらの帰属時期がおおむね8世紀中葉と考えられること、さらに、平成13年度に実施された本遺跡の遺構確認調査において、遺跡北部から古代のものと思われる柱穴掘り方寸法1.3m×1.1m、柱間寸法2.4m間隔の大形掘立柱建物跡が検出されたこと、また、続日本紀によると養老五（721）年に柴田郡から分かれて苅田郡が建置されたという記述があり、この頃柴田郡・苅田郡を含む現在の宮城県南部地域における統治及び経営の基盤形成が活発に行われたであろうことを考慮すると、本遺跡では該期における円田盆地を中心とする地域の経営に関する拠点的な施設が営まれていた可能性がある。

3. 平安時代

S K 5土壌がある。

S K 5は遺跡南寄り東部に位置している。一帯は強く削平されており、周辺には土壌数基、小ピット数基以外の遺構は分布していない。この一帯より西側は削平により完全に遺構が消滅している。S K 5はS K 6・7と重複し、これらの中で最も新しい。S K 5の機能は判明していない。

本遺跡全域において表土中から該期の遺物が多数出土していることから、本遺跡における該期の遺構は少なくなかったと考えられる。また、該期の遺物の中には墨書がされているものが数点確認される（第31図8・9）。図示したのは2点で、いずれも土師器坯の底面に墨書がある。一点は「大寺」と解釈される。もう一点は解読不能である。

4. 中世以降

S D 10溝跡がある。

S D 10は遺跡南端東部に位置している。調査区自体が小規模であるため遺構の状況を把握できないが、南北に伸びる溝と考えられる。確認面における上端幅は約4mと比較的大規模である。S D 10の西側が丘陵部にあたり、機能時期不明の小柱穴群及び井戸跡群が分布している。一方、S D 10より東側は徐々に黒褐色土の堆積が厚くなり、湿地へと接続する。S D 10の東側ではほとんど遺構が確認されないことから、この溝もまた、遺跡の立地する丘陵の東端部を区画する目的で設置したものと考えられる。

本遺跡においては、中世の遺物は比較的小数の出土に留まるものの、甕・椀・播鉢などの中世陶器が認められることから、一定の生活拠点として機能していたことが推測される。

5. 機能時期不明

SD 8・9・11溝跡、SE 1・2・3井戸跡、SK 1・2・3・4・6・7・8・10土壇、D 2区小柱穴群がある。

SD 8は遺跡北端西部に位置している。遺跡の立地する丘陵の北西端の湿地接続部に所在しており、北西～南東方向に伸びる。北西端は湿地と接続しており、南東部において後世の河川跡に切られるが、巨視的には遺跡辺縁部における湿地との区画溝と考えることができよう。

D 2区におけるSE 1～3の井戸跡群及び小柱穴群はいずれも遺跡範囲南端部に位置している。井戸跡群が西側、小柱穴群がその東側にまとまりをもって分布しており、両者はほとんど重複しないことから、井戸を伴う掘立柱建物が存在したものと考えられる。また、小柱穴群の東側にはSD 10が隣接しており、それより東には小柱穴も含めてほとんど遺構が分布していない。このことからSD 10は小柱穴群の東側における区画溝として機能していたものである可能性がある。SD 10は堆積土中から中世陶器片が出土しており、その機能時期は中世と考えられることから、小柱穴群及び井戸跡群とSD 10とが、一連のものである場合、これらの遺構群の機能時期は中世と考えることができよう。

Ⅲ．まとめ

1. 都遺跡は宮城県の南西部、刈田郡蔵王町大字平沢字都・字窪田に所在する。遺跡は円田盆地の中央部に位置する小丘陵上に立地している。現在は地形が大きく改変されてきわめて低平な微丘陵と化し、水田及び畑として利用されている。地形改変の原因は遺跡西側を流れる藪川の河川改修・築堤工事における土取り場となったことであり、同時に周辺の耕地整理にも土の供給を行ったとみられ、本来遺跡の立地する丘陵の周辺において、きわめて広範囲に遺物の散布が認められる。本来の遺跡範囲にあたる丘陵の辺縁部は、現在も水田畦畔や用水路などの配置によってその概況を窺い知ることが可能である。
2. 今回の調査の結果、本遺跡の立地する丘陵は大部分が強い削平を受けており、遺構が消滅していること、遺構が残存するのは湿地際の縁辺部分にあたるわずかな範囲に限られることが判明した。
3. 今回の発掘調査では、竪穴住居跡3軒・堀跡2条・溝跡10条・井戸跡3基・土壇11基・小柱穴群・河川跡4条が確認された。また、弥生土器・土師器・須恵器・中世陶器・近世陶磁器・瓦・墨書土器・石製品・土製品・金属製品・石器などが出土した。これらのうち量的な主体を占める遺物は土師器である。遺構は古墳時代中期・後期・7世紀末～8世紀前半のものが中心を占める。
4. 古墳時代中期の第2号竪穴住居跡では比較的多数の住居に伴う遺物が出土した。他遺跡との比較により、古墳時代中期の南小泉式期でも比較的最早い段階のものであることが判明し、該期は集落が営まれていたことが判明した。
5. 7世紀末～8世紀前半の遺構は、遺跡の立地する丘陵縁辺部に区画の目的で設置されたと考えられる堀跡・溝跡で、遺構確認調査によって確認された大規模な掘立柱建物跡・表土出土の古代の瓦・小島亮治氏によって表採された軒平瓦の存在などを総合的に考慮すると、本遺跡において、該期における円田盆地を中心とする地域の経営に関する拠点的な施設が営まれていた可能性がある。
6. 表土からきわめて多量の遺物が出土した。それらは古墳時代前期・中期・後期及び奈良・平安時代のものを主体としている。これらの遺物量から推測すると、本遺跡は古墳時代前期～平安時代にかけての人々の生活拠点として連続的な活用がなされていたものと推測されるが、大半の遺構は丘陵削平によって消滅してしまったものと考えられる。当然行われるべき調査がなされないままに行われた遺跡の破壊行為が、結果的に地域の歴史解明に致命的なダメージを与えてしまった不幸な例として記憶されるべきものと思う。

引用・参考文献（年代順）

- 氏家和典（1957） 「東北土師器の型式分類とその編年」 歴史第14輯 東北史学会
- 白鳥良一・加藤道男(1974) 「岩切鴻ノ巣遺跡」－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ 宮城県文化財調査報告書第35集 宮城県教育委員会
- 太田昭夫(1980) 「大橋遺跡」－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ 宮城県文化財調査報告書第71集 宮城県教育委員会
- 小川淳一(1980) 「塩沢北遺跡」－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第69集 宮城県教育委員会
- 斉藤吉弘・高橋守克・真山悟(1980) 「宮沢遺跡」－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第69集 宮城県教育委員会
- 宮城県多賀城跡調査研究所(1980) 「多賀城跡 政庁跡 図録編」 宮城県多賀城跡調査研究所
- 丹羽茂・小野寺祥一郎・阿部博志(1981) 「清水遺跡」－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ 宮城県文化財調査報告書第77集 宮城県教育委員会
- 宮城県多賀城跡調査研究所(1982) 「多賀城跡 政庁跡 本文編」 宮城県多賀城跡調査研究所
- 柴田町史編纂委員会(1983) 「柴田町史 資料編Ⅰ」 柴田町史編纂委員会
- 丹羽茂(1983) 「宮前遺跡」－朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡 宮城県文化財調査報告書第96集 宮城県教育委員会
- 佐々木和博他(1985) 「色麻古墳群」－色麻町香ノ木遺跡・色麻古墳群 宮城県文化財調査報告書第103集 宮城県教育委員会
- 佐藤甲二・小野寺和幸他(1985) 「南小泉遺跡第12次発掘調査報告書」 仙台市文化財報告書第80集 仙台市教育委員会
- 鎌田芳宏・佐藤智雄(1987) 「宮城県仙台市南小泉遺跡」 埋蔵文化財発掘調査研究所報告集第4集 南小泉遺跡調査団
- 蔵王町史編纂委員会(1987) 「蔵王町史 資料編Ⅰ」 蔵王町史編纂委員会
- 佐藤 洋(1987) 「南小泉遺跡第14次発掘調査報告書」 仙台市文化財報告書第109集 仙台市教育委員会
- 鎌田芳宏・遊佐和子(1988) 「宮城県仙台市南小泉遺跡」 埋蔵文化財発掘調査研究所報告集第11集 南小泉遺跡調査団
- 加藤道男(1989) 「宮城県における土師器研究の現状」－考古学論叢Ⅱ 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 太田昭夫(1990) 「宮城県における天王山式期の現状と課題」－天王山式期をめぐる検討会記録集 弥生時代研究会
- 佐藤 洋(1990) 「南小泉遺跡第16～18次発掘調査報告書」 仙台市文化財報告書第140集 仙台市教育委員会
- 阿部 恵・須田良平・岩見和泰(1991) 「新峯崎遺跡」村田町文化財調査報告書第9集 村田町教育委員会
- 岩見和泰・佐藤憲幸(1991) 「合戦原遺跡」－合戦原遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第140集 宮城県教育委員会
- 工藤哲司(1991) 「南小泉遺跡第20次発掘調査報告書」 仙台市文化財報告書第153集 仙台市教育委員会
- 高倉敏明(1991) 「山王遺跡・市川橋遺跡」－多賀城市史4 多賀城市史編纂委員会
- 古川一明・白鳥良一(1991) 「土師器の編年 東北」 古墳時代の研究6 雄山閣
- 森 貢喜(1991) 「都遺跡」－合戦原遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第140集 宮城県教育委員会
- 千葉孝弥(1992) 「山王遺跡－第12次調査概報－」 多賀城市文化財調査報告書30集 多賀城市教育委員会
- 藤沢 敦(1992) 「引田式再論」 歴史第79輯 東北史学会
- 後藤秀一他(1994) 「山王遺跡八幡地区の調査」 宮城県文化財調査報告書第162集 宮城県教育委員会

- 後藤秀一・村田晃一・岩見和泰(1994) 「藤田新田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第163集 宮城県教育委員会
- 蔵王町史編纂委員会(1994) 「蔵王町史 通史編」 蔵王町史編纂委員会
- 菅原弘樹・吾妻俊典他 (1994) 「山王遺跡Ⅰ－古墳時代中期遺物包含層編－」 宮城県文化財調査報告書第161集 宮城県教育委員会
- 窪田 忍(1995) 「狐塚遺跡」 山本町文化財報告書 山本町教育委員会
- 八嶋伸明(1995) 「大畑遺跡」－大畑遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第168集 宮城県教育委員会
- 菊地逸夫・早川英紀 (1996) 「一本杉窯跡群」 宮城県文化財調査報告書第172集 宮城県教育委員会
- 工藤哲司 (1996) 「中在家遺跡」 仙台市文化財調査報告書第213集 仙台市教育委員会
- 佐藤則之他 (1997) 「山王遺跡Ⅴ 八幡・伏石地区他」 宮城県文化財調査報告書第174集 宮城県教育委員会
- 佐藤洋一 (1997) 「堀の内遺跡」 蔵王町文化財調査報告書第1集 蔵王町教育委員会
- 多賀城市教育委員会(1997) 「山王遺跡Ⅰ」 多賀城市文化財調査報告書45集 多賀城市教育委員会
- 五十嵐康洋(1998) 「南小泉遺跡第26次調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第225集 仙台市教育委員会
- 村田晃一 (1998) 「山王遺跡町地区の調査」－県道塩釜線関連調査報告書Ⅱ 宮城県文化財調査報告書第175集 宮城県教育委員会
- 村田晃一 (1998) 「栗囲式土器の成立と展開」 『考古学の方法』東北大学文学部考古学研究会会報 東北大学考古学研究会
- 三好秀樹・藤村博之(1999) 「一里塚遺跡 第44・47次発掘調査報告書」 宮城県文化財調査報告書第179集 宮城県教育委員会
- 相澤清利・佐藤甲二(2000) 「宮城県における弥生後期の土器編年」－第9回東日本埋蔵文化財研究会シンポジウム『東日本弥生後期の土器編年』 東日本埋蔵文化財研究会
- 岩沼市教育委員会(2000) 「引込横穴墓群」 岩沼市文化財調査報告書第1集 岩沼市教育委員会
- 佐久間光平・古川一明他(2000) 「市川橋遺跡の調査」－県道泉～塩釜線関連調査報告書Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第184集 宮城県教育委員会
- 後藤秀一・村田晃一他(2001) 「山王遺跡八幡地区の調査2」－県道泉～塩釜線関連調査報告書Ⅳ 宮城県文化財調査報告書第186集 宮城県教育委員会
- 佐久間光平(2002) 「窪田遺跡・都遺跡・新城館跡」－名生館遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第188集 宮城県教育委員会
- 村田晃一(2002) 「7世紀集落研究の視点(1)－宮城県山王遺跡・市川橋遺跡を中心として－」－宮城考古学第4号 宮城県考古学会
- 相原淳一(2003) 「十郎田遺跡ほか」－壇の越遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第195集 宮城県教育委員会
- 吾妻俊典(2003) 「陸奥南部におけるカマド出現期の土器」－宮城考古学第5号 宮城県考古学会
- 佐藤洋一(2003) 「蔵王町円田盆地における遺跡分布状況」－宮城考古学第5号 宮城県考古学会
- 村田晃一(2003) 「中野高柳遺跡Ⅰ」 宮城県文化財調査報告書第194集 宮城県教育委員会
- 村田晃一・三好秀樹・白崎恵介(2004) 「中野高柳遺跡Ⅱ」 宮城県文化財調査報告書第197集 宮城県教育委員会

都 遺 跡

写 真 図 版



1. 航空写真



2. 都遺跡跡近景



1. A2区全景
(北から)



2. SD8溝跡
(北西から)



3. SK9土壇跡
(北から)

1. B2区全景
(東から)



2. S11a,b竪穴住居跡
(北西から)

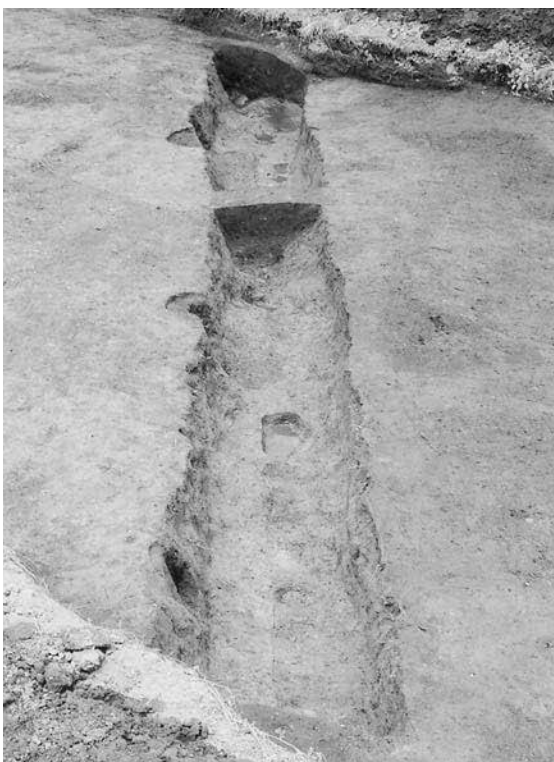


3. SD2溝跡
(北西から)





1. B3区全景
(東から)



2. SA1堀跡、SD1溝跡
(南東から)



3. C1区西端部遺構
分布状況
(東から)

1. SD5、6、7、
12溝跡
(南から)



2. C2区遺構分布
状況
(南東から)



3. S12竪穴住居跡
(南東から)





1. S I 2 カマド部分
(南東から)



2. S I 2 貯蔵穴付近遺物出土状況 (南東から)



3. S I 2 南西部床面遺物出土状況 (西から)



4. S A 4 堀跡、S D 3 溝跡
(南から)

1. D2区全景
(北西から)



2. S E 1 井戸跡
(南から)



3. S D 10 溝跡
(南から)





1a



1b



2



3



4



5

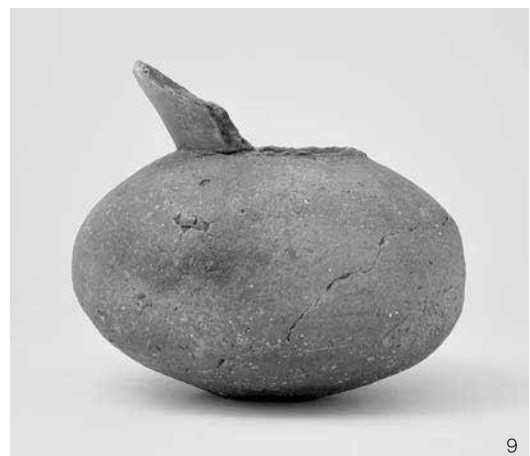


6

写真図版 8 都遺跡出土遺物

1 : B2区SI1b 2 : A2区SK9 3, 4 : B3区SD1
5 : C1区SD12 6 : D2区SK11

S ≒ 1/3
(1bは任意縮尺)



S ≒ 1/3

写真図版 9 都遺跡出土遺物
1~9 : C2区 SI2



1



2



3



4



5

写真図版 10 都遺跡出土遺物
1~5 : C2区SI2

S ≒ 1/3



写真図版 11 都遺跡出土遺物
1～3：表土

S ≡ 1/3



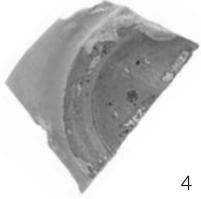
1



2



3



4



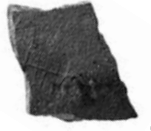
5



7



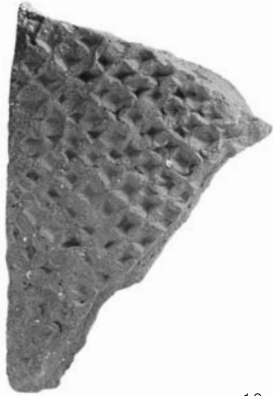
8



6



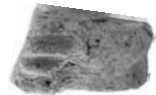
9



10



11



12



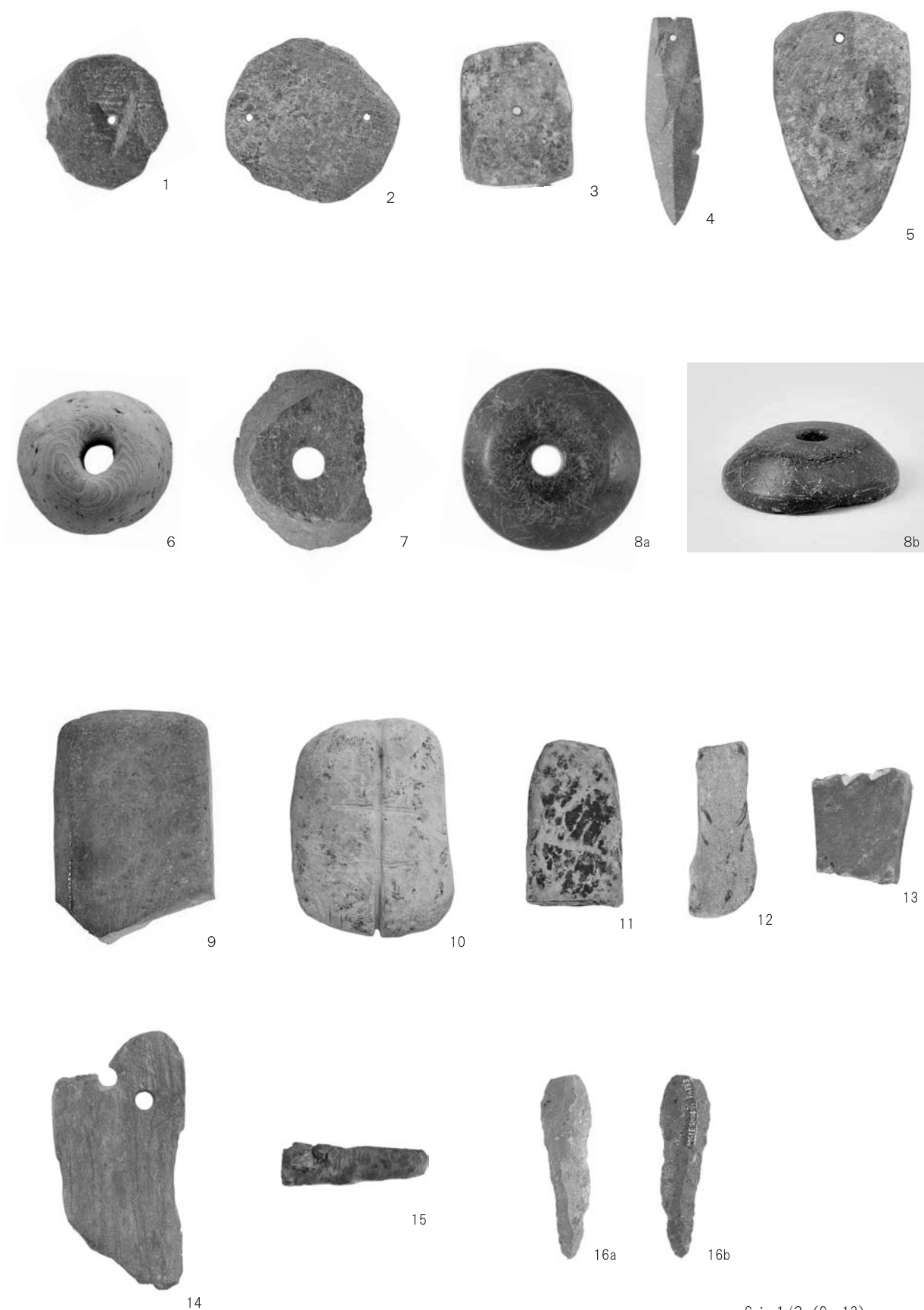
13a



13b

S ≐ 1/3 (5~7, 9~12)
S ≐ 1/2 (1, 2, 4)
S ≐ 2/3 (8, 13a)
S ≐ 1 (3)
(13b縮尺任意)

写真図版 12 都遺跡出土遺物
1 : D2区SD10 2~11 : 表土 12 : C1区SD12 13 : C2区SI2



S ≒ 1/3 (9~13)

S ≒ 2/3 (1~8b, 14~16b)

写真図版 13 都遺跡出土遺物

1、6、9、14 : C2区SI2 2 : C1区SD6 3 : D2区SD10
4、5、7、8、11~13、15 : 表土 10 : D2区SE2 16 : C2区SK4



1a



1b



2a



2b

S ≐ 1/5

写真図版14 都遺跡採集瓦

1、2：採集

窪田遺跡の発掘調査

I. 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基、溝跡5条、土壙2基、柱穴多数、河川跡などである。調査区内では河川跡及び湿地と微高地とが交錯しており、遺構は微高地及び湿地際部分にのみ分布する。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、墨書土器、近世陶磁器、石製品、金属製品などで、総量はコンテナ3箱分である。遺物の中で主体を占めるのは奈良～平安時代の土師器、須恵器である。以下、発見した遺構と遺物について調査区ごとに詳述する。

I-1. 1区（第1図）

本調査区で検出した遺構は竪穴住居跡6軒、溝跡3条、柱穴少数、河川跡1条である。河川跡は調査区西端部から検出された。また、調査区中央部と東端部に湿地が確認された。遺構は、これら河川跡及び湿地に挟まれた微高地に分布している。本調査区は遺構の分布状況を把握するに留まり、各遺構の精査は行っていない。

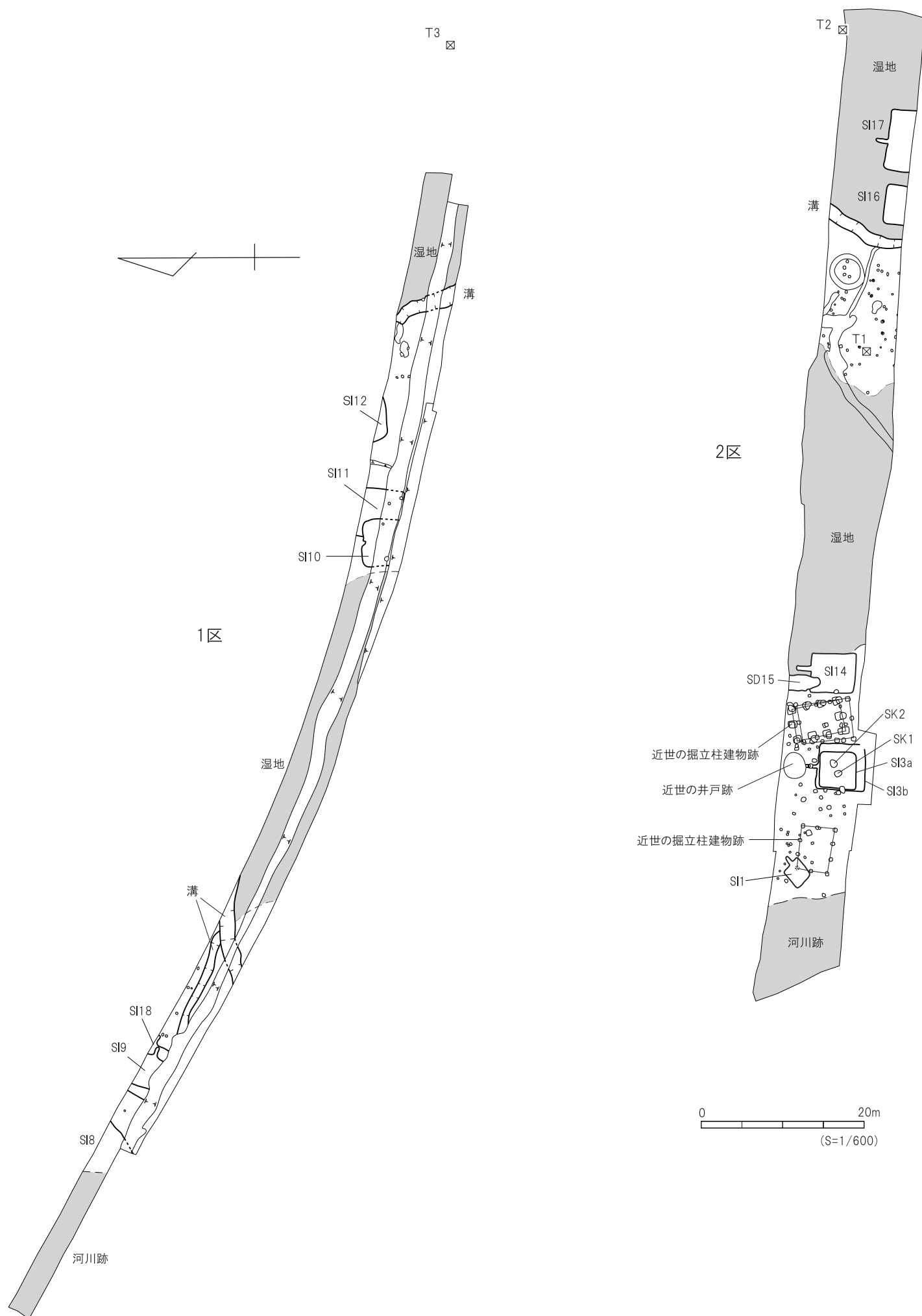
検出状況から把握できた範囲では、6軒の竪穴住居跡の中でカマドを伴うものは3軒（S I 9・10・18）である。うち、S I 10は住居北壁に、S I 9・18は住居東壁に、それぞれカマドを構築している。

3条の溝跡のうち、1条は調査区東端部の湿地際において検出された。湿地と微高地を区画するように設けられている。他の2条は調査区中央部の湿地の西端部において検出されたが、湿地の際に添う形で設けられているわけではない。

遺物は、S I 9竪穴住居跡確認面から土師器甕・甔が、湿地及び河川跡、遺構確認面、表土から土師器坏・甕、ロクロ土師器坏、須恵器坏・蓋・甕、赤焼土器坏などが出土している。S I 9竪穴住居跡確認面出土の土師器甔は器形を保った形でまとまって出土していることから、この住居跡に伴う遺物と考えられる（第10図1）。

I-2. 2区（第1図）

本調査区で検出した遺構は竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基、溝跡2条、柱穴多数、河川跡1条である。1区と同様に河川跡は調査区西端部から検出され、調査区中央部と東端部に湿地が確認された。遺構は、これら河川跡及び湿地に挟まれた微高地及び湿地際部に分布している。これら河川跡及び湿地、微高地の位置関係は1区と同じ様相を呈していることから、1区及び2区の所在する地域は、南北方向に小規模な沢上の湿地と微高地とが入り組んだ地形を呈することが把握できる。なお、調査区中央部の湿地の堆積層は、湿地西際において検出されたS I 14竪穴住居跡の上に堆積していることが確認された。このことから、この地域における沢状地形の埋没が完了したのはS I 14竪穴住居跡の廃絶後ということがわかる。本調査区の南半は遺構の分布状況を把握す



第1図 1区・2区遺構配置図

るに留まり、各遺構の精査は行っていない。精査した遺構は北半に位置するS I 1・3・14竪穴住居跡、SK 1・2土壌である。なお、北半に位置する遺構で、掘立柱建物跡、井戸跡などは堆積土より近世陶磁器片が出土したことから近世以降のものと判断し、今回は精査しなかった。

遺物は、遺構内、湿地及び河川跡、遺構確認面、表土から弥生土器、土師器坏・甕、ロクロ土師器坏、須恵器坏・甕、墨書土器、石製品などが出土している。

①竪穴住居跡

S I 1 竪穴住居跡（第2・3図）

調査区西側微高地の西端部に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。他の遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は北東辺2.7m、北西辺3.0mである。

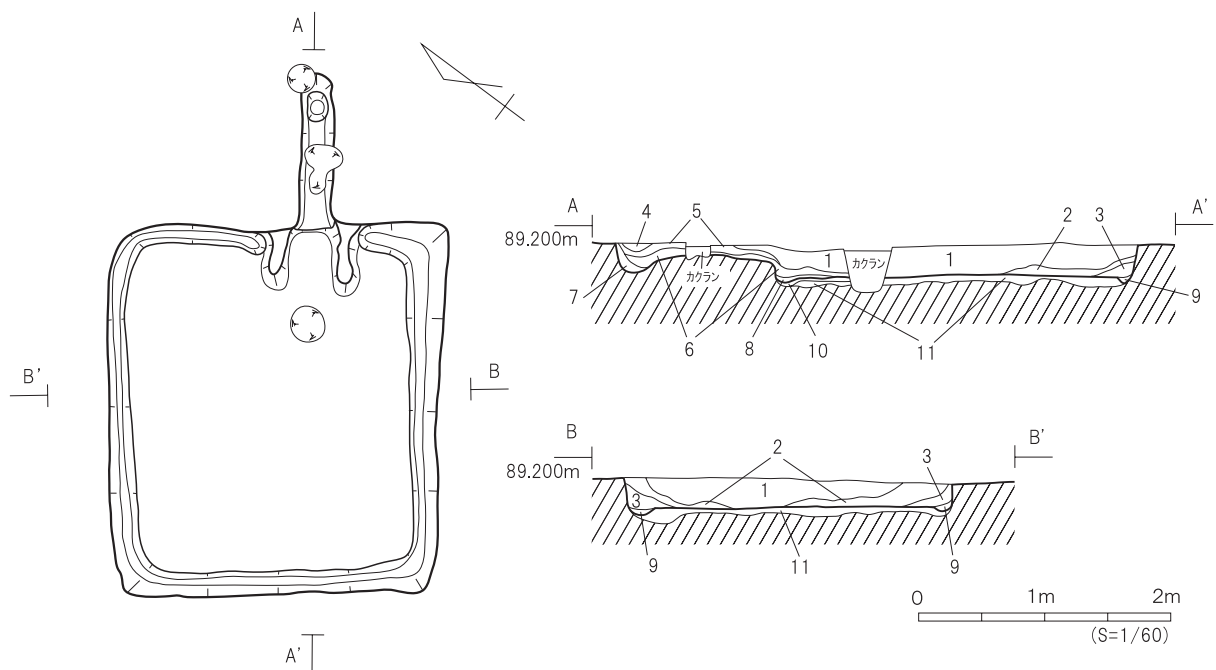
〔方向〕北西辺でみると北で42度東に偏している。

〔堆積土〕9層に分けられる。1層は住居廃絶後の人為的埋土、2・3層は自然流入土、4～8層は煙道及びカマド堆積土、9層は周溝堆積土である。

〔壁〕やや外方向に傾斜して立ち上がる。壁高は南東辺で床面から28cmである。

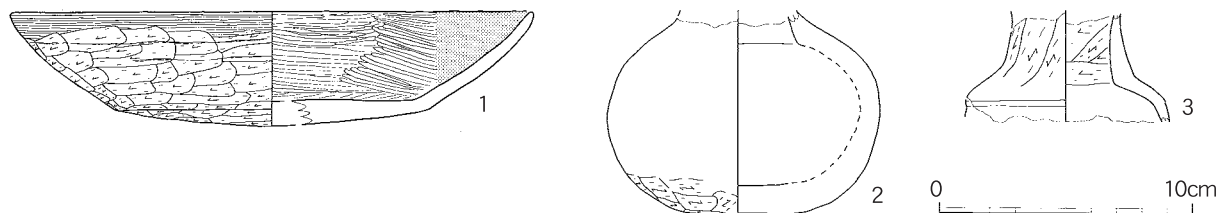
〔床面〕掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕確認されなかった。



層	土 色	土性	備 考	層	土 色	土性	備 考
1	黒色(7.5YR2/1)	シルト	白色粘土ブロックを多量に含む 人為的埋土	7	黒褐色(10YR3/2)	粘 土	白色粘土ブロックを多量に含む
2	黒色(7.5YR2/1)	粘質シルト	白色粘土粒を多量に含む	8	黒色(10YR1.7/1)	シルト	白色粘土ブロックを少量含む
3	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	白色粘土粒を少量含む	9	黒色(10YR2/1)	シルト	白色粘土小ブロックを少量含む
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを少量含む	10	黒褐色(10YR2/2)	シルト	住居掘り方埋土
5	黒褐色(10YR2/3)	粘質シルト	白色粘土ブロックを多量に含む	11	黒褐色(10YR2/2)	シルト	白色粘土ブロックをごく多量に含む 住居掘り方埋土
6	黒色(10YR1.7/1)	粘質シルト	白色粘土ブロックを多量に含む				

第2図 S I 1 竪穴住居跡



No.	区	遺構	層位	種 類	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	器高	残存	備 考	写真	登録
1	2	SI1	床直	土師器・坏	(口)ヨコナデ→(体～底)ヘラケズリ	ヘラミガキ(底面井桁状)→黒色処理	(20.8)	丸底	4.5	2/5	pot 2	5-1	3
2	2	SI1	床直	土師器・壺	ヘラケズリ→ヘラミガキ? (底)ヘラケズリ	ナデ	—	—	(8.0)	一部	pot1外面摩滅多い	5-2	11
3	2	SI1	床直	土師器・壺	ヘラケズリ・ナデ?	ヘラケズリ・ナデ?	—	—	(4.4)	一部	pot3	5-3	19

第3図 SI1竪穴住居跡出土遺物

〔周溝〕カマド部分を除き全周する。上端幅9～19cm、深さ3～5cmで、断面形は緩やかなU字状を呈する。

〔カマド〕北東壁中央やや南東寄りに設置されている。燃烧部と煙道が残存する。燃烧部の大きさは、幅36cm・奥行き48cmで、底面は浅く窪んでいる。燃烧部側壁は白色粘土によって構築されている。右側壁は長さ55cm・幅23cm・高さ8cm、左側壁は長さ45cm・幅20cm・高さ10cmが残存している。両側壁とも周溝を埋め戻して構築している。燃烧部奥壁はほぼ垂直で、27cm立ち上がって煙道と接続する。煙道は長さ124cm・幅26cm・深さ7～14cmで、断面形は底面の平らなU字状を呈し、基部から先端に向かって緩やかな上り傾斜がつく。煙道の先端には長径24cm・短径18cm・深さ12cmの煙出しピットがつく。

〔貯蔵穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕住居床面直上から土師器坏・壺が、住居堆積土から土師器坏・甕が出土している。また、住居堆積土から弥生土器片がごく少量出土している。

SI3a・b竪穴住居跡（第4～6図）

調査区西側微高地の中央部に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。南東部が削平により失われている。SK1・2土壌と重複し、これらより新しい。精査の結果建替えが行われていることが判明した。建替えの状況は、古い住居の南辺及び東辺を約1m、北辺及び西辺を約30cm拡張し、古い住居範囲内については15～18cmほど埋め戻しを行って、あらたな床面を構築している。ここでは建替え前の古い住居をSI3a、建替え後の新しい住居をSI3bとする。

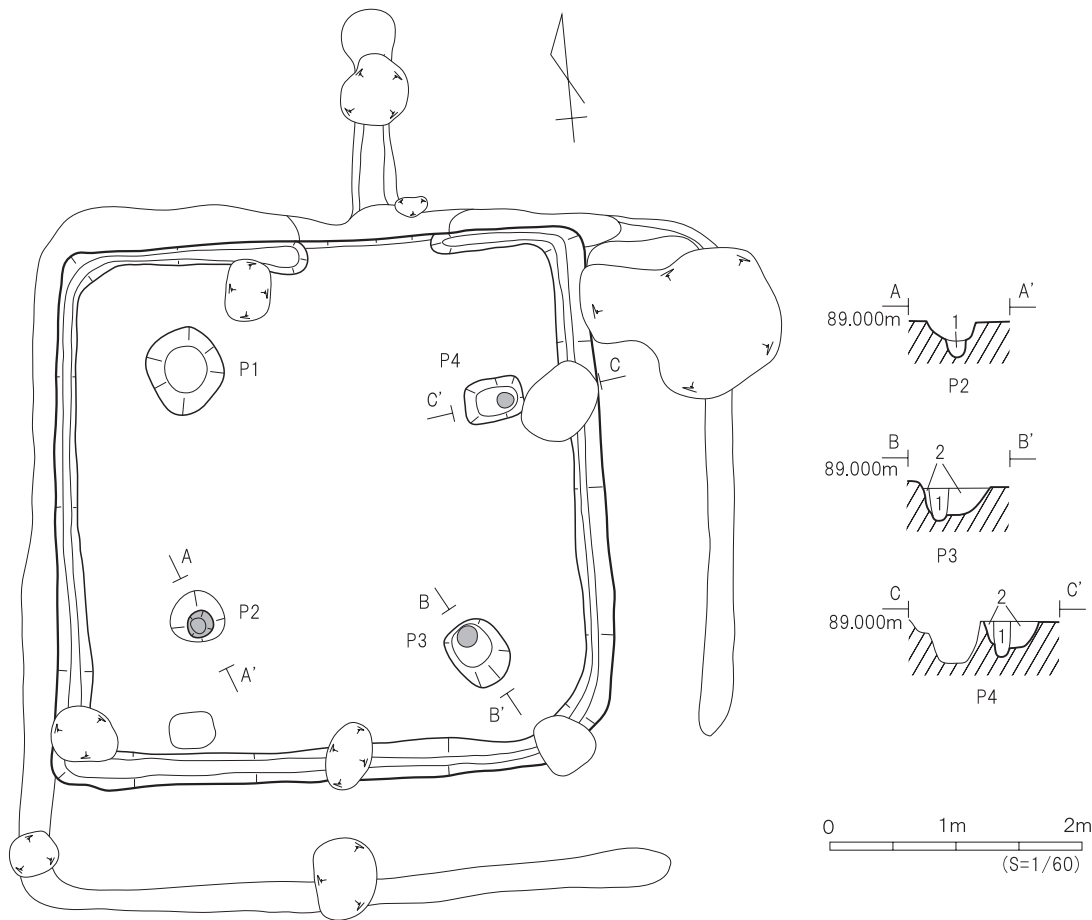
SI3a竪穴住居跡（第4・5図）

〔平面形・規模〕平面形は正方形で、規模は一辺4.2mである。

〔方向〕西辺でみると北で4度東に偏している。

〔堆積土〕1層認められる。地山小ブロック及び礫を多量に含んだ黒色シルトで、SI3bに建替える際に埋め戻した、人為的埋土である。

〔壁〕SI3b構築時の掘削により北壁及び西壁は残存せず、南壁及び東壁のみ残存する。ほぼ垂直に立ち上がり、壁高はもっとも残りの良い南壁で床面から14cmである。



第4図 SI3a 竪穴住居跡

〔床面〕掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕住居平面の対角線上付近から4個の主柱穴（P1～4）を確認した。うち、P2～4から直径14～20cmの柱痕跡を確認した。またP2では柱材の切り取りを確認した。P1は、位置的には本住居の主柱穴として適当だが、他の柱穴より平面形が一回り大きい。位置・規模的にはSI3bの主柱穴としても適当であることから、もとは本住居の主柱穴だったものがSI3b構築時に掘り直して再び主柱穴として利用されたものと考えられる。

〔周溝〕北辺中央部を除き全周する。上端幅14～30cm、深さ5～13cmで、断面形はU字状を呈する。

〔カマド〕直接本住居に伴うカマドは確認されなかったが、SI3bのカマド軸線が本住居の南北中軸線とほぼ等しくなる点、本住居北辺の周溝が途切れる部分にSI3bのカマドが位置する点などを考慮すると、従来本住居においてもSI3bのカマドと同位置にカマドが設置されていた可能性がある。その場合、建替えに伴って住居内部のカマド構造は再構築したが、煙道部は本住居のものを再利用したものと考えられる。

〔貯蔵穴〕 確認されなかった。

〔出土遺物〕 住居堆積土から土師器坏・甕、須恵器壺が、住居掘り方埋土から土師器坏・甕が出土しているが、いずれも小片で、少量である。

S I 3 b 竪穴住居跡（第5・6図）

〔平面形・規模〕 南東隅部が削平により残存しないが、平面形は正方形で、規模は一辺5.6mである。

〔方向〕 西辺でみると北で4度東に偏している。

〔堆積土〕 10層に分けられる。1～5層は住居廃絶後の自然堆積土、6層は壁材の痕跡、7～9層は住居廃絶後のカマド及び煙道内堆積土、10層はカマド底面直上に堆積するほぼ純粋な炭化物の層であることからカマド機能時の堆積物と考えられる。

〔壁〕 南東隅部が削平により消失しているが、残存する部分ではほぼ垂直に立ち上がり、壁高はもともと残りの良い西壁の北側で床面から20cmである。

〔床面〕 S I 3 a と重複する範囲は掘り方埋土を、拡張部分は掘り方埋土あるいは地山を床面としている。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 住居平面の対角線上付近から4個の支柱穴（P 1～4）を確認した。全ての柱穴から直径14～22cmの柱痕跡を確認した。またP 4では柱材の切り取りを確認した。P 1は位置的にS I 3 a の支柱穴を再利用したものと考えられる。

〔周溝〕 削平によって消失している南東隅部は不明だが、北辺中央部及び北東隅部を除き全周する。上端幅20～40cm、深さ10～14cmで、断面形はU字状を呈する。南部及び東部の周溝内では幅7～10cmの壁材痕跡が確認されている。

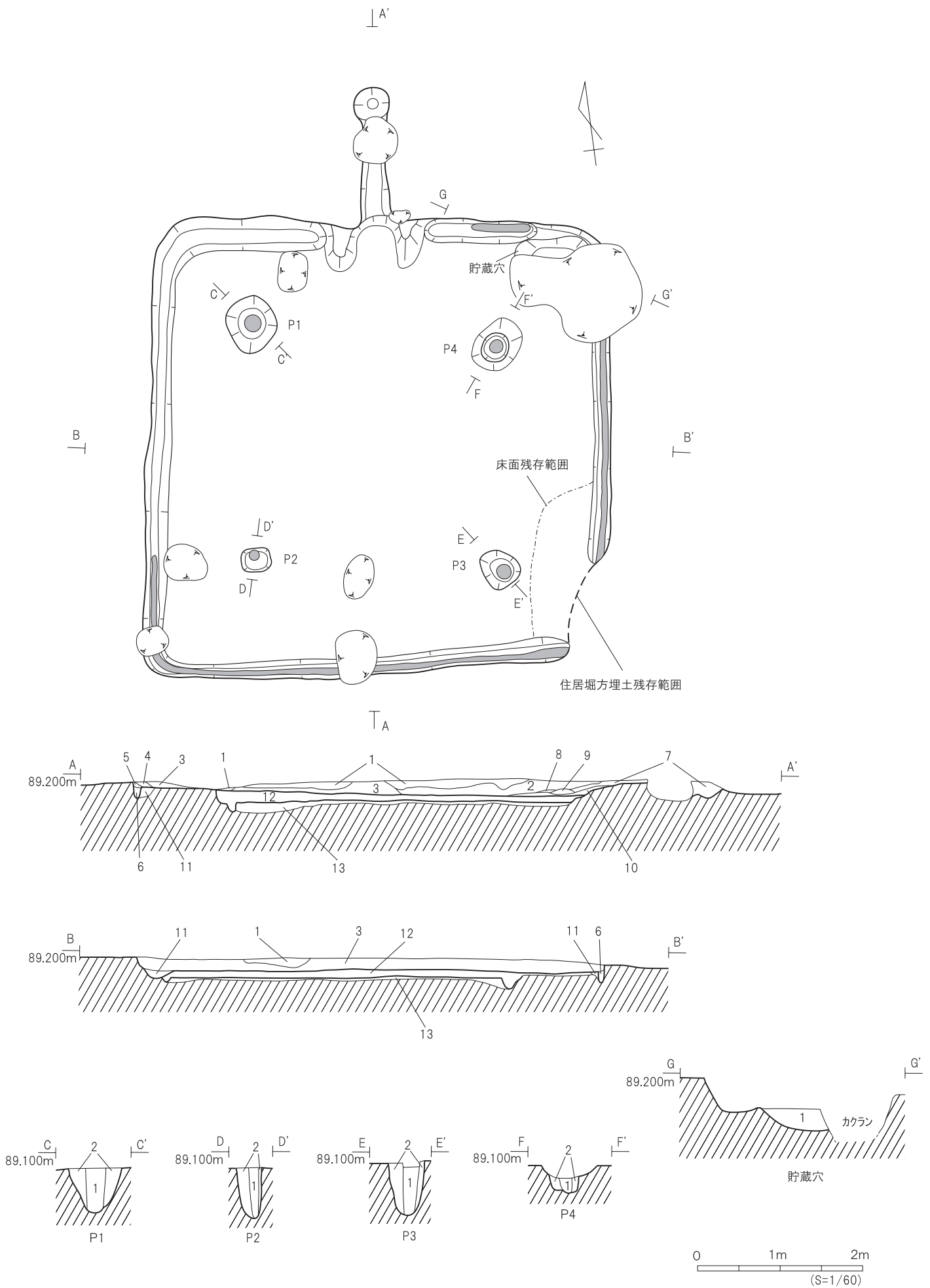
〔カマド〕 北壁中央部に設置されている。燃烧部と煙道が残存する。燃烧部の大きさは、幅48cm・奥行き64cmで、底面はごく浅く窪んでいる。燃烧部側壁は白色粘土が混じる黒褐色土によって構築している。右側壁は長さ56cm・幅36cm・高さ15cm、左側壁は長さ54cm・幅40cm・高さ12cmが残存している。両側壁とも周溝端部を埋め戻して構築されている。燃烧部奥壁はほぼ緩やかな傾斜をもって煙道と接続する。煙道は長さ158cm・幅36cm・深さ4～8cmで、断面形は底面の平らなU字状を呈し、基部から先端に向って緩やかな上り傾斜がつく。煙道の先端には径42cm・深さ23cmの煙出しピットがつく。

〔貯蔵穴〕 北東隅部に設置されている。攪乱により大半が消失しているが、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。残存長は東西88cm、南北36cm、床面からの深さ24cmである。堆積土は1層で、自然堆積土である。

〔出土遺物〕 住居床面から土師器坏・鉢が、周溝埋土から土師器壺・甕が、カマド堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏が、煙道堆積土から土師器坏・甕が、貯蔵穴堆積土から土師器坏・甕が、住居堆積土から土師器坏・甕、須恵器甕が、支柱穴（P 4）の掘り方埋土から土師器坏・甕が出土している。

S I 14 竪穴住居跡（第7図）

調査区西側微高地の東端部に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。S D 15溝跡と重複し、これより古い。



第5図 S I 3b竪穴住居跡

SI3a・b 竪穴住居跡土層注記表

SI3a・b

層	土 色	土 性	備 考
1	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	砂礫をごく多量に、炭化物をごく少量含む
2	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	砂礫・灰白色粘土小ブロック・炭化物を多量に含む
3	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	砂礫をごく多量に含む
4	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山粒を含む
5	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山粒をごく少量含む
6	黒色(10YR2/1)	粘 土	地山土を含む 壁材痕跡
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	灰白色粘土ブロック・炭化物を多量に含む
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土ブロックをごく多量に含む
9	褐色(7.5YR4/4)	シルト	焼土ブロック・炭化物を多量に含む カマド崩落土
10	黒色(10YR1.7/1)		炭化物層 カマド機能時の堆積

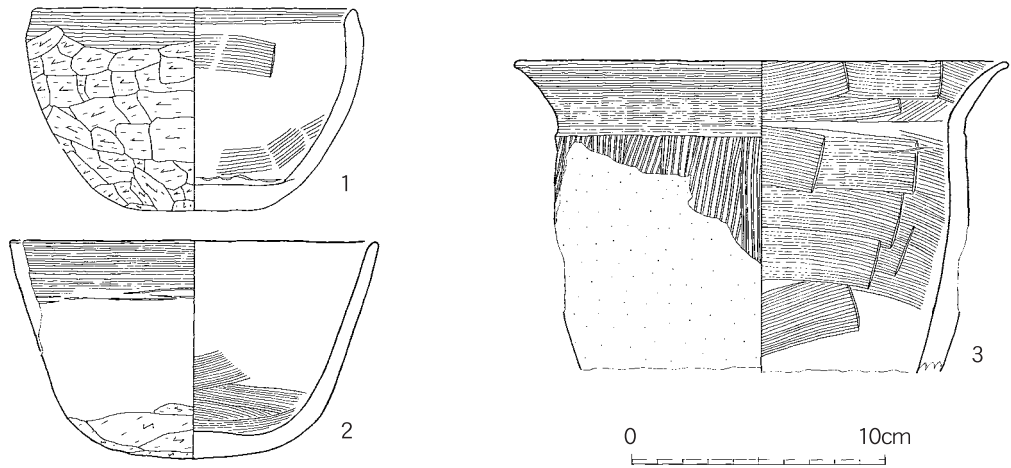
層	土 色	土 性	備 考
11	黒褐色(10YR2/3)	粘 土	地山小ブロックを多量に含む
12	黒色(10YR1.7/1)	粘 土	地山小ブロック・礫を多量に含む SI3b住居掘り方埋土
13			SI3a住居掘り方埋土

SI3b貯蔵穴

層	土 色	土 性	備 考
1	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	灰白色粘土ブロック・小礫をごく多量に含む

SI3b支柱穴

層	土 色	土 性	備 考
1	黒色(10YR1.7/1)	シルト	地山粒を含む 柱痕跡
2	黒色(10YR2/1)	シルト	地山小ブロックをごく多量に含む 柱穴掘り方埋土



No	区	遺構	層位	種 類	外 面 調 整	内 面 調 整	口徑	底徑	器高	残存	備 考	写真	登録
1	2	SI3	床	土師器・鉢	(口)ヨコナデ(胴~底)ヘラケズリ	(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ	(12.8)	丸底	8.0	1/3	pot3	5-5	0501
2	2	SI3	床	土師器・鉢	(口)ヨコナデ(底)ヘラケズリ	(胴~底)ナデ	(14.6)	丸底	8.6	1/2	pot1	5-4	0502
3	2	SI3	貯蔵穴	土師器・甕	(口)ヨコナデ(胴)ハケメ	(口~胴)ヘラナデ	(19.6)	—	(12.2)	一部	外面摩滅多い		0503

第6図 SI3b竪穴住居跡出土遺物

[平面形・規模] 平面形は正方形で、規模は一辺4.8mである。

[方向] 西辺でみると北で2度東に偏している。

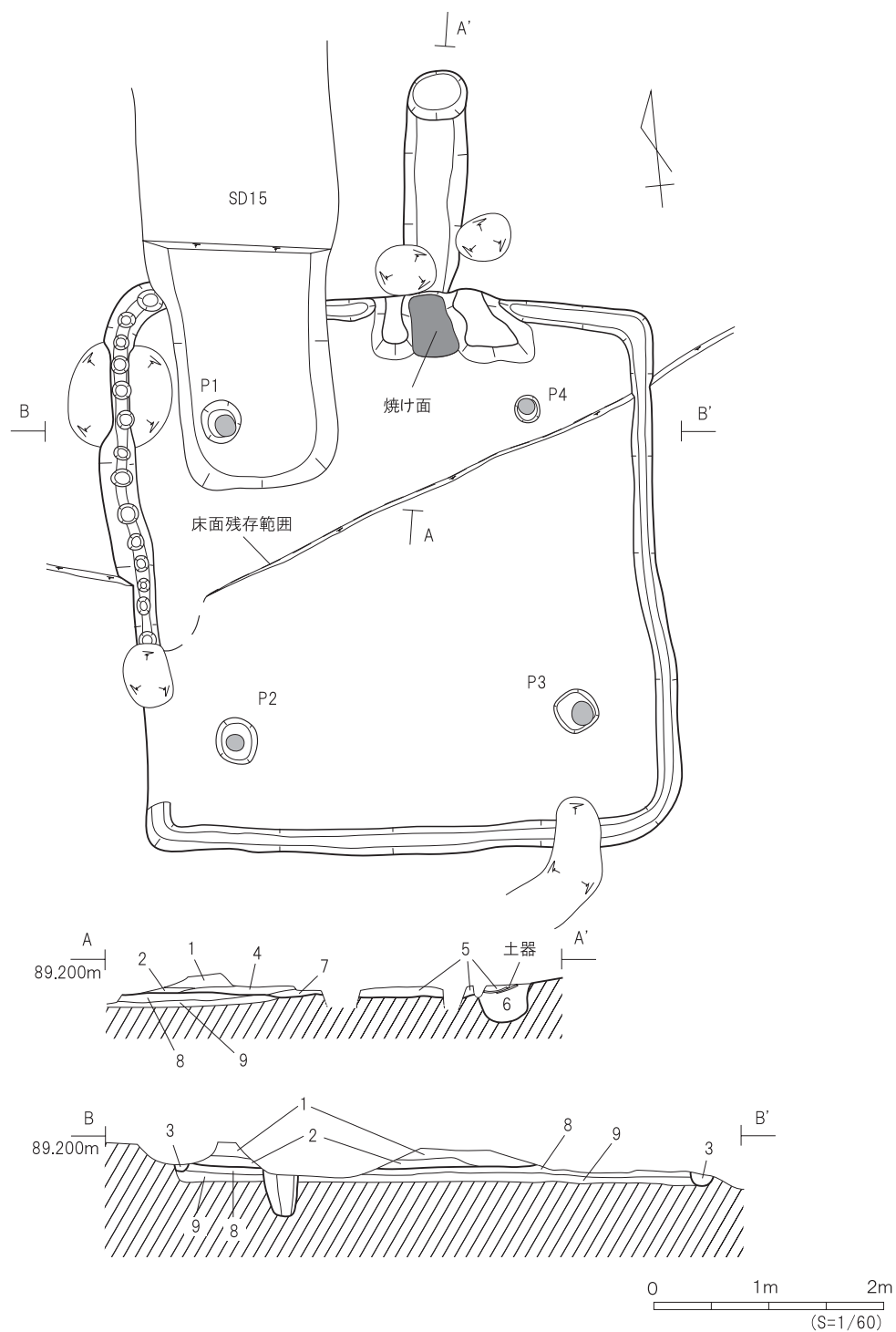
[堆積土] 7層に分けられる。1・2層は住居廃絶後の自然堆積土、3層は周溝内堆積土、4～6層は住居廃絶後のカマド及び煙道内堆積土、7層はカマド底面直上に堆積する焼土と炭化物からなる層であることからカマド機能時の堆積物と考えられる。

[壁] 残存していない。

[床面] 南部は削平により消失しており、北部にのみ残存する。掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

[柱穴] 住居平面の対角線上付近から4個の支柱穴（P1～4）を確認した。全ての柱穴から直径14～18cmの柱痕跡を確認した。

[周溝] 北辺中央部を除き全周する。上端幅16～26cm、深さ6～8cmで、断面形はU字状を呈する。西辺北側では、底面から径6～20cmの、円形のピットが14個確認されている。これらは周溝底面に



層	土 色	土性	備 考	層	土 色	土性	備 考
1	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山粒・ブロック、焼土、炭化物粒を含む	6	明赤褐色(5YR5/8)	粘質シルト	炭化物粒を含む
2	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山粒、炭化物を含む	7	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山粒を含む
3	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山・焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む カマド崩落土	8	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山大ブロックを多量に含む 住居掘り方埋土
4	黒褐色(10YR2/2)	粘 土	焼土、炭化物粒を少量含む	9	黒褐色(10YR2/2)	粘 土	住居掘り方埋土
5	黒褐色(10YR2/3)	粘質シルト	焼土、炭化物粒を多量に含む				

第 7 図 S114 竪穴住居跡

整然と並ぶことから壁柱穴と考えられる。

〔カマド〕北壁中央部やや東寄りに設置されている。燃烧部と煙道が残存する。燃烧部の大きさは、幅38cm・奥行き58cmで、底面はごく浅く窪んでいる。燃烧部側壁は白色粘土を主体とした土で構築されている。右側壁は長さ64cm・幅68cm・高さ7cm、左側壁は長さ48cm・幅44cm・高さ5cmが残存している。両側壁とも周溝を埋め戻して構築している。燃烧部奥壁はほとんど立ち上らず、燃烧部底面と煙道基部との高さはほぼ等しい。煙道は長さ190cm・幅54cm・深さ9cmで、断面形は底面の平らなU字状を呈し、基部から先端部までほぼ平坦である。煙道の先端には径52cm・深さ34cmの煙出しピットがつく。

〔貯蔵穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕住居床面から土師器甕が、カマド堆積土から土師器甕が、煙出しピット堆積土の堆積土6層上面からまとめて土師器甕が出土している。

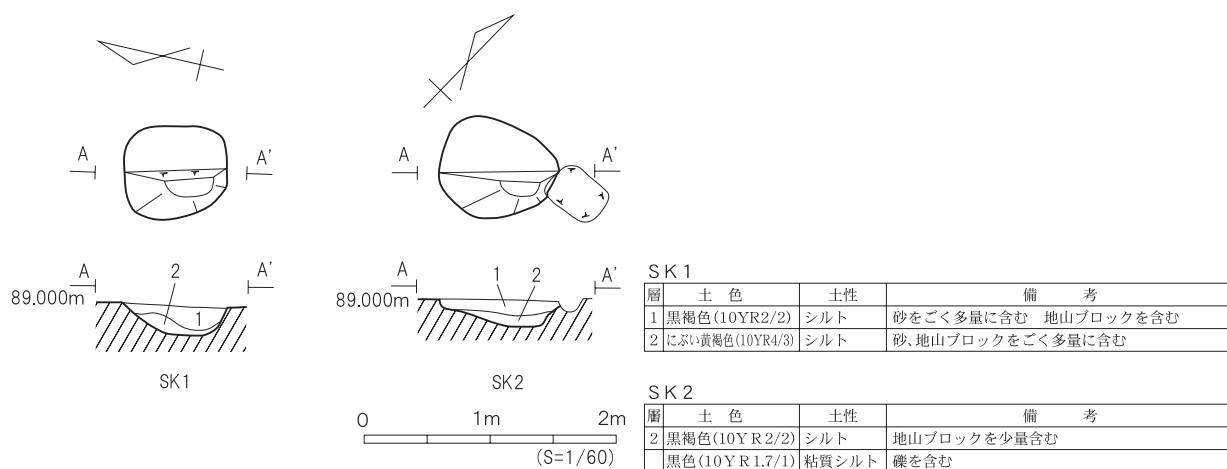
②土壌

SK1土壌（第8図）

調査区西側微高地の中央部に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。SI3a堅穴住居跡と重複し、これより古い。平面形は不整な楕円形で、長軸81cm・短軸75cm・深さ26cmである。断面形は逆台形である。堆積土は2層に分けられる。いずれも砂礫を多く含むことから水成堆積土と考えられる。

SK2土壌（第8図）

調査区西側微高地の中央部に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。SI3a堅穴住居跡と重複し、これより古い。平面形は不整な楕円形で、長軸92cm・短軸77cm・深さ20cmである。断面形は逆台形である。堆積土は2層に分けられる。黒～黒褐色のシルトで、自然堆積土と考えられる。



第8図 SK1・2土壌

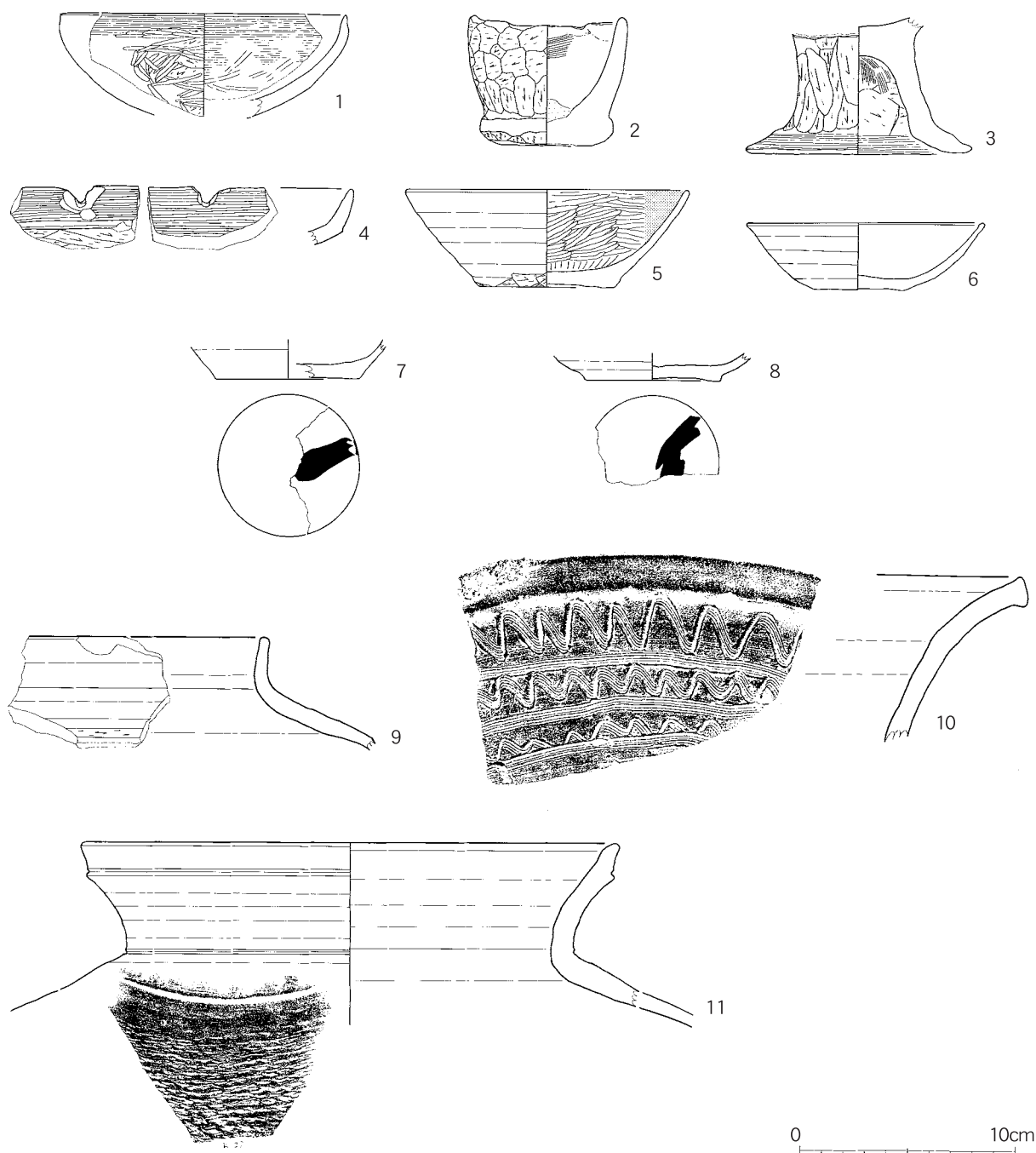
I-3. その他の出土遺物（第9・10図）

ここでは、遺構確認調査のみ実施した遺構の出土遺物や、表土や湿地堆積土、河川跡などの遺構外出土遺物について概述する。

今回の調査では、表土及び湿地堆積土、河川堆積土から弥生土器・土師器・ロクロ土師器・須恵器・赤焼土器・近世陶磁器・石製品・金属製品が出土した。その大半は非ロクロ成形の土師器である。器形が判明する物では坏と甕が大半を占め、鉢・甑も少量認められる。坏は基本的に丸底で内面がミガキの後黒色処理を施す。内外面の段や屈曲は認められるものと認められないものがある。甕は長胴のものと胴張りのものとがあるが、前者が主体的である。体部は縦位のハケメ調整を主体とし、頸部には痕跡的な段を有するか、無段のものが多い。また、丁寧なミガキ調整を施し、内外面に朱彩を施した物も少量見られる。これらのうち、特徴的なものを5点図示した（第9図1～4、第10図1）。第9図1は土師器坏である。丸底で、内弯気味に立ち上がり、口縁部が内屈気味に直立するものである。このような特徴から古墳時代中期の南小泉式期のものと考えられる。第9図2はミニチュア土器である。第9図3は高坏である。脚部は円錐台状で裾部が屈曲し、調整はやや粗雑なヘラケズリが施される。坏部内面はヘラミガキの後黒色処理が施される。このような特徴から古墳時代後期の栗圀式期のものと考えられる。第9図4は土師器坏である。基本的な形態は古墳時代後期～古代初頭のものだが、内面調整に横方向のナデを施すもので、ミガキ・黒色処理を施す普遍的な該期の遺物とは異なる。この遺物は多賀城市山王遺跡SD2050河川跡2B層、仙台市郡山遺跡SI260竪穴住居跡などに類例を求めることができる。これらはいわゆる「関東系土師器」と称されるもので、関東系移民との関連が指摘される遺物である。山王遺跡SD20502B層は7世紀前半でも中葉に近い時期、郡山遺跡SI260は6世紀末～7世紀中頃としていることから、この遺物についても同様に6世紀末～7世紀中頃の年代が与えられるものと考えられる。第10図1はSI9竪穴住居跡の床面直上から出土した甑である。SI9は遺構確認調査のみ実施した遺構だが、遺構確認面ですでに床面が露出している状態であった。無底で、体部はやや胴張り気味で縦位のヘラケズリ調整を施し、頸部無段で口縁部はやや外傾する。口縁部内外に赤彩が施される。このような特徴から古墳時代中期の南小泉式期のものと考えられる。

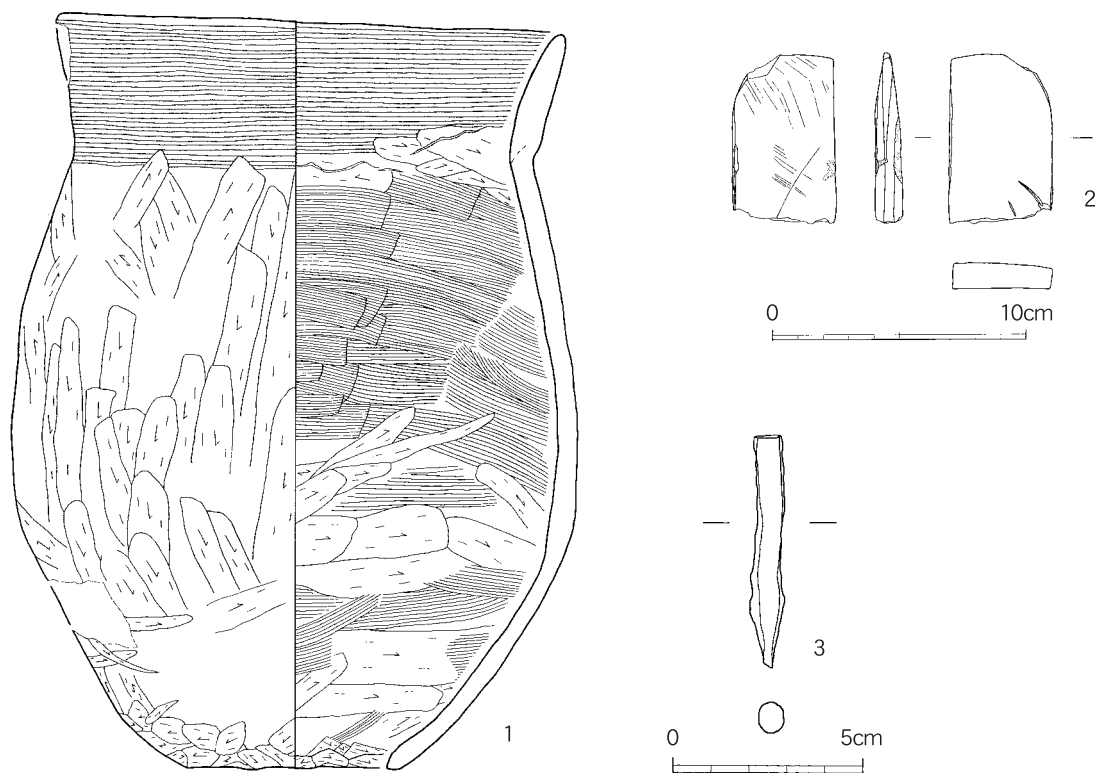
ロクロ土師器はごく少数が出土した。このうち坏は、底部の状況が判明するものは全て回転糸切りによる切り離しの後、周辺部に手持ちヘラケズリ調整を加える。このうち1点を図示した（第9図5）。

須恵器は坏・高台坏・短頸壺・甕などがある。短頸壺1点（第9図9）と甕2点（第9図10・11）を図示した。第9図10は大形の甕の口縁部である。外反し、端部は上下につまみ出され、縁帯状になる。外面には櫛描波状文と並行区画が3対描かれている。このような特徴は7世紀後半～8世紀前葉の須恵器に認められるものである。第9図10は口径25cmほどの甕で、頸部はやや短く外反し、端部は軽く上方につまみ出される。口縁端部外面は、頸部との境界に段が設けられ、その直上に沈線が巡る。また頸部と体部との接続部外面にも沈線が巡る。体部外面は縄目状叩き目、内面は同心円状押え具痕が認められる。この遺物は郡山遺跡SA1430材木列抜取溝や、同SD1394溝跡底面



No	区	遺構	層位	種 類	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	器高	残存	備 考	写真	登録
1	2	湿地堆積層		土師器・坏	(口)ヨコナデ(体)ヘラケズリ→(口~体)ヘラミガキ	(口)ヨコナデ(体)ナデ→一部ヘラミガキ	(13.3)	—	(4.8)	1/5			5
2	2	湿地堆積層	土師器・高坏	ヘラケズリ (底)ナデ?	ナデ		(6.4)	5.4	6.0	1/2	内面剥離している	5-6	10
3	2	表土	土師器・高坏	(脚)ヘラケズリ (縦)ヨコナデ	(脚)ヘラミガキ→黒色処理(脚)ナヘラケズリ→(縦)ヨコナデ		—	10.5	(6.4)	一部	脚部のみの破片	5-9	7
4	1	表土	土師器・坏	(口)ヨコナデ(体)ヘラケズリ	(口)ヨコナデ(体)ナデ		—	—	(3.8)	一部		6-5	27
5	1	表土	土師器・坏	ロクロナデ→(底)回転糸切り→(体下~底)手持ヘラケズリ	ヘラミガキ(放射状)→黒色処理		(13.2)	(6.2)	4.6	1/4		5-8	9
6	1	表土	赤焼土器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ→アテ具痕		11.0	4.2	3.1	ほぼ完形		5-7	2
7	2	湿地堆積層	須恵器・坏	ロクロナデ(底)回転糸切無調整	ロクロナデ		—	(6.6)	(1.8)	一部	外底面に墨書「口」	6-3	24
8	2	湿地堆積層	須恵器・坏	ロクロナデ(底)回転糸切無調整	ロクロナデ		—	(6.2)	(1.3)	一部	外底面に墨書「口」	6-4	25
9	2	湿地堆積層	須恵器・短頸壺	ロクロナデ→一部回転ヘラケズリ	ロクロナデ		—	—	(5.2)	一部			20
10	2	湿地堆積層	須恵器・甕	ロクロナデ→櫛歯波状文	ロクロナデ		—	—	(7.8)	一部		6-2	12
11	2	SD15		須恵器・甕	(口)ロクロナデ (胴)縄目タタキ	(口)ロクロナデ(胴)同心円状オサエ	(25.1)	—	(8.5)	一部		6-1	22

第9図 その他の出土遺物(1)



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	SI9	床直	土師器・甕	(口)ヨコナデ(胴)ナデ→ヘラケズリ	(口)ヨコナデ(胴)ヘラナデ→ヘラケズリ→ナデ→(底)ヘラケズリ	20.2	8.4	29.5	3/4	無底 口縁内外面に赤彩	5-10	1
2	2		窪地・埴輪	砥石	特徴 長(6.7) 幅4.2 厚1.0 重49g					一部	石材 凝灰岩 5面使用	6-7	23
3			出土地不明	釘?	特徴 長(6.1) 幅0.9 厚0.8					一部		6-6	26

第10図 その他の出土遺物(2)

出土遺物に類例を求めることができる。これらの遺構は郡山遺跡Ⅰ期官衙に属するものとされており、出土遺物の年代は7世紀後半に位置付けられている。このことから第9図11の甕の年代も7世紀後半のものと考えられる。須恵器坏には底部に墨書が認められるものが2点出土している（第9図7・8）。文字については判読不明である。

また、ごく少数ながら赤焼土器も出土している。このうち1点を図示した（第9図6）。

II. 考 察

今回の調査で検出した遺構は竪穴住居跡11軒・掘立柱建物跡3棟・井戸跡1基・溝跡5条・土壇2基・柱穴多数などである。このうち精査を実施したのは2区の竪穴住居3軒・土壇2基である。また、これらの遺構の内外から、弥生土器・土師器・ロクロ土師器・須恵器・赤焼土器・墨書土器・近世陶磁器・石製品・金属製品が出土している。以下、出土遺物と遺構に検討を加え、本遺跡の様相について考察する。

II-1. 遺物について

今回の調査によって出土した遺物は時期的には弥生時代・古墳時代・古代・近世のもので、主体を占めるのは古墳時代の土師器である。出土遺物はその多くが表土及び湿地堆積土・河川堆積土からのもので、一括性が認められるものはS I 1及びS I 3 b竪穴住居跡出土遺物のみで、その数も少なく器種の欠損も認められる。ここでは、これらの遺構に伴う遺物のうち、主に図化したものを中心に分析し、他遺跡における類例を求める形で検討を行う。

(1) 各遺構の出土土器とその年代

〔S I 1 竪穴住居跡〕（第3図）

土師器坏・壺が出土している。

(坏) 床面直上から1点出土している（第3図1）。口径が20cmを超える大型坏である。体部内外面に段・稜がなく、体部は直線的に外傾し、そのまま口縁部に至るもので、底部は平底風の丸底である。外面調整は口縁部がヨコナデ、体～底部はヘラケズリである。内面調整はヘラミガキのち黒色処理が施されている。

(壺) 床面直上から2点出土している（第3図2・3）。欠損によりいずれも全体形は不明である。

第3図3は須恵器短頸壺の模倣とみられるもので、肩部に浅い沈線が巡る。

このほか、図示できなかったが床面から体部に段を有する土師器坏が共伴する。

これらの遺物は多賀城市山王遺跡SD2124溝跡出土遺物（後藤ほか：1994）、同SD180B溝跡出土遺物（千葉・石本：1991）などに類例を求めることができる。これらの出土遺物の年代は7世紀末～8世紀中頃と考えられていることから、本住居跡の機能時期もおおむね同様の年代と考えられる。

〔S I 3 b 竪穴住居跡〕（第6図）

土師器鉢・甕が出土している。

(鉢) 床面から2点出土している。いずれも比較的口径に比して器高が高いものである。形状及び器面調整により、①体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が内弯するもので、調整は、外面が口縁部ヨコナデ、底部～体部がヘラケズリ、内面はヘラナデであるもの（第6図1）と、②体部

が外傾してそのまま口縁部に至るもので、調整は、外面が口縁部ヨコナデ、底部～体下部がヘラケズリ、内面はヘラナデであるもの（第6図2）とに細別される。

（甕）貯蔵穴から1点出土している（第6図3）。体下部が欠損し、全体形は不明である。長胴形で、頸部に痕跡的な段がつき、口縁部は外反する。口唇部が玉縁状に膨らむ。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面が縦位のハケメ、内面がヘラナデである。

これらの遺物は仙台市郡山遺跡SD1492溝跡出土遺物（長島・熊谷：1995）、仙台市下ノ内遺跡SI21竪穴住居跡出土土器（篠原：1990）などに類例を求めることができる。これらの出土遺物の年代は7世紀後半～8世紀前半頃と考えられていることから、本住居跡の機能時期もおおむね同様の年代と考えられる。

〔SI14竪穴住居跡〕

床面から土師器甕出土している。図示することができなかったが、長胴形で、頸部に痕跡的な段がつき、口縁部は外反し、体部外面に縦位のハケメ調整が施されるものである。このような特徴は7世紀末～8世紀前半頃の土師器甕にみられることから、本住居跡の機能時期もおおむね同様の年代と考えることができる。

〔SI9竪穴住居跡〕

精査を行っていないが、床面直上から古墳時代中期南小泉式期のものと考えられる土師器甕（第10図1）が出土していることから、本住居跡の機能時期も同様の時期と考えられる。

II-2. 遺構について

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡11軒・掘立柱建物跡3棟・井戸跡1基・溝跡5条・土壇2基・柱穴多数・河川跡2条などで、うち竪穴住居跡3軒・土壇2基を精査した。これらの機能時期は古墳時代中期及び古墳時代後期～古代初頭である。ここでは各遺構を機能時期ごとに分類し、遺構の特徴について若干の考察をするとともに、それぞれの時期における本遺跡の様相がどのようなものであったかを考える。

（1）各時期の遺構群の設定

1. 古墳時代中期の遺構 SI9竪穴住居跡（未精査）
2. 7世紀末～8世紀前半の遺構 SI1・3・14竪穴住居跡
3. 機能時期不明の遺構 SK1・2

（2）各時期の様相

1. 古墳時代中期

未精査であるがSI9竪穴住居跡がある。

SI3は1区西側微高地の中央部に位置する。平面形は1辺4m強の正方形を基調とするものと考え

えられ、東壁にカマドが設けられている。S I 18 竪穴住居跡と重複し、これより新しい。S I 18 は 1 辺 6.6m の正方形を基調とするものと考えられ、東壁にカマドが設けられている。S I 9 と S I 18 は、立地や住居の方向、カマド設置場所などの点に類似性を認めることができる。また、吾妻俊典氏の該期土師器の検討によると、東北地方南部地域においてカマドを伴う竪穴住居跡が出現するのは古墳時代中期でも比較的早い段階＝暦年代でおよそ 5 世紀前葉頃と考えられること（吾妻：2003）を考慮すると、S I 18 もまた古墳時代中期を機能時期とする遺構と考えることができる。

今回の調査では、表土等からの例も含めても古墳時代中期の遺物量は少ない。しかし、S I 9・18 のように調査範囲北西部では一定期間継続する該期の生活痕跡が認められる。今回の調査地点は遺跡範囲の南端部にあたり、きわめて限定的なものであることを考慮すると、本遺跡内の該期の遺構は、あるいは調査範囲よりさらに北に分布する可能性がある。

2. 7 世紀末～8 世紀前半

S I 1・3・14 竪穴住居跡がある。

いずれの遺構も 2 区西側微高地に位置する。S I 1 は微高地の西端部、S I 3 は中央部、S I 14 は東端部にある。この微高地の東西幅は約 30m で、遺構の分布密度は比較的高い。住居の方向は S I 1 が北西方向、S I 3・14 が北方向で、S I 1 は北西壁に、S I 3・14 は北壁にカマドが設けられている。

これらのうち、S I 1・14 は住居中軸線よりやや右に寄った位置にカマドが設けられている。また、S I 3 については、S I 3 b はほぼ住居中軸線と等しい位置にカマドが設けられているが、建替え前の S I 3 a について見ると、S I 1・14 と同様に住居中軸線よりやや右寄りの位置に設けられていることがわかる。その他、燃焼部側壁に白色粘土を主体とした土を用いる点、燃焼部側壁の直下に周溝端部があり、住居建築及びカマド構築が、①住居掘り方の掘削→②床面構築→③周溝の掘削（壁材・壁柱の設置）→④カマド構築（燃焼部側壁直下の周溝端部埋没）という手順を経る点、周溝は燃焼部側壁直下で途切れており、燃焼部底面の直下には巡らない点（すなわち最低でも周溝掘削の時点で、どの位置に、どの程度の規模のカマドを設置するかプランが明確化していたことを示す）、煙道端部に煙出しピットが付設される点などが共通しており、住居建築及びカマド構築に関する斉一性が認められる。該期においてこのような構造的特徴が認められる例としては、仙台市欠ノ上 II 遺跡 S I 2 竪穴住居跡（工藤：2000）、蔵王町堀の内遺跡 S I 11・14 竪穴住居跡（佐藤：1997）などが挙げられる。カマドの構造に関しては、燃焼部の形状や煙道との接続、側壁構築材などいわゆる「床上の構造」については資料の蓄積が進んでいるが、燃焼部・側壁下部の構造や周溝との取り合わせなど、「床下の構造」についてはあまり情報が豊富ではないと思われる。上述したようにカマド構築は竪穴住居建築の初期計画の一環である可能性があるため、その手順や構築方法に関する情報の蓄積により該期集落形成過程の解明の助となり得るが、今回は該期の類例を挙げるに留めたい。

また、表土等からのものも含め、出土遺物全体の中に占める該期の遺物の割合はきわめて高く、古墳時代中期の遺物やロクロ土師器などは少量である。このことから、少なくとも今回の調査範囲

にあたる本遺跡南端部においては各時期にわたる長い期間人々が生活していたというのではなく、該期において集中的に生活が営まれたものと考えられる。この点を考慮したうえで、さらにS I 1とS I 8、S I 3・14とS I 10・11・12・16・17各竪穴住居跡の方向が何らかの規制に基づいたかのように一致する点などから、これらの竪穴住居跡も該期の遺構である可能性が高い。

今回の調査では、遺跡範囲南端部において2本のトレンチを設定するような形で調査区が設定された。これら2つの調査区はいずれも、東端部から湿地、微高地、湿地、微高地、河川跡という地形変化が認められる。そしてそれぞれの微高地上～辺縁部において遺構が分布している。それぞれの地形は調査区間を隔てて南北につながっているものと考えられ、本遺跡の立地する舌状丘陵は、南端部で湿地と微高地とが細かく入り組んだ地形となっていたことが推測される。平成13年度に実施した遺構確認調査の結果では、今回の調査範囲よりさらに北側からも竪穴住居跡等の遺構が確認されている。これらの機能時期は判明していないものの、本遺跡南部が集落として大規模に活用されていたことがわかる。

Ⅲ．まとめ

1. 窪田遺跡は宮城県の南西部、刈田郡蔵王町大字平沢字窪田・字田中に所在する。遺跡は円田盆地の西縁部にあたる舌状丘陵上に立地している。この舌状丘陵は西縁を藪川に、東縁を小河川によって区画された南北に長い丘陵である。遺物は遺跡範囲の中央部から南部にかけて散布している。
2. 今回の調査範囲は遺跡範囲南端部にあたる。その結果、本遺跡の南端部は南北方向に湿地や小河川が入り込み、複数の微高地が形成されていることが判明し、遺構はこれらの微高地上～際部に分布していることが把握された。なお、これらの湿地は遺構が形成された時期には半ば埋没していたものの、埋没が完了したのは早くとも古代以降であることも把握できた。
3. 検出した遺構は竪穴住居跡11軒・掘立柱建物跡3棟・井戸跡1基・溝跡3条・土壇2基・多数の柱穴などで、このうち竪穴住居跡3軒を精査した。各遺構の機能時期は7世紀末～8世紀前半頃と考えられる。また、未精査ながら古墳時代中期の竪穴住居跡も確認された。
4. 出土した遺物は弥生土器・土師器・ロクロ土師器・須恵器・赤焼土器・墨書土器・近世陶磁器・石製品・金属製品である。これらのうち量的な主体を占める遺物は7世紀末～8世紀前半の土師器である。
5. 今回の調査によって、本遺跡の南部には古墳時代中期及び古墳時代末期～古代初頭の集落跡が分布することが判明した。調査範囲が限定的なこともあり、その広がりについては把握できていないものの、遺構の分布状況から相当に大規模な集落である可能性がある。

引用・参考文献（年代順）

- 氏家和典（1957） 「東北土師器の型式分類とその編年」 歴史第14輯 東北史学会
- 小川淳一（1980） 「塩沢北遺跡」－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第69集
宮城県教育委員会
- 小井川和夫（1984） 「いわゆる赤焼土器について」－研究紀要第10巻 東北歴史資料館
- 佐々木和博（1984） 「鹿島遺跡」 宮城県文化財調査報告書第101集 宮城県教育委員会
- 蔵王町史編纂委員会(1987) 「蔵王町史 資料編Ⅰ」 蔵王町史編纂委員会
- 加藤道男(1989) 「宮城県における土師器研究の現状」－考古学論叢Ⅱ 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 篠原信彦・吉岡恭平（1990） 「下ノ内遺跡」－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅲ 仙台市文化財調査報告書第136集 仙台市教育委員会
- 千葉孝弥・石本 敬（1991） 「山王遺跡－第10次発掘調査概報」－多賀城市文化財調査報告書第27集
多賀城市教育委員会
- 古川一明・白鳥良一(1991) 「土師器の編年 東北」 古墳時代の研究6 雄山閣
- 後藤秀一他(1994) 「山王遺跡八幡地区の調査」 宮城県文化財調査報告書第162集 宮城県教育委員会
- 長嶋榮一（1994） 「郡山遺跡Ⅳ 平成5年度発掘調査概報」 仙台市文化財報告書第178集 仙台市教育委員会
- 蔵王町史編纂委員会(1994) 「蔵王町史 通史編」 蔵王町史編纂委員会
- 長嶋榮一・熊谷裕行（1995） 「郡山遺跡Ⅴ 平成6年度発掘調査概報」 仙台市文化財報告書第194集
仙台市教育委員会
- 佐藤憲幸他（1996） 「山王遺跡Ⅲ 多賀前地区遺物編」 宮城県文化財調査報告書第170集 宮城県教育委員会
- 菅原弘樹他（1996） 「山王遺跡Ⅳ 多賀前地区考察編」 宮城県文化財調査報告書第171集 宮城県教育委員会
- 佐藤則之他（1997） 「山王遺跡Ⅴ 八幡・伏石地区他」 宮城県文化財調査報告書第174集 宮城県教育委員会
- 佐藤洋一（1997） 「堀の内遺跡」 蔵王町文化財調査報告書第1集 蔵王町教育委員会
- 村田晃一（1998） 「山王遺跡町地区の調査」－県道塩釜線関連調査報告書Ⅱ 宮城県文化財調査報告書第175集 宮城県教育委員会
- 村田晃一（1998） 「栗囲式土器の成立と展開」 『考古学の方法』東北大学文学部考古学研究会会報
東北大学考古学研究会
- 佐久間光平・古川一明他(2000) 「市川橋遺跡の調査」－県道泉～塩釜線関連調査報告書Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第184集 宮城県教育委員会
- 工藤哲司（2000） 「欠ノ上Ⅱ遺跡」 仙台市文化財調査報告書第246集 仙台市教育委員会
- 後藤秀一・村田晃一他(2001) 「山王遺跡八幡地区の調査2」－県道泉～塩釜線関連調査報告書Ⅳ 宮城県文化財調査報告書第186集 宮城県教育委員会
- 佐久間光平(2002) 「窪田遺跡・都遺跡・新城館跡」－名生館遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第188集
宮城県教育委員会
- 村田晃一(2002) 「7世紀集落研究の視点(1)－宮城県山王遺跡・市川橋遺跡を中心として－」－宮城考古学第4号 宮城県考古学会
- 相原淳一(2003) 「十郎田遺跡ほか」－壇の越遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第195集 宮城県教育委員会
- 吾妻俊典(2003) 「陸奥南部におけるカマド出現期の土器」－宮城考古学第5号 宮城県考古学会
- 佐藤洋一(2003) 「蔵王町円田盆地における遺跡分布状況」－宮城考古学第5号 宮城県考古学会

窪 田 遺 跡

写 真 図 版

1. 1区全景
(西から)



2. 2区全景
(東から)



3. 1区西部遺構
分布状況
(南東から)





1. SI1 竪穴住居跡
(南西から)



2. SI1 カマド部分
(南西から)



3. SI3a 竪穴住居跡
(南から)

1. SI3b竪穴住居跡
(南から)



2. SI3bカマド部分
(南から)



3. SI14竪穴住居跡
(南から)





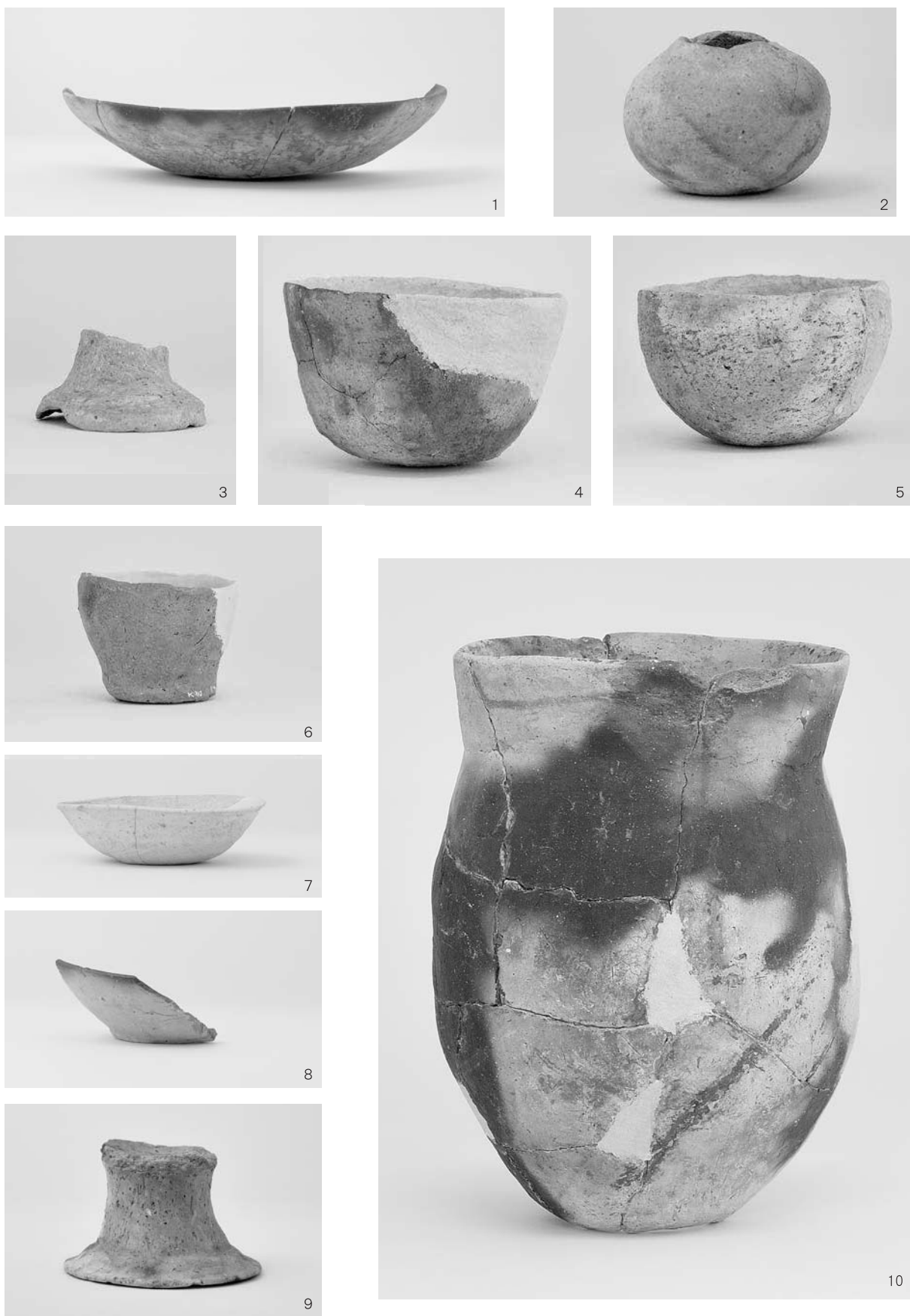
1. SI8、9、18確認状況
(南から)



2. SI10、11確認状況
(南から)



3. SI16、17確認状況
(南東から)



S ≒ 1/3

写真図版 5 窪田遺跡出土遺物(1)

1～3: SI1 4、5: SI3 6: 湿地 7、8: 1区表土 9: 2区表土 10: SI9



2



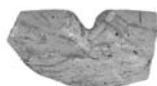
3



4



7



5



6

写真図版 6 窪田遺跡出土遺物(2)

1: SD15 2~4、7: 湿地 5: 1区表土 6: 出土地不明

S ≒ 1/3 (1、2、5、7)

S ≒ 1/2 (3、4)

S ≒ 2/3 (6)

新城館跡の発掘調査

I. 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡7棟、溝跡1条、土壇3基、柱穴多数である。出土遺物は、弥生土器、土師器、ロクロ土師器、須恵器、墨書土器、赤焼土器、剥片などで、総量はコンテナ1箱分である。以下、各遺構と遺物について詳述する。

I-1. A・B区（第1・2図）

本調査区で検出した遺構は、掘立柱建物跡7棟、溝跡1条、土壇3基、柱穴多数である。遺構はA区東部から集中的に検出された。A区東部は東に向って旧地形が下降気味になり、徐々に第II層の堆積が厚くなることから、さらに東側に広がる湿地の際にあたると考えられる。一方、A区中央部は強く削平されており、現耕作土を除去した段階で地山ローム層あるいは粘土層が露出した。この範囲では遺構は検出されなかった。本来はこの範囲にも遺構が分布していたものの、削平により消失した可能性が高い。また、A区西部では近代以降の溝跡が2条確認された。西端部及びB区は湿地となる。

遺物は、古代の土師器や須恵器、墨書土器が出土している。また、この時期の遺構堆積土などから弥生土器、古墳時代中期の土師器が、河川跡、湿地堆積土、表土から赤焼土器、剥片などが少量出土している。

①掘立柱建物跡

S B 1 掘立柱建物跡（第2・3図）

調査区中央部に位置する東西1間、南北1間の建物である。検出面は第II層上面で、S D 1 溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

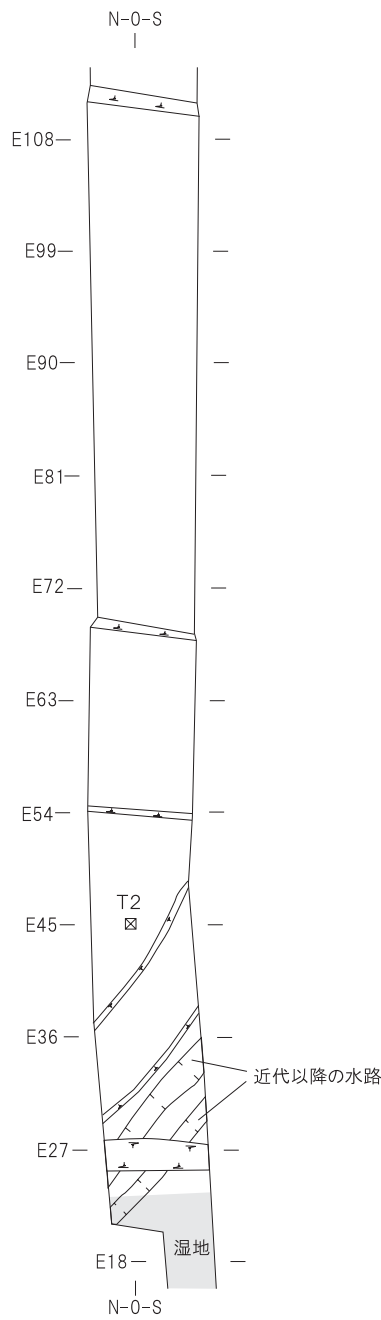
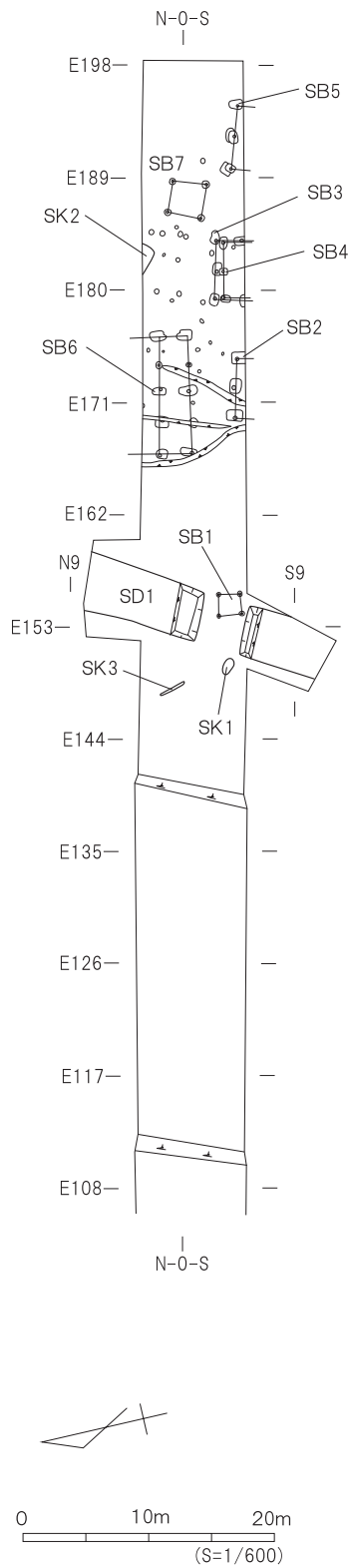
規模は北側柱列総長1.75m、西側柱列総長1.90mである。方向は東側柱列でみると北で11度東に偏している。柱穴は4ヵ所を検出し、全ての柱穴から柱痕跡を確認している。柱穴掘り方は長径32～47cm、短径30～37cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さ16～44cmである。埋土は黒色シルトである。柱痕跡は径12～20cmの円形で、堆積土は黒色粘質シルトである。

遺物は出土していない。

S B 2 掘立柱建物跡（第2・3・6図）

調査区東側に位置する東西2間の建物で、さらに南側調査区外に展開する。検出面は第II層上面で、他の遺構との重複はない。

規模は柱列総長4.8mで、柱間寸法はほぼ2.4m等間である。方向は、北側柱列でみると東で14度南に偏している。柱穴は3ヶ所を検出し、全てで柱痕跡を確認している。柱穴掘り方は長軸115cm程、短軸78～88cmの長方形を呈し、深さ61～68cmである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。柱痕跡は径13～24cmの円形で、堆積土はにぶい褐色・暗褐色・にぶい黄褐色のシルトである。全てで柱材が残存していた。



第1図 調査区全体図

遺物は、柱穴掘り方埋土からごく少量の土師器甕、墨書土器などが出土している。

S B 3 掘立柱建物跡（第2・3図）

調査区東側に位置する東西2間、南北1間以上の建物で、さらに南側調査区外に展開するものと思われる。検出面は第Ⅱ層上面である。S B 4 掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。

規模は北側柱列総長4.7m、柱間寸法は西から2.2m・2.5mで、東側柱列の柱間寸法は2.0mである。方向は東側柱列でみると北で14度東に偏している。柱穴は5ヶ所を検出し、うち4ヶ所で柱痕跡を確認している。柱穴掘り方は長軸94～106cm、短軸70～76cmの長方形もしくは楕円形を呈し、深さ60～84cmで、段掘り状に掘り込まれている。埋土は地山土を含む赤黒色・黒色・黒褐色のシルト・粘質シルトである。柱痕跡は径20cm程の円形で、堆積土は極暗褐色・にぶい黄褐色のシルトである。全てで柱材が残存していた。また2ヶ所で柱材直下に礎板が敷設されているのが確認された。

遺物は、柱穴掘り方埋土からごく少量の土師器坏・甕などが出土している。

S B 4 掘立柱建物跡（第2・3図）

調査区東側に位置する東西2間の建物で、さらに南側調査区外に展開するものと思われる。検出面は第Ⅱ層上面である。S B 3 掘立柱建物跡と重複し、これよりも新しい。

規模は柱列総長4.5m、柱間寸法は西から2.1m・2.4mである。方向は北側柱列でみると東で14度北に偏している。柱穴は3ヶ所を検出し、全てで柱痕跡を確認している。柱穴掘り方は長軸60～103cm、短軸50～60cmの長方形もしくは楕円形を呈し、深さ55～68cmである。埋土は地山土を含む黒色のシルト・粘質シルト・粘土である。柱痕跡は径14～24cmの円形で、堆積土は黒色・黒褐色のシルト・粘質シルトである。

遺物は、柱穴掘り方埋土からごく少量の土師器坏が出土している。

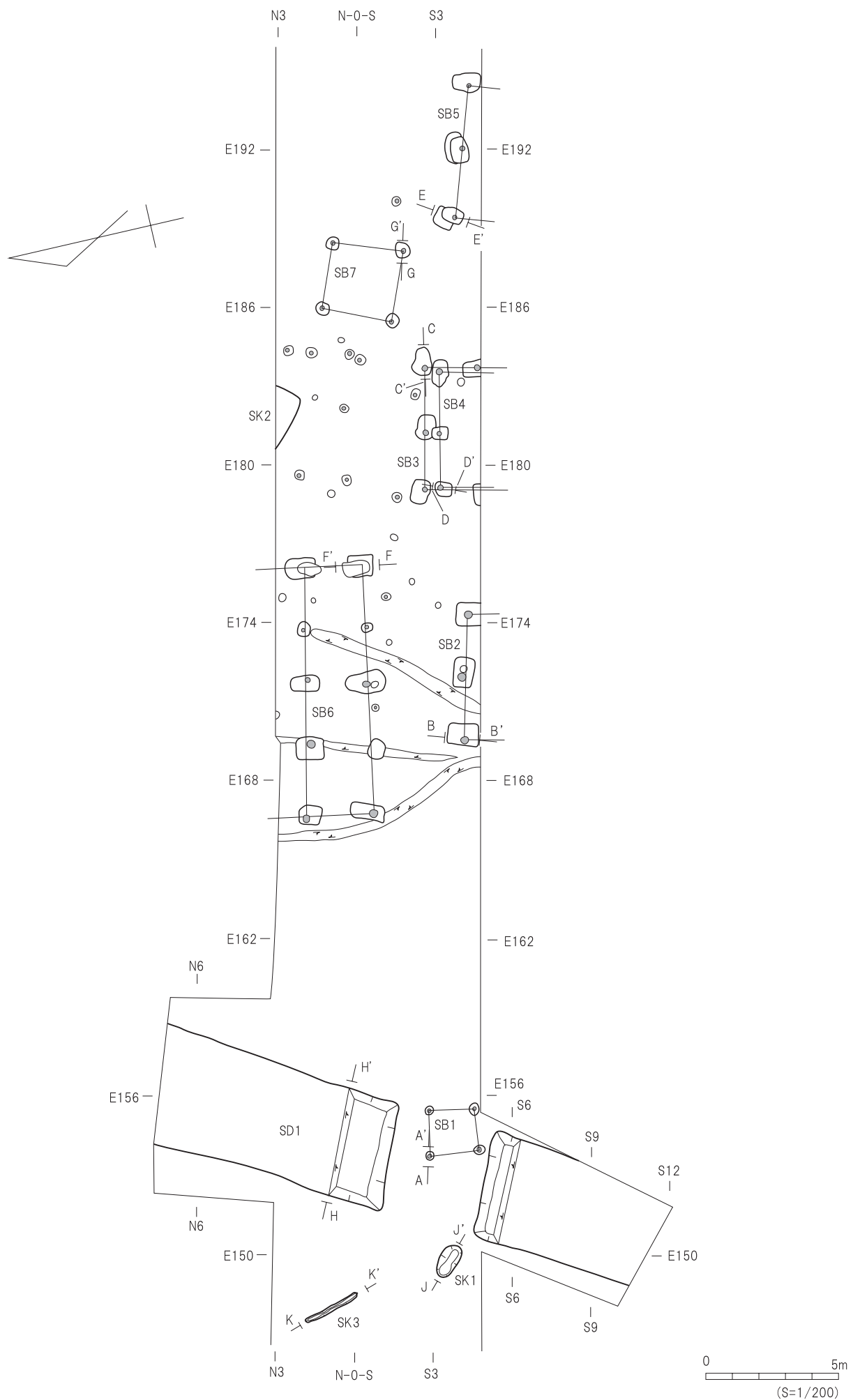
S B 5 a・b 掘立柱建物跡（第2・3図）

調査区東側に位置する東西2間の建物で、さらに南側調査区外に展開するものと思われる。検出面は第Ⅱ層上面である。他の遺構との重複はない。ほぼ同位置で建替えがなされている。ここでは、建替え前の建物跡をS B 5 a 掘立柱建物跡、建替え後の建物跡をS B 5 b 掘立柱建物跡とする。

S B 5 a 掘立柱建物跡の柱穴は2ヶ所を検出した。柱穴掘り方は長軸75～115cm、短軸70cm程の長方形もしくは楕円形を呈するものとみられ、深さは50cm程で、S B 5 b の柱穴と比較してほぼ同じかやや浅い。埋土は黒褐色・暗オリーブ褐色のシルト・粘質シルトである。柱痕跡は確認できなかった。

S B 5 b 掘立柱建物跡の規模は柱列総長5.0mで、柱間寸法は西から2.6m・2.4mである。方向は北側柱列でみると東で19度南に偏している。柱穴は3ヶ所を検出し、全てで柱痕跡を確認している。柱穴掘り方は長軸80～105cm、短軸56～74cmの長方形もしくは楕円形を呈し、深さ55～68cmである。埋土は地山土を含む黒色・黒褐色のシルト・粘質シルトである。柱痕跡は15～22cmの円形で、堆積土は暗褐色・にぶい黄褐色・褐色のシルト・粘質シルトである。2ヶ所で柱材が残存していた。

遺物は、S B 5 a・b ともに出土していない。



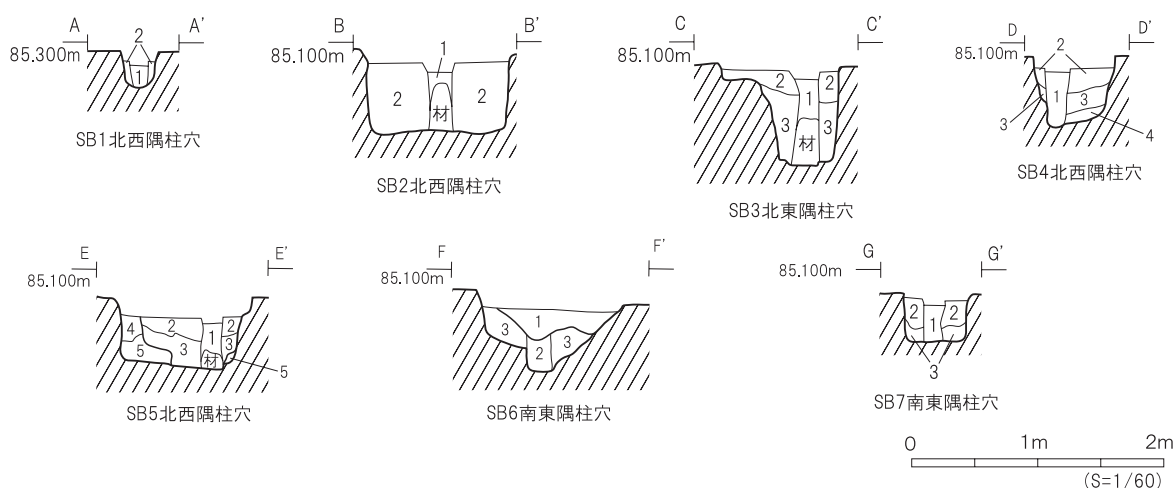
第2図 A区遺構配置図

S B 6 掘立柱建物跡（第2・3図）

調査区東側に位置する東西4間、南北1間以上の東西棟とみられる建物である。さらに北側調査区外に展開するものと思われる。検出面は第Ⅱ層上面である。他の遺構との重複はない。

規模は南側柱列総長9.5m、柱間寸法は西から（2.5m）・（2.4m）・2.2m・2.4mで、西側柱列の柱間寸法は2.5mである。方向は西側柱列でみると北で14度東に偏している。柱穴は10ヶ所検出し、うち9ヶ所で柱痕跡を確認している。また、2ヶ所で柱の切り取りを確認した。柱穴掘り方は長軸44～150cm、短軸34～87cmの隅丸長方形を呈し、深さ18～98cmで、平面規模や深さにばらつきが認められる。埋土は地山土を含む黒色シルト・粘土である。柱痕跡は径12～30cmの円形で、堆積土は黒色粘土である。

遺物は出土していない。



S B 1 北西隅柱穴

層	土 色	土性	備 考
1	黒色(7.5YR1.7/1)	粘質シルト	地山粒をごく少量含む 柱痕跡
2	黒色(10YR2/1)	シルト	

S B 2 北西隅柱穴

層	土 色	土性	備 考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	柱痕跡
2	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む

S B 3 北東隅柱穴

層	土 色	土性	備 考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	柱痕跡
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを少量含む
3	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	地山ブロックをごく多量に含む

S B 4 北西隅柱穴

層	土 色	土性	備 考
1	黒色(7.5YR1.7/1)	シルト	地山粒をごく少量含む 柱痕跡
2	黒色(10YR1.7/1)	シルト	地山粒を少量含む
3	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山粒を少量含む
4	黒色(10YR2/1)	粘 土	地山ブロックを多量に含む

S B 5 北西隅柱穴

層	土 色	土性	備 考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	SB5b柱痕跡
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを多量に含む
3	黒色(10YR1.7/1)	粘質シルト	地山ブロックを含む
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む SB5a掘り方埋土
5	暗赤褐色(2.5Y3/3)	粘質シルト	地山ブロックをごく多量に含む SB5a掘り方埋土

S B 6 南東隅柱穴

層	土 色	土性	備 考
1	黒色(10YR1.7/1)	シルト	地山小ブロックを少量含む 柱切取穴堆積土
2	黒色(10YR2/1)	粘 土	地山小ブロックを少量含む 柱痕跡
3	黒色(10YR2/1)	粘 土	地山ブロックを含む

S B 7 南東隅柱穴

層	土 色	土性	備 考
1	黒色(10YR1.7/1)	シルト	地山粒を少量含む 柱痕跡
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む
3	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む

第3図 S B 1～7 柱穴断面図

S B 7 掘立柱建物跡（第 2 ・ 3 図）

調査区東側に位置する東西 1 間、南北 1 間の建物である。検出面は第Ⅱ層上面である。他の遺構との重複はない。

規模は西側柱列総長2.7m、南側柱列総長2.8mである。方向は西側柱列でみると北で24度東に偏している。柱穴は 4 ヲ所を検出し、全てで柱痕跡を確認している。柱穴掘り方は長径49～59cm、短径48～53cmの楕円形を呈し、深さ40cm前後である。埋土は地山土を含む黒褐色のシルト・粘質シルトである。柱痕跡は径14～20cmの円形で、堆積土は黒色シルトである。

遺物は出土していない。

②溝跡

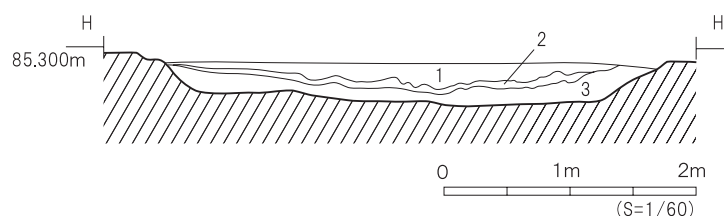
S D 1 溝跡（第 2 ・ 4 図）

遺構分布範囲のほぼ最西端にあたる地点で検出した北微東～南微西方向の溝跡で、検出面は第Ⅱ層上面と第Ⅲ層上面である。他の遺構との重複はない。調査範囲の南側で土橋状に幅3.7 mほど途切れている。検出長は、この途切れを挟んで北側が約 9 m、南側が約 7 m、途切れを含んだ総検出長は約20mで、さらに調査区外南北へ延びる。方向は北で30度東に偏している。規模は上端幅4.0～4.5m、下端幅3.3m、深さ38cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は 3 層に細分され、いずれも自然堆積土である。2 層は植物遺体を多く含む黒褐色粘質シルト層である。遺物は、堆積土上層からごく少量の土師器坏・甕、ロクロ土師器坏が出土している。ロクロ土師器坏の底部は回転糸切り無調整である。

③土壇

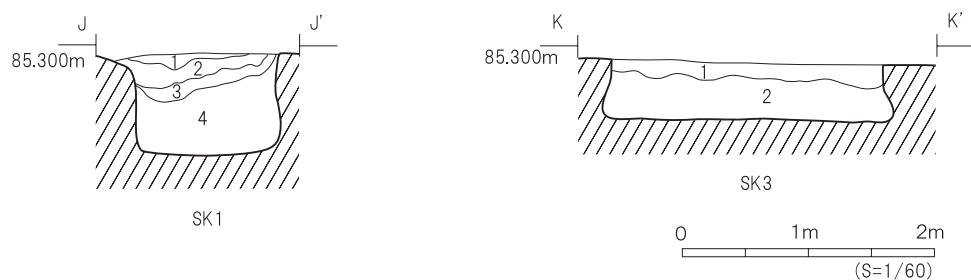
S K 1 土壇（第 2 ・ 5 図）

調査区中央部に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、規模は長径134cm、短径66cm、深さ82cmである。断面形は長方形状を呈する。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は 4 層に細分され、いずれも自然堆積土である。遺物は出土していない。



層	土 色	土性	備 考
1	黒色(7.5YR1.7/1)	粘質シルト	
2	黒褐色(7.5YR2/2)	粘質シルト	植物遺体をごく多量に含む
3	黒色(10YR1.7/1)	粘 土	下層は白色粘土ブロックを多量に含む

第 4 図 S D 1 溝跡断面図



S K 1				S K 3			
層	土 色	土性	備 考	層	土 色	土性	備 考
1	黒色 (10YR1.7/1)	シルト	地山小ブロックをごく少量含む	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山ブロックをごく少量含む
2	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト	地山粒を少量含む	2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	
3	黒色 (10YR2/1)	粘質シルト					
4	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	地山粒を少量含む				

第5図 S K 1、3 土壌断面図

S K 2 土壌 (第2・6図)

調査区東側に位置し、検出面は第Ⅱ層上面である。他の遺構との重複はない。平面形・規模は大半が調査区外になることから不明であるが、現状で長軸2.1m以上、短軸1.2m以上の方形を基調とするものと考えられる。精査を実施していないため詳細は不明である。遺物は、遺構確認面からロクロ土師器坏が出土している。

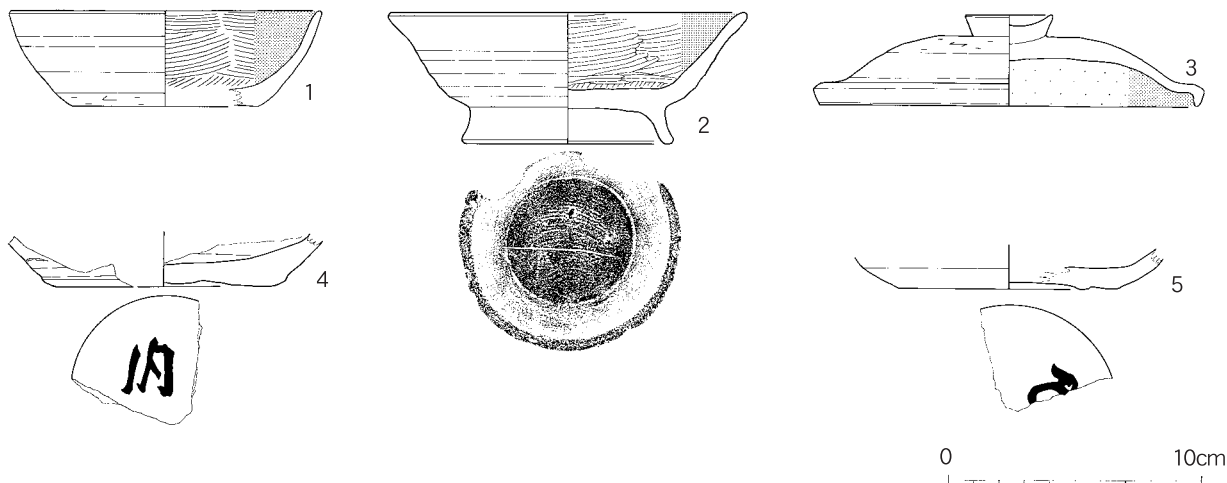
S K 3 土壌 (第2・5図)

調査区中央部に位置し、検出面は第Ⅲ層上面である。他の遺構との重複はない。平面形は南北に細長い隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.2m、幅0.2m、深さ45cmである。断面形は長軸方向では台形状、短軸方向ではV字状を呈する。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積土である。S K 3は、その形態から縄文時代以降の陥し穴と考えられる。遺物は出土していない。

I-2. その他の出土遺物 (第6図)

ここでは、表土など遺構外からの出土遺物について概述する。

今回の調査では、表土などから弥生土器・土師器・ロクロ土師器・須恵器・墨書土器・赤焼土器・剥片などが出土した。その量は少量で、全体形が判明するものはほとんどない。ここでは特徴的なもの5点を図示した。第6図2は土師器高台坏である。高台は八の字状に開くものである。底面にヘラ描きが施される。第6図3はロクロ土師器蓋である。須恵器蓋模倣のもので、口縁部が下方に屈曲して受けを形成する。内面に黒色処理を施す。第6図4・5は須恵器坏で、底面に墨書があり、4は「内」と読める。



No.	区	遺構	層位	種 類	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	器高	残存	備 考	写真	登録
1	A	SK2	確認面	ロクロ土師器・坏	ロクロナデ→(体下~底)回転ヘラケズリ(底)切り離し不明	ヘラミガキ(底面井桁状)→黒色処理	(12.4)	(7.4)	3.8	1/4		4-1	1
2	A		表土	ロクロ土師器・胎体	ロクロナデ(底)回転糸切り→高台接合→ロクロナデ	ヘラミガキ(底面井桁状)→黒色処理	(14.2)	8.4	5.2	3/5	外面底部ヘラ書き「一」	4-3ab	3
3	A		表土	ロクロ土師器・土	ロクロナデ→ツマミ付近回転ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	14.9	—	3.6	1/3	ツマミ径3.5 内面摩滅多い	4-2	2
4	A		表土	須恵器・坏	ロクロナデ 底部切り離しヘラ切り無調整	ロクロナデ	—	9.0	(2.2)	一部	外面底部に墨書「内」	4-4	4
5	A	SB2	堆積土	須恵器・坏	ロクロナデ(底)回転糸切り無調整	ロクロナデ	—	(8.4)	(1.6)	一部	外面底部に墨書「口」	4-5	6

第 6 図 出土遺物

II. 考 察

今回の調査で検出した遺構は掘立柱建物跡7棟・溝跡1条・土壇3基・柱穴多数などである。また、これらの遺構の内外から、弥生土器・土師器・ロクロ土師器・須恵器・墨書土器・赤焼土器・剥片などが出土している。以下、出土遺物と遺構に検討を加え、本遺跡の様相について考察する。

II-1. 遺物について

今回の調査によって出土した遺物の中で、主体を占めるのは土師器で、ロクロ土師器、須恵器がそれに次ぐ。出土量が少なく、ほとんどが表土から得られたもので一括性に乏しく、詳細な検討は不可能である。ここでは土師器とロクロ土師器、墨書土器について若干の整理を行う。

(土師器)

器形が判明するものとしては、坏・甕がある。坏は丸底、有段で内面はミガキの後黒色処理を施すものが多く見受けられる。甕は長胴で、頸部に弱い段を有するものが認められる。このような特徴は古墳時代後期栗圀式～古代初頭にみられる。また、ごく少量だが古墳時代中期南小泉式期のものとみられる遺物も出土している。遺構から出土したものは以下のとおりである。

S B 2 堆積土：甕と思われる小片 数点

S B 3 柱穴掘り方埋土：内面黒色処理の坏、両面に赤彩を施した小片 各1点

S B 4 柱穴掘り方埋土：内面黒色処理の丸底坏 1点

S D 1 堆積土：内面黒色処理の丸底有段坏 数点

(ロクロ土師器)

器形が判明するものとしては、坏・高台坏・蓋がある。坏には、切り離し法不明で底面～体下部に回転ヘラケズリ調整を施すものと、回転糸切り後無調整のものとが認められる。出土量が少ないものの、器形や底部の切り離し、器面調整などから概ね9世紀代のものと考えられる。遺構から出土したものは以下のとおりである。

S D 1 堆積土：回転糸切り後無調整の坏 1点

S K 2 確認面：切り離し法不明、底面～体下部に回転ヘラケズリ調整を施す坏 1点

S K 2 出土の坏は、口径に対して底径が大きめで、体部の開きは小さめのものである。内面は、底面に井桁状、体部に水平方向のヘラミガキを施した後、黒色処理する（第6図1）。

(墨書土器)

2点出土している。いずれも須恵器坏で、全体形は不明だが底面に墨書を施す。

S B 2 堆積土：回転糸切り後無調整の須恵器坏である。判読できなかった（第6図5）。

表土：ヘラ切り後無調整の須恵器坏である。「内」と判読できた（第6図4）。

II-2. 遺構について

今回の調査で検出した遺構は、調査区の制約から全体を捉えられたものは少なく、出土遺物も少量であることから、その機能や時期を明確にすることは難しい。ここでは掘立柱建物跡と溝跡について整理を行う。

(掘立柱建物跡)

建物や柱穴の規模、方向などから以下の2群に分類することができる。

A類、柱穴が比較的小規模な円形～楕円形で、一間四方のもの

B類、柱穴が比較的大規模な長方形～楕円形で、複数間のもの

A類に該当するものとしてはS B 1・7がある。これらはB類とは建物方向も異なっており、重複もしない。特にS B 1は、他と比較して柱間の距離が小さく、検出位置も離れている。一方B類に該当するものとしてはS B 2・3・4・5・6がある。これらは柱穴の規模がほぼ一致することに加えて、建物方向がおおむね一致する点、隅柱が南北方向に長軸をとる例が多いことから南北棟である可能性が高い点、同一場所で建替えが行われている例がある点などが特徴として挙げられる。

A類とB類との間にある様相の違いが、何に起因するものかは不明であるが、B類における規格性・同一位置での建替えなどを見ると、個々の建物の建築というレベルを超えた「土地の利用」に対して指向力が働いていたものと推測することができ、その中で同時にA類のような「規格外」の建物が存在し得る可能性は低いと考えられる。このことから両者の様相の違いは時期の違いという可能性が高い。

B類については前述のとおり、建替えが認められるものがある。まとめると以下のとおりである。

(旧) S B 3 → (新) S B 4

(旧) S B 5 a → (新) S B 5 b

建替えが旧建物の廃絶後すぐに実施されたものであるか否かを明確にすることはできず、また、重複関係にない建物跡の機能時期を推定することも不可能なため、B類の建物群が全体としてどの程度の期間存続したものであるかは不明であるが、短く見積もっても1回の建替えを要する程度の期間、その機能が継続していたことがわかる。

B類の建物跡では、いくつかの柱穴の掘り方埋土などから土師器・墨書土器が出土している。遺物の帰属する時期は古墳時代後期～古代初頭であるが、ごく少量であり、直接遺構の機能時期を示す根拠とはなり得ない。

(溝跡)

遺構分布範囲のほぼ西端において、S D 1が検出された。規模や、土橋とみられる部分を発見していることから、区画施設としての溝跡である可能性が考えられる。掘立柱建物跡A類とは、S B 1が土橋部分にかかっており、両者の間に規格性が認められないことから関連する遺構とは考えられない。一方掘立柱建物跡B類とは、最も近いS B 6から約9mの位置にあたり、その間には遺構等は検出されない。これは外郭施設と建物群との間の空間と考えることもできるが、S D 1と掘立

柱建物跡B群との方向に約30°のずれがある点、B類の検出範囲は調査区の東部にあたり、徐々に湿地へと接続する地域であり、本来建物建築に好適な地形である西側を外として区画することについては疑問が残る。SD1より西側は本来丘陵の主体部で、強い削平を受けて遺構が消失してしまった範囲と考えられることから、あるいはSD1は、同溝跡より西側に分布する遺構群と、湿地際である東側とを区画するものであるのかもしれない。なお、堆積土から回転糸切り後無調整のロクロ土師器坏が出土しているが、遺物量そのものがごく少量であり、直接遺構の機能時期を示す根拠とはなり得ない。

Ⅲ. まとめ

1. 新城館跡は宮城県の南西部、刈田郡蔵王町大字小村崎字扇田に所在する。遺跡は円田盆地中央部の独立丘陵上に立地している。この独立丘陵は周辺の盆地底部とほとんど比高がない程度にまで強い削平を受けており、現在は水田として利用されている。遺物は遺跡範囲全域に散布しているが、その量はまばらである。
2. 今回の調査は遺跡範囲中央部を東西に横断するように実施した。その結果、遺跡主体部と考えられる丘陵部は削平により遺構が消失しており、東端部においてのみ遺構が残存していることが把握された。
3. 検出した遺構は掘立柱建物跡7棟・溝跡1条・土壇3基・柱穴多数などで、掘立柱建物跡は2群に分類することができた。また、溝跡は土橋状部分を持ち、区画施設である可能性があることがわかった。しかし、各遺構の全体規模や機能時期などを把握することはできなかった。
4. 出土した遺物は弥生土器・土師器・ロクロ土師器・須恵器・墨書土器・剥片などで、その多くは表土から得られたものである。遺物の出土量はきわめて少なかった。時期的な主体を占めるのは古墳時代後期～古代初頭の土師器である。
5. 今回の調査によって、本遺跡では（縄文時代）・弥生時代・古墳時代中期～古代初頭・平安時代の各時期の生活の痕跡を認めることができた。しかし、これらの時期を通じて継続的に生活が営まれていたかどうかは不明である。
6. 本遺跡は従来「館跡」と称されてきたが、今回の調査では城館に関わる遺構・遺物は確認されなかった。新城館は安永年間の小村崎村風土記御用書出中の「古館」の条にもその記述が見られないばかりか、その他の文献にも登場せず、また口頭伝承も存在しない。かつてこの地に城館が存在したとしても、主体部たるべき丘陵部はほぼ完全に削平されていることが判明したので、今後この城館についてあらたな情報の蓄積を期待するのは難しいであろう。

引用・参考文献（年代順）

- 氏家和典（1957） 「東北土師器の型式分類とその編年」 歴史第14輯 東北史学会
- 小川淳一（1980） 「塩沢北遺跡」－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第69集 宮城県教育委員会
- 小井川和夫（1984） 「いわゆる赤焼土器について」－研究紀要第10巻 東北歴史資料館
- 佐々木和博（1984） 「鹿島遺跡」 宮城県文化財調査報告書第101集 宮城県教育委員会
- 蔵王町史編纂委員会（1987） 「蔵王町史 資料編Ⅰ」 蔵王町史編纂委員会
- 加藤道男（1989） 「宮城県における土師器研究の現状」－考古学論叢Ⅱ 芹沢長介先生還暦記念論文集 刊行会
- 古川一明・白鳥良一（1991） 「土師器の編年 東北」 古墳時代の研究6 雄山閣
- 森 貢喜（1991） 「都遺跡」－合戦原遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第140集 宮城県教育委員会
- 後藤秀一他（1994） 「山王遺跡八幡地区の調査」 宮城県文化財調査報告書第162集 宮城県教育委員会
- 後藤秀一・村田晃一・岩見和泰（1994） 「藤田新田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第163集 宮城県教育委員会
- 蔵王町史編纂委員会（1994） 「蔵王町史 通史編」 蔵王町史編纂委員会
- 佐藤憲幸他（1996） 「山王遺跡Ⅲ 多賀前地区遺物編」 宮城県文化財調査報告書第170集 宮城県教育委員会
- 菅原弘樹他（1996） 「山王遺跡Ⅳ 多賀前地区考察編」 宮城県文化財調査報告書第171集 宮城県教育委員会
- 佐藤則之他（1997） 「山王遺跡Ⅴ 八幡・伏石地区他」 宮城県文化財調査報告書第174集 宮城県教育委員会
- 村田晃一（1998） 「山王遺跡町地区の調査」－県道塩釜線関連調査報告書Ⅱ 宮城県文化財調査報告書第175集 宮城県教育委員会
- 村田晃一（1998） 「栗田式土器の成立と展開」 『考古学の方法』東北大学文学部考古学研究会会報 東北大学考古学研究会
- 佐久間光平・古川一明他（2000） 「市川橋遺跡の調査」－県道泉～塩釜線関連調査報告書Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第184集 宮城県教育委員会
- 後藤秀一・村田晃一他（2001） 「山王遺跡八幡地区の調査2」－県道泉～塩釜線関連調査報告書Ⅳ 宮城県文化財調査報告書第186集 宮城県教育委員会
- 佐久間光平（2002） 「窪田遺跡・都遺跡・新城館跡」－名生館遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第188集 宮城県教育委員会
- 村田晃一（2002） 「7世紀集落研究の視点(1)－宮城県山王遺跡・市川橋遺跡を中心として－」－宮城考古学第4号 宮城県考古学会
- 相原淳一（2003） 「十郎田遺跡ほか」－壇の越遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第195集 宮城県教育委員会
- 佐藤洋一（2003） 「蔵王町円田盆地における遺跡分布状況」－宮城考古学第5号 宮城県考古学会

新 城 館 跡

写 真 図 版

1. 遺構分布状況
(東から)



2. 遺構分布状況
(西から)



3. SB2、6掘建柱
建物跡
(南から)





1. SB2掘建柱建物跡完掘
(東から)



2. SB3、4掘建柱
建物跡
(南から)



3. SB3北東隅柱穴
断面
(北から)

1. SB5掘建柱建物跡
(南から)



2. SD1溝跡
(南から)



3. SD1土橋状部
(東から)





1



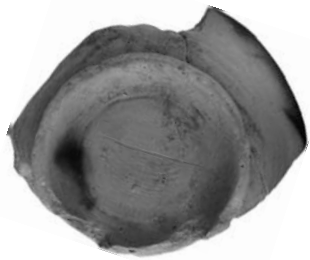
2



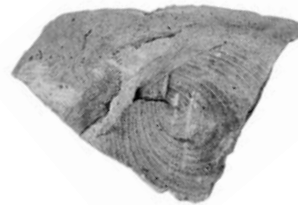
3a



4



3b



5

写真図版 4 新城館跡出土遺物

1 : SK2 2~4 : 表土 5 : SB2

S ≒ 1/3 (1~3b)

S ≒ 1/2 (5)

S ≒ 1 (4)

報 告 書 抄 録								
ふ り が な		みやこいせきほか						
書 名		都遺跡ほか						
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名		蔵王町文化財調査報告書						
シリーズ番号		第3集						
編 著 者 名		佐藤洋一・小泉博明						
編 集 機 関		蔵王町教育委員会						
所 在 地		〒989－0891 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北5 TEL0224－33－2018 FAX0224－33－2019						
発 行 年 月 日		西暦2005年（平成17年）3月						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所 在 地	市町村	遺跡番号	。 ’ ”	。 ’ ”			
都 遺 跡	宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字都	43010	05015	38° 7′ 6″	140° 41′ 36″	2003.05.12 ～ 2003.07.31	約4,420㎡	県営ほ場整備事業 円田2期地区経営 体育成基盤整備事業 実施に伴う事前調査
窪 田 遺 跡	宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字窪田		05193	38° 7′ 51″	140° 41′ 27″	2003.11.25 ～ 2003.12.10 追加調査： 2004.03.10 ～ 2004.03.17	約2,030㎡ 追加調査： 約150㎡	
新 城 館 跡	宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字扇田		05049	38° 7′ 53″	140° 41′ 43″	2003.05.12 ～ 2003.07.31	約1,890㎡	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
都 遺 跡	集 落 跡 行政遺構？	弥生・古墳前～後期・奈良・平安中世・近世	竪穴住居跡3軒、柱列2条、溝跡10条、井戸跡3基、土壙10基		弥生土器、土師器、ロクロ土師器、須恵器、瓦、墨書土器、石製模造品、石器			
窪 田 遺 跡	集 落 跡	弥生・古墳前～後期・奈良・平安中世・近世	竪穴住居跡11軒、掘建柱建物跡3軒、井戸跡1基、溝跡3条、土壙2基		弥生土器、土師器、ロクロ土師器、須恵器、赤焼土器、墨書土器、近世陶磁器、石製品、金属製品			
新 城 館 跡	城 館 跡 集 落 跡	弥生・古墳中～後期・奈良・平安	掘建柱建物跡7棟、溝跡1条、土壙3基		弥生土器、土師器、ロクロ土師器、須恵器、赤焼土器、墨書土器			

蔵王町文化財調査報告書 第3集

都 遺 跡 ほか

2005年（平成17年）3月発行

発 行 蔵王町教育委員会

宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北5
〒989-0892 TEL(0224)33-2018

印 刷 (株) 津 田 印 刷

宮城県柴田郡大河原町字東原町13-5
TEL(0224)52-5550
